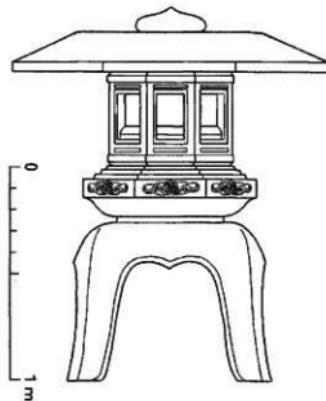


富山市内石造物等調査報告書

III



黒部市倉田邸の（伝）富山城下雪見燈籠



射水市海経寺の常顯寺川石工
中川甚右衛門作一字一石塔

2014

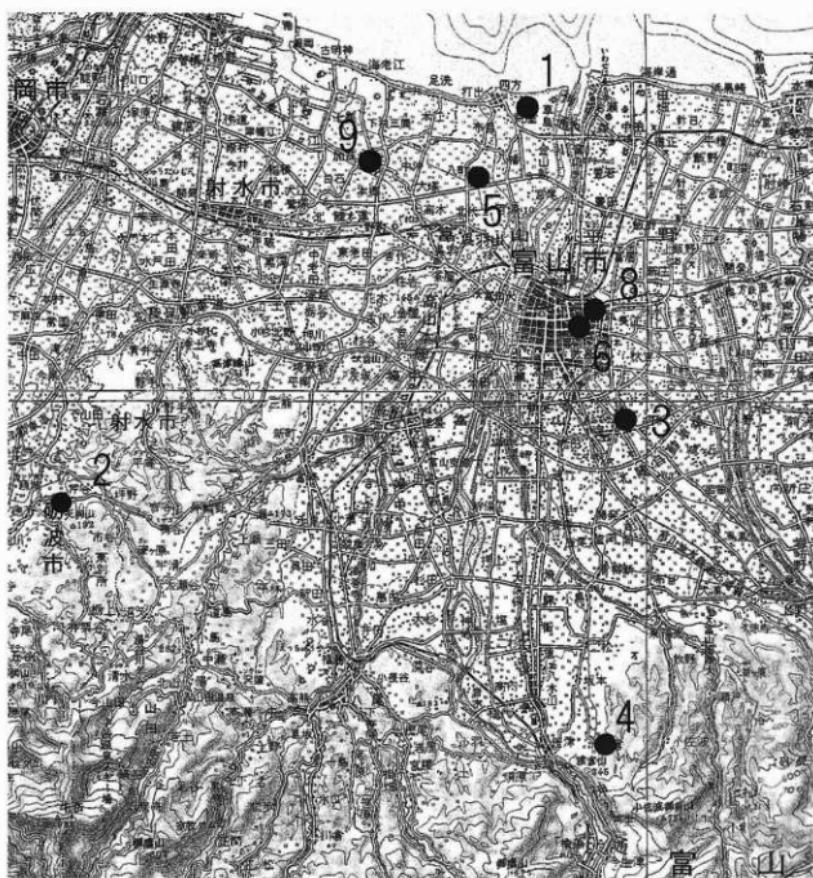
富山市教育委員会
埋蔵文化財センター

例　　言

- 本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した、市内に所在する近世石造物あるいはそれらと関連する石造物の調査報告書である。
- 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。
浦畠奈津子、大野 究、尾田武雄、金山昌浩、亀田正夫、久々忠義、倉田一幸、酒井省三、酒井靖春、佐藤武彦、滝川重徳、武内淑子、中村由克、西井龍儀、荻原大輔、平井一雄、福江 充、藤田富士夫、前田英雄、間野 達、三浦知徳、安田良栄、米原 寛、医王山東菴寺、十二王山吉祥寺、稻荷山海禪寺、芹谷山千光寺、船岡山帝龍寺、立本山刀尾寺、藤居山富山寺、越中稻荷神社、富山金刀比羅神社、五輪山龍高寺、石川県金沢城調査研究所、富山市郷土博物館（順不同、敬称略）
- 本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行った。

目　　次

例言	1		
調査位置図	2	III 一字一石塔	
I 宝篋印塔		射水市平等山海禪寺	104
1 稲荷山海禪寺宝篋印塔	3		
2 芹谷山千光寺宝篋印塔	16	IV 考察	
3 立本山刀尾寺宝篋印塔	39	1 富山藩主金岡氏の石塔寄進について	126
4 船岡山帝龍寺宝篋印塔	53	2 富山町石工見上兵右衛門について	129
5 十二王山吉祥寺宝篋印塔	67	3 富山県東部の近世雪見燈籠の編年 と系譜	136
II 雪見燈籠			
1 富山金刀比羅神社燈籠	80	参考引用文献	144
2 黒部市倉田邸庭園燈籠	89	報告書抄録	145
3 越中富山稻荷神社燈籠	97		



- 1 海禪寺
- 2 千光寺（砺波市）
- 3 刀尾寺
- 4 帝龍寺
- 5 吉祥寺
- 6 金刀比羅神社
- 7 倉田邸（黒部市）
- 8 越中稻荷神社
- 9 海翁寺（射水市）

I 宝篋印塔

1 稲荷山海禪寺

- (1) 調査の目的 富山町石工佐伯伝右衛門製作石造物の記録調査
(2) 調査日 平成 25 (2013) 年 5 月～6 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 富山市四方西岩瀬 稲荷山海禪寺境内
(5) 種別 宝篋印塔
(6) 年代 文化 13 (1816) 年

(7) 海禪寺の概要

稻荷山海禪寺は真言宗古刹である。

大宝元 (701) 年文武天皇第九皇子経の宮 (仏性上人) 開基と伝える。当時打出の海中に毎夜怪光が出現し、上人が地元の者 (稻荷明神の化身) に従い沖で網を下ろしたところ、1 尺 5 寸の黄金の釈迦如来が引揚げられ、これを祀って海禪寺を建立したと伝える。

弘法大師が大同 3 (808) 年当寺に立ち寄った際、県指定文化財聖観音菩薩立像を刻んだという。この像は様式からみて鎌倉初期の作とされている。またこのとき華厳宗から真言宗に転宗したという。

寺地はもと富山市四方西岩瀬沖にあったが、天德 2 年岩瀬の「石の鳥居」という所に移転し、その後元禄 8 (1695) 年海岸食により移転となり、現在地に移転が完了したのは寛延 3 (1750) 年である。その様子は同寺に伝わる「西岩瀬古図」により判明する [布目 1982・1987 ほか]。

境内には、宝篋印塔のほか、39 世快円住職の五輪塔形大型墓石がある。観音堂内には金屋石製狛犬一対がある。

(8) 調査概要

① 経緯

本石塔は、海禪寺境内入口南側に所在する。組合式の宝篋印塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。かつては現在地から 10m ほど北西の本堂前にあったが、何らかの事情で移転した。塔本体の遺存状態は良好である。

② 全体構成

本石塔は、コンクリート基礎の上に存在する。石塔の全高は 12 尺 4 寸 3 分 (376.6cm) である。石塔の構成は、上から、相輪・笠・塔身 5 段、基礎 2 段、基壇 5 段の計 14 段構成である。

③ 相輪 上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の構成で、1 石で造る。

宝珠は半球形で、上端は小さく尖る。請花は上下とも二重弁で、主弁 6 弁、間弁 6 弁の計 12

表1 海禪寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		備考
		寸	cm	寸	cm	
相輪	相輪	24.5	74.2	8	24.2	
笠	笠	12.2	37.0	22.4	67.9	軒上6段、軒下2段
塔身	輪1	9.7	29.4	9	27.3	4面に梵字種子
	反花	2	6.1	13.7	41.5	
	輪2	14.2	43.0	13.7	41.5	正面に「宝篋印塔」、3面に銘文
	請花	7.5	22.7	19	57.6	
基礎	鏡頭形	4.5	13.6	15.5	47.0	
	反花	4	12.1	21.8	66.1	
	基礎	4	12.1	21.8	66.1	
基壇	基壇1	8.5	25.8	26.3	79.7	4面に刻銘
	基壇2	8.7	26.4	30	90.9	4面に刻銘
	基壇3	9.5	28.8	34.2	103.6	4面に刻銘
	基壇4	10	30.3	38.3	116.0	4面に刻銘
	基壇5	5	15.2	43.4	131.5	
計		124.3	376.6			

弁構成である。主弁は三角形を呈し、間弁は稜をもつ。九輪は、等間隔に置かれ、九輪の表面は平らである。伏鉢は、丸みを帯び、無文である。

④笠 軒上 5 段、軒下 2 段である。軒の上 1 段目は三角形に突出する段であり、軒との間には中央部にのみ隅飾突起末端から伸びる突起がある。軒上 3~5 段目は、階段状となり、上ほど小さい。

隅飾突起は 39.5° の角度で外側へ広がる。斜めとなる下端は、緩やかにカーブし S 字状となる。他の宝篋印塔はすべてこの部分は直線であり、本例は特殊といえる。隅飾突起内面の文様は、輪郭を巻く弧下端が 2 つに分かれる。内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する。隅飾突起上面には、先端から 1.5 寸 (4.5cm) の中央に小穴がある。これは相輪上部と隅飾突起との間に金属性鎖を渡して装飾するための輪金具取付け穴である。金具は欠失している。

軒下は階段状に小さくなる。最下段の四隅下面には、小穴が開けられ銅製金具が輪状に取り付けられている。風鐸等が取り付けられていたと思われるが、欠失する。

⑤塔身 4 石 5 段の構成で、上から軸 1、反花、軸 2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸 2 を 1 石で造る。

A 軸 1 やや縦長の方形石の四面に梵字種子を彫る。額内を彫り込み、内側に月輪とその下に蓮弁を浮彫りする。月輪の中央に梵字種子を葉研影で陰刻する。4 つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味するとされる。四仏は通常定まった方位に配置される。北面は不空成就如来（梵字種子：アク）東面は阿閦如来（梵字種子：ウーン）、南面は宝生如来（梵字種子：タラーク）、西面は阿弥陀如来（梵字種子：キリーク）である。本塔では、西面を正面とし、西面がキリークで正しい向きである。月輪下には蓮弁がある。主弁 5 葉と子葉 3 弁からなり、子葉は中央の 1 本のみくの字に折れ曲がる。額内余白は、粗いハツリ整形が行われる。

B 反花 軸 2 と 1 石で彫る。主弁 2 段 \times 8 葉 = 16 弁の蓮弁で、間に間弁を置き、計 24 弁である。弁の厚みは薄い。蓮弁の先端は尖って反る。下段の間弁のみ先端が縦長の稜がある。

C 軸 2 反花と 1 石で彫る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面となる西面は、「奉造立妙塔一基／梵字シッチャリア／奉納宝印神咒」と彫り、この塔の趣意を表す。宝篋印陀羅尼經を意味する梵字シッチャリアは、中央上部に大きく彫る。

北面は「経曰若有末世四／輩弟子善男善女／為無上道盡力造／塔安置神咒所得／功德說不可盡」とあり、経文である。

東面は「回施法界利益／回向無上大菩提／時文化十三丙子年正月／稻荷山海禅寺三十九世快円」とあり、願意、造立年月及び願主を示す。文化 13 年は西暦 1816 年である。快円は、海禅寺 39 世住職である。

南面は「又曰若人求福至／其塔所一花一香／礼拜供養右旋行／由是功德一切所／願任意満足」とあり、経文である。

北面と南面の銘文の内容は、宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」(大正新脩大藏經 T.1022B) の 19.0714b15~19 及び同 22 からの経文の引用である。北面から南面への移行は途切れなくつながる。全体の銘文の流れは、正面（趣意）→ 北面（経文）→ 南面（経文）→ 東面（願意・造立年）となる。

D 請花 1 石で造る。主弁 2 段 \times 8 葉 = 16 弁の蓮弁で、間に間弁を置き、計 24 弁である。上段の弁の厚みは薄く、幅広い。弁の先端は反らず、丸い。下段の弁の先端は、弁縁が厚く丸い。中央部も厚みがある。

E 鎧頭形(敷茄子) 1石
で造る。平面形は四角形で、側面の断面は半円形である。側面は4面とも無文である。
⑥基礎 2段からなる。上部の反花とその下の方形石を1石で造る。

反花は、主弁が單弁8葉×2段で、間弁をもつ。主弁の弁先端は尖って大きく反る。上段の弁の方が反りは大きい。基礎側面は四面ともに無文である。

⑦基壇(表2)

A 規格 5段からなる板石組基壇である。1~3段目は6石、4段目は10石、5段目は7石の板状の石で構成される。5段目は高さが低く、刻銘がない。板石は計35石である。

板石単体の長さは、最小1尺8分(32.7cm)から最大3尺5寸5分(107.6cm)である。小口面は幅3.8尺~7.3尺である。

板石表面の整形は、ビシャン叩きにより仕上げられている。表面には簾状の跡が残る。

基壇内部は中空である。内部はモルタルで間詰され、修復完成時に執り行われた祭式用の花瓶等が納められていた。

B 刻銘 基壇5段のうち、上から4段目までには楷書陰刻による刻銘がみられる。ただし、4段目の南東隅部分の切石3枚には刻銘が見られない。

刻銘の内容は、4段目の南東隅No.23石材の東面が石工名であるほかは、戒名と僧籍者位号、及びその中に挿入された小文である。小文には「二十三日聖鑑」(No.15石材)、「十五日聖鑑」(No.20石材)、「先祖代々」(No.3,9,15,16,17,21,28石材)7石がある。

刻銘された人々は、僧籍者・戒名者・俗名者等で、全部で255人になる(表3)。それらの分析については、考察で行う。

⑧補修痕跡 各部材は造立当初のものと推定されるが、各石材は、モルタルで接着され、一部防水コーティングを施している部分もある。

表2 基壇板石規格・刻銘

段	番号	位置	長		高		厚		刻銘種類
			尺	cm	尺	cm	尺	cm	
1段目	1	西面	16.5	50.0	8.5	25.8	計測不能		戒名
	2	北面	13.3	40.3	8.5	25.8	4.7	14.2	戒名
	3	北面	12.7	38.5	8.5	25.8	5	15.2	戒名
	4	東面	16	48.5	8.5	25.8	計測不能		戒名
	5	南面	13	39.4	8.5	25.8	5.2	15.8	戒名
	6	南面	13	39.4	8.5	25.8	5.1	15.5	戒名
2段目	7	西面	18.2	55.1	8.7	26.4	4.2	12.7	戒名
	8	西面	12.8	38.8	8.7	26.4	3.8	11.5	戒名
	9	北面	22.2	67.3	8.7	26.4	計測不能		戒名
	10	東面	15	45.5	8.7	26.4	3.75	11.4	戒名
	11	東面	15	45.5	8.7	26.4	3.8	11.5	戒名
	12	南面	21.6	65.4	8.7	26.4	計測不能		戒名
3段目	13	西面	24.4	73.9	9.5	28.8	計測不能		戒名
	14	北面	16.8	50.9	9.5	28.8	5	15.2	戒名
	15	北面	17.2	52.1	9.5	28.8	5	15.2	戒名
	16	東面	25	75.8	9.5	28.8	計測不能		戒名
	17	南面	16.8	50.9	9.5	28.8	4.2	12.7	戒名
	18	南面	17	51.5	9.5	28.8	4.8	14.5	戒名
4段目	19	西面	10.8	32.7	10	30.3	計測不能		戒名
	20	西面	14.7	44.5	10	30.3	5.7	17.3	戒名
	21	北面	13	39.4	10	30.3	計測不能		戒名
	22	北面	14	42.4	10	30.3	計測不能		戒名
	23	東面	14.4	43.6	10	30.3	5.3	16.1	石工名
	24	東面	11.4	34.5	10	30.3	計測不能		戒名
5段目	25	東面	12	36.4	10	30.3	4.1	12.4	
	26	南面	16.8	50.9	10	30.3	計測不能		
	27	南面	11.9	36.1	10	30.3	計測不能		戒名
	28	西面	12.8	38.8	10	30.3	5.25	15.9	戒名
	29	西面	18	54.5	5	15.2	計測不能		
	30	西面	19.4	58.8	5	15.2	7.2	21.8	
	31	北面	35.5	107.6	5	15.2	●#VALUE!		
	32	東面	13.2	40.0	5	15.2	計測不能		
	33	東面	23	69.7	5	15.2	7.3	22.1	
	34	南面	15	45.5	5	15.2	計測不能		
	35	南面	20.9	63.3	5	15.2	6	18.2	
		平均	28.3	85.9					

(9) 考察

①石塔の意義

宝篋印塔はいわゆる宝塔であり、その中に宝篋印陀羅尼經を奉納することにより功德を得られるとして、宝篋印塔の造立が鎌倉期以降盛んに行われた。

中世（鎌倉・室町・戦国時代）における宝篋印塔は、本例のように塔身全部を刻銘とするものはほとんど見当たらず、梵字種子（パン・キリーク・アーンクなど）や阿弥陀如来坐像等像容を刻出するものが主である。

近世期（江戸時代）における宝篋印塔は、形態や造立目的等の多様性から、石塔形式としての確立した分類編年ではなく、中世期からの延長として概略的な変化変容について述べられることが多い。刻銘からのアプローチが一部あるが、特に塔内に納められた經文あるいは縹石經との関係性の分析は、内部の発掘例がほとんどないため検討事例が少ない。近世期における宝篋印陀羅尼經奉納方式の解明はまだ不十分であるといえる。

宝篋印塔造立は、江戸中期18世紀後半以降に隆盛し、主として寺院境内に設置された。密教では真言宗・天台宗、律宗では曹洞宗寺院を中心としており、3mを超える大型のものも多い。

これまで行った真言宗寺院医王山東薬寺・五毅山龍高寺・藤居山富山寺における宝篋印塔及び縹石經の分析から、18世紀末～19世紀中頃における宝篋印塔造立は、宝篋印陀羅尼經の書写・納置による造立祭祀という共通性のもとに行われたことが判明した。

宝篋印塔陀羅尼經に書かれた宝篋印塔造立の趣旨は、手段として宝篋印陀羅尼經の納経が行われることが本来の形である。しかし、中世以来全国における宝篋印塔造立の現状を見ると、納経された經典（縹石經が主）は法華經等が主体であり、宝篋印陀羅尼經はごくわずかである。

この意味で、富山における18世紀末～19世紀中頃における宝篋印塔造立の祭祀のありかた、すなわち宝篋印陀羅尼經の納経行為は、元來の宝篋印塔造立の趣旨に立ち戻ったものであり、仏教史においても大きな画期を示すものと評価できる。

②宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯については、願意・造立年等を記した軸2銘文からは、十分読み取ることができない。

本石塔を造立した39世快円は、38世円雄を筆頭者にし、石工を除き250名の位号者・俗名者の名を刻銘した。このことは、本石塔の造立にあたり、檀信徒らの寄付を募ってその記録を残したことと示すと考えられる。海禪寺のことを紹介した諸記録には、本石塔が造立された文化13年前後の寺院関係記事は見当らない。筆頭者である38世円雄は、富山寺過去帳面によれば、寛政11（1799）年死去している。本石塔の造立は円雄の死から17年後であることから、円雄の17回忌を記念し、関係者の財政的援助を得て、年忌供養として造立した可能性がある。

③基壇刻銘者について

255人の刻銘者は、僧籍者9名、位号者240名、俗名者6名に大別される（表3）。

僧籍者は全体の3.5%である。その筆頭は、基壇1段目右端の円雄で、快円の前代となる38世住職である。次の伝依沙弥尼は円雄室であろう。沙弥・沙弥尼及び法尼は、僧籍者室あるいは有力檀家と考えられるため、位号者に含めることとする。

位号者は240人で、全体の94.1%に及ぶ。このうち檀信徒とみられる真言宗信徒は230人、他寺淨土真宗信徒とみられる釈号者8人、その他不明者2人である。不明とした目〔日十台〕・社便是、寺社に仕える職業と推定される。

有力信徒である院号保持者は、24人で10%を占める。院号保持者のうち、№149「密窓院真山道法居士」は、真言宗藤居山富山寺の初代宝篋印塔（寛政5（1793）年造立）において、富山寺再建に功績があったとして顕彰され石塔を造立したという人物である。富山寺過去帳（幕末～近代に改製）にこの戒名は見えず、詳細は不明である。富山寺再建の功績とは財政的支援と思われ、この人物はおそらく円雄代において、海禅寺信徒としても大きく財政的貢献をした人物だったのであろう〔富山市埋蔵文化財センター編 2013〕。

なおこの「密窓院」は、本章5で述べる富山市八町十二王山吉祥寺宝篋印塔等の被供養者刻銘にも見え、富山藩士金岡氏の関係者であることが判明している。

また、院号保持者のうち、№240「林光院妙容為雲大姉」は、№239「宿性院真宗了雲居士」の室とみられる。富山寺過去帳№291に同じ戒名が見え、享和2（1802）年5月3日没である。富山寺檀家の一つ木村家の一人であるが、木村家は県外に転出し、転出以前の在所は不明である。

居士・大姉の位号者が最も多く100人で、位号者の41.7%である。道号+戒名者がそのうち60人、道号を持たない者40人である。

信士・信女は73人で、位号者の30.4%である。道号+戒名者がそのうち28人、道号を持たない者45人である。童子・童女は27人で、位号者の11.3%である。道号+戒名者がそのうち2人である。

宗派が異なる釈号者は、位号者全体の3.3%である。信徒の血縁者と推定される。

俗名者は全体の2.4%である。石工5名と姓を持つ者1名である。後者は武士と推定されるが、富山藩士名簿（『天保9年富山藩分限帳』）には記載がない。石工については次項で説明する。

④製作石工について

本石塔の製作石工は、刻銘にみるとおり5人である。筆頭に挙がっている伝右衛門が棟梁として総括責任者の役割を果たし、他の4人（善六・善右衛門・小沢七兵衛・清藏）が熟練度に応じ分担して石塔製作に当たったと考えられる。

伝右衛門とは、富山城下町に工房をもつ富山町石工佐伯伝右衛門である。伝右衛門の詳細については古川の論考に詳しい〔古川2013a〕。ここでは、この論考に従い判明した内容を述べる。

本石塔の製作に携わったのは、2代である伝右衛門吉忠である。吉忠は、寛政3年常楽寺宝篋印塔を製作していることから、海禅寺宝篋印塔が最も新しく、伝右衛門最後の製作品と位置付けられる。

小沢七兵衛について、小沢姓の石工は、これまで富山町石工として「小沢平吉」が知られる〔古川2012b〕が、年代・工房地とも不明であり、七兵衛との先後関係や師弟関係等も不明である。

善六・善右衛門・清藏の3人の石工の名は初出である。いずれも富山町石工と推定される。

（10）まとめ

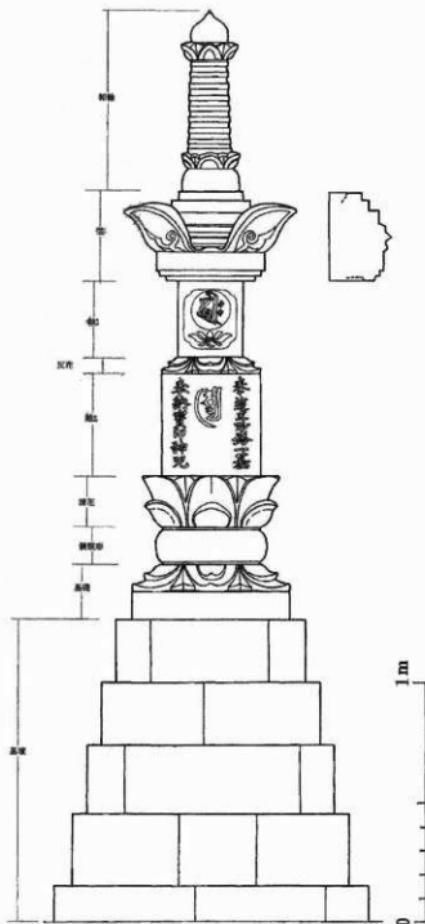
本石塔は、文化13年に当寺39世快円住職が発願し、造立したものである。その契機は先代38世円雄住職の没後17回忌の追善供養と推定される。塔基壇には僧籍者9人・戒名者240人・俗名者1人の計250人の刻銘がある。筆頭者は38世円雄住職とその室であり、残る248人は檀信徒とその関係者とみられる。これらの人々の血縁者が故人の追善供養のため寄進を行い、造立したものと考えら

表3 刻銘者内訳

区分	細分	人数	小計
僧籍者	大和尚	1	9
	和尚	3	
	法印	1	
	阿闍梨	1	
	その他	3	
位号者	沙弥・沙弥尼	5	230
	法尼	1	
	院号保持者	24	
	居士・大姉	100	
	信士・信女	73	
釈号者	童子・童女	27	8
	計	255	

れる。戒名者の一人は、富山市古鍛冶町藤居山富山寺（普泉寺）の再建に寄与した人物であった。また、院号保持者には富山寺信徒も存在する。

この石塔は、富山町石工佐伯伝右衛門が棟梁となり、4人の石工とともに共同で製作したものである。伝右衛門は18世紀後半から19世紀初頭における富山町第一の石工棟梁であり、卓越した浮彫文様と立体化を導入した石工である。本石塔は伝右衛門最後の製品であり、初期の特色は消えているが、全体として洗練された優美さを醸し出している。



海禪寺宝篋印塔 実測図



笠 隅飾突起側面文様 拓影



輪1西面（キリーク） 拓影（1:4）



輪2正面 拓影（1:4）



基壇 1 段目 石材 1 西面



基壇 4 段目 石材 23 北面
俗名者



基壇 3 段目 石材 15 西面
插入句「二十三日聖盡／先祖代々」



基壇 4 段目 石材 28 南面
积号者（中央）



(1:4)

基壇 4 段目 石材 23 東面 石工名



稻荷山海禪寺（宝篋印塔は門左側）



宝篋印塔位置



宝篋印塔全景（西から）



宝篋印塔全景（北東から）



相輪



相輪 宝珠・請花



相輪 九輪1段目の銅製金具



相輪 九輪途中での折れ

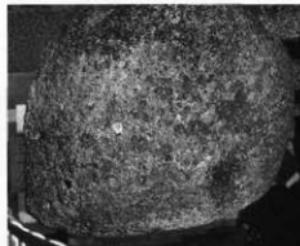


相輪 九輪1段目の銅製金具

(拡大)



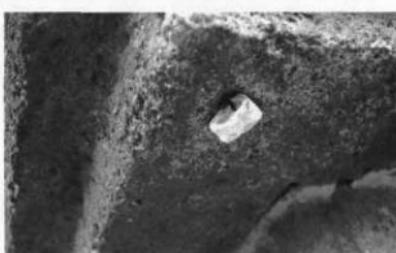
笠 (側面から)



隅飾突起上面の小穴



笠上面 (斜め上から)



笠下四隅の銅製金具



軸1正面（西面）



軸2正面（西面）



軸2左面（北面）



軸2右面（南面）



軸1・2裏面（東面）



請花（北面）



基礎・基壇（北面）



基壇刻銘（戒名）



基壇刻銘（石工名）

2 芹谷山千光寺宝篋印塔

- (1)調査の目的 富山町石工佐伯伝右衛門製作石造物の記録調査
(2)調査日 平成 25 (2013) 年 6月～7月
(3)調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4)所在地 研波市芹谷 芹谷山千光寺境内
(5)種別 宝篋印塔
(6)年代 天明 6 (1768) 年

(7)千光寺の概要

芹谷山千光寺は真言宗古刹である。
大宝 3 (703) 年天竺僧法道の開基と伝える。『貞享二年寺社由緒書上』では唐僧円徳を開基とする。
法道上人は 6,7 世紀頃中国・朝鮮半島から日本に渡ってきたとされる人物で、西日本に開山・開基伝承が多く残される。現在当寺では開基を「法道円徳上人」とし、2人を同一人物と説明している。
本尊の秘仏銅造聖観音菩薩立像は、法道円徳上人が招來したと伝える奈良時代の作で、高さ 39cm。県指定文化財である。本堂・山門・観音堂は江戸後期の建立である。

本堂より一段高い南側の高台に観音堂が所在しており、宝篋印塔は観音堂の北西側に位置している。
(8)調査概要

- ①経緯 本石塔は、千光寺観音堂北西側に置かれている。組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。本体と板石組基壇からなり、基壇は経年劣化により風化・ひび割れが著しい。
- ②全体構成 本体高さは 15 尺 1 寸 9 分 (460.3cm) である。石塔本体の構成は、上から相輪、笠、塔身 (5 段)、基礎 (2 段) の 9 段構成である。
- ③相輪 上から宝珠・上部諸花・九輪・下部諸花・伏鉢の構成で、1 石で造る。宝珠は球形で、上端は大きく尖る。上部諸花との間に欠首がある。上部諸花は、横長の単弁で、中央を達磨形に彫りくぼめる。主弁 4 弁、間弁 4 弁の計 8 弁構成である。九輪は断面方形である。下部諸花は、横長花弁の上縁が 3 段の花頭形になるもので、弁縁は縁取がされ盛り上がる。伏鉢は半球形である。下部諸花との間は欠首となる。

④笠 軒上 4 段、軒下 2 段である。軒上 2 段は三角形に突出する段であり、軒上 3、4 段目は、階段状となり、上ほど小さい。隅飾突起は 73° の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。隣接する隅飾突起 2 つの先端の間隔は 2 尺 8 寸 (84.8cm) である。隅飾突起内外面の文様は、突起上端のみ輪郭を巻

表 1 千光寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		備考
		寸	cm	寸	cm	
本体	相輪	33.9	102.7	9.7	29.4	
	笠	9	27.3	28	84.8	軒上 4 段、軒下 2 段
	輪1	10.5	31.8	10.5	31.8	4面に梵字種子
	反花	5.3	16.1	17.2	52.1	
	輪2	15.2	46.1	15	45.5	4面に篆文・造立經緯等刻銘
	諸花	9	27.3	21.2	64.2	
	反花	4.3	13.0	23.4	70.9	
	基礎1	7.4	22.4	26	78.8	4脚形。中央に敷茄子
基壇	基礎2	9.3	28.2	34	103.0	正面に浮彫文様、3面に位号・戒名等刻銘
	基壇1	7	21.2	55.9	169.4	
	基壇2	13.25	40.1	55.9	169.4	
	基壇3	13.25	40.1	55.9	169.4	
	基壇4	9	27.3	55.9	169.4	
	基壇5	5.5	16.7	72.9	220.9	
計		151.9	460.3			

いた弧下端が渦巻状となる。内部は無文で、丁寧に平滑加工している。隅飾突起上面には、先端から3.3寸(10cm)入った中央に小穴が開けられ、銅製金具が輪状に埋め込まれている。これは相輪上部と隅飾突起上面との間に装飾のため渡す金属製鎖を取り付けるための輪金具である。隅飾突起上端は笠上端よりも0.5寸程高い。

⑤塔身 4石4段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花となる。

A 軸1 縦横同寸の方形石である。上の笠下部が5mm程度彫り込まれ、そこに天端が收まる。また下の反花天端も同様に浅く彫り込まれ、そこに底部が收まる。

4面には、花頭形に彫り込まれた中に月輪を浮き彫りし、その中央に梵字種子を薬研形で陰刻する。

B 反花 上面は軸2がはまるよう5mm程度彫り込んでいる。主弁は8葉で上下2段である。間に間弁を置き、計24弁である。上段の主弁はやや厚みがあり、先端は尖って反る。下段の主弁先端の反りはやや小さい。間弁は幅が狭く厚い。稜はシャープである。反花の下には、厚さ1.8寸の無文方形部があり、下の軸2がはまるよう5mm以上彫り込んでいる。五輪山龍高寺の宝篋印塔でも同様な方形部があり、上部饅頭形としている〔古川・蓮沼2009〕。

C 軸2 反花と1石で彫る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面となる南面は、8文字×5行=40文字の経文である。右面(東面)は、「経曰」で始まり、その次の行に8文字×4行=32文字の経文が続く。左面(西面)は、5行にわたる銘文である。1行目は8文字の経文である。2行目は当寺開基の法道円徳上人を記す。3~5行目は造立願意・趣旨である。「上報四恩下及三途」の用語は、大藏経のうち『師口』『愚要鈔』の2経に見える。四恩については諸経に見え、『正法念處經』には、母の恩・父の恩・如來の恩・說法師の恩とされ、『大乘本生心地觀經』では、父母の恩・衆生(社会)の恩・国王(国家)の恩・三宝(仏・法・僧)の恩とされる。裏面(北面)は、6行にわたり、造立年・住職名・願主名が記される。天明6年は西暦1786年である。右面に引用された「経曰」以下の経文、正面の経文、及び左面1行目の経文は、連続した経文であり、宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經」(大正T.1022B)の19.0714b22末尾~27途中からの引用である。

したがって、この軸2における刻銘は、右面(東面)から始まり、正面→左面→裏面へと続くことがわかる。内容の順序としては、宝篋印陀羅尼經文(部分引用)→開基→願意・趣旨→造立年・住職・願主情報の流れで記載されていることになる。

D 請花 1石で造る。主弁は、単弁8葉×2段で、上段の主弁間に間弁を置き計24弁となる。主弁は厚みが薄く、弁は平らである。弁先端はわずかに肥厚し小さく反る。下段の弁は、上段より厚く、弁先端の反りも大きい。間弁は弁中央に稜をもち、薄い。

⑥基礎 基礎は上下2石に分かれる。

A 上段石 上から、反花・方形壇・四脚となり、四脚は立体的である。その内部の空間中央には円形の饅頭形(數茄子)が置かれる。反花・方形壇・四脚を1石で造る。反花は、主弁が単弁8葉×2段で、主弁間に間弁1葉をもち、計24弁である。主弁のうち上段の弁先端は厚く、尖って大きく反る。下段の弁は上段の半分ほどの厚さで、反りも小さい。間弁は厚く、高い稜をもつ。

方形壇の側面は、四面ともに額を浮彫し、その中に文様を浮彫する。正面となる南面は、祥雲文様で、祥雲を画面左に4個、画面右に4個の計8個を横一列に配置する。祥雲の尾は各3つが表現される。裏面となる北面も同じ構図である。左右の面は、波涛文様で、5つの波プロックがある。波頭は各波ごとに2つずつ配される。波頭の向きは、左側から、右→左→右→左となる。波頭の先には、波飛沫をあらわす円環が陰刻される。

脚は、方形壇の四隅の下に、外側に張り出す形で各一脚が付く。下の石に接するのは、脚先端のみである。脚の下辺には細い縁取りがあり、中央に牡丹花頭形の装飾が付く。

四脚の中央、方形壇と下石の間のできた高さ寸の空間には、支え石として円形の敷茄子形の石が置かれ、表面には立体的な浮彫り文様が施されている。上下は、それぞれ方形壇中央、下石中央を円形に浅く彫りこぼめて嵌め込んでいる。彫りこぼめた部分の深さ構造は不明である。文様は上半が祥雲文、下半が波涛文である。祥雲は2~4個を一つのまとまりとし、うち1~2個が尾をもつ。波涛は、一つの波涛につき2~3つの波頭となる。

B 下段石 方形の1石である。南北で2石に分かれる。正面は方形の額内を彫り込み、中央に花模様、左右に獅子狛犬文様を浮彫りする。花模様は牡丹とみられる。中央に満開の花とその周囲を葉が取り巻き、左上には開花した花、右には蕾を描く。蕾とその下には祥雲が1つ描かれる。これらの下には4つの重なった山形の文様があり、波文様のようであるが、上石の方形壇の波涛文と異なり、継ぎの短線が複数入っている。左右の獅子狛犬は、東側となる左が阿形、西側となる右が吽形である。阿形は左向きで、走っている様子を描く。吽形は左向きで顔は見返りの形で中央を向いて寝そべる。両者ともに巻毛が著しく体軸に細かい毛の表現がある。一般には左の阿形が獅子、右の吽形は狛犬と区別されるが、狛犬には角がなく、同じ獅子形であることから、この2体ともに唐獅子と理解される。したがって正面の浮彫文様全体の構図は、いわゆる「唐獅子牡丹」を表現したものと考えられる。

⑦基礎刻銘 楷書陰刻による刻銘がみられる。西面は、2面があり、右側には、当寺59世から62世の先代住職位号と、僧籍者名、計12人の位号がある。左側には、「宝篋印陀羅尼」以下冒頭の4行は願意が示され、その後に5人の戒名が並び、末尾に「有無両縁」とある。

裏面となる北面は、上下2段に4文字ずつ28行が並ぶ。戒名者は計55人である（判読できないものあり）。19行目下段には「無両縁」とある。東面は、2面があり、右側には、北面に引き続き上下2段に4文字ずつ8行が並ぶ。8行目下段末尾の4文字は戒名ではなく、「先祖代々」である。

次の9行目・10行目は「信士・信女」の戒名者で、供養者とみられる。二人は並んでおり夫婦と推

【基礎2石目北面】	
裏心法印 即□□月	玄秀信士 窓庭祖瀧 (三十五人戒名)
(二十人戒名) 有無両縁	(計五十五人戒名)
【基礎2石目西面右】	【基礎2石目東面右】
【基礎2石目西面左】	
當院五十九世法印性海大和上	妙相妙普 先祖代々
當院五十九世法印性海大和上	飯□□□信士
當院五十九世法印性海大和上	口月□□信女
阿闍梨法印清義大和上	山川□左衛門
*以下阿闍梨・法師等位号	奉唱光明真言
奉誦光明真言	一百万遍供養
寶篋印陀羅尼□□□謹	祥山道喜沙弥
五百萬遍竟供養	洞山自鳳禪尼
護持仏□□	奉誦光明真言
*以下四人戒名 有無両縁	百萬遍供養
妙活法尼	佐伯伝右衛門勝行
大石工	越中富山住人
佐伯伝右衛門勝行	奉誦光明真言
【基礎2石目東面左】	
【基礎2石目東面右】	口相元論 道安勝空
【基礎2石目東面左】	
奉唱光明真言	盤岳智泉
一百万遍供養	山川□左衛門
祥山道喜沙弥	奉唱光明真言
洞山自鳳禪尼	百萬遍供養
奉誦光明真言	佐伯伝右衛門勝行
百萬遍供養	大石工
奉誦光明真言	越中富山住人
百萬遍供養	佐伯伝右衛門勝行
基壇刻銘	

定される。11 行目は姓をもつ俗名者で、願主である。

9・10 行目の供養者の子供あるいは肉親者と考えられる。左側は、「奉唱光明真言／二百万遍供養」+ 戒名（沙弥）、「奉誦光真言／百万遍供養」+ 戒名（禪尼）とあり、一对の夫婦と推定される。次に石工名があり、佐伯伝右衛門の名がある。

⑧基壇 5 段からなる板石組みである。全体が方形壇となる。1 段目から 4 段目までは緑色凝灰岩の板石である。石材の多くに欠

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚		備考
			尺	cm	尺	cm	尺	cm	
1段目	1	南面	27.5	83.3	7	21.2	26.5	80.3	平置き
	2	南面	28.5	86.4	7	21.2	29.3	88.8	平置き
	3	北面	27.5	83.3	7	21.2	25.8	78.2	平置き
	4	北面	28.5	86.4	7	21.2	28	84.8	平置き
2段目	5	南面	56	169.7	13.3	40.3	7.8	23.6	
	6	西面	47	142.4	13.3	40.3	8	24.2	
	7	北面	39.5	119.7	13.3	40.3	計測不能		
	8	東面	47	142.4	13.3	40.3	8	24.2	
3段目	9	南面	40.5	122.7	13	39.4	計測不能		
	10	西面	28.2	85.4	13	39.4	7	21.2	
	11	西面	26.7	80.9	13	39.4	8.5	25.8	
	12	北面	40.3	122.1	13	39.4	計測不能		
4段目	13	東面	27	81.8	13	39.4	7	21.2	
	14	東面	28	84.8	13	39.4	8	24.2	
	15	南面	38.3	116.0	9	27.3	14	42.4	
	16	南面	34.5	104.5	9	27.3	14	42.4	
5段目	17	西面	47	142.4	9	27.3	計測不能		
	18	北面	29.8	90.3	9	27.3	11	33.3	
	19	北面	44.2	133.9	9	27.3	14	42.4	
	20	東面	45	136.4	9	27.3	計測不能		
			平均	36.6	110.7				

損・ひび割れが認められ、劣化が進行している。最下段の 5 段目は芹谷産の凝灰岩系石材、通称「イカハマ石」の板石である。イカハマ石は風化しやすく、ひび割れ・溶解が著しく、原形を留めているものはない。各列 2~4 石で構成されている。西側列の板石は外側に向かい倒れている。基壇内部は中空とみられる。1 段目は、規格が似た板石 4 枚を平置きする。2 段目は板石 4 石、3・4 段目は 6 石の計 20 石である。

板石単体の長さは、最小 2 尺 6 寸 7 分 (80.9cm) から最大 5 尺 6 寸 (169.7cm) である。平均は 3 尺 6 寸 6 分 (110.7cm) である。小口面は幅 7~8.5 寸のものが多い。

⑨補修 本体各部材は造立当時のものと推定されるが、一部防水コーティングを施している部分も見受けられる。

⑩石材 石塔本体は、常願寺川産の立山天狗山石（各閃石安山岩）である。

基礎は、青灰色の長石を含む安山岩で、常願寺川産八川石と推定されるが確定できない。

基壇は、緑色凝灰岩の板石で、褐色のブロックを含む特徴から、砺波市庄川町金屋石である。基壇外側の赤色岩は、先述のように芹谷産イカハマ石である。

⑨ 考察

① 宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯は、軸 2 北面の銘文により判明する。これによれば、本寺 63 世順運代の天明 6 (1768) 年 10 月、祖門尼・丁心尼の 2 人の僧籍者が願主となって造立したことがわかる。

その願意は、軸 2 西面 2 行目以下に記載された、当山開基法道円徳上人への畏敬と、「上報四恩下ノ及三途斎年鍊乳共」によって示される。四恩は、先に見たように、父母や僧あるいは仏に対する恩のことであるから、具体的には前行で示される開基法道円徳上人に対する恩のことであろう。これに報いるためというのが第一の理由である。次の三途以下の内容は、経文に該当がなく内容は不明であるが、三途は地獄道・畜生道・餓鬼道をさすことから、願主である祖門尼・丁心尼が死後の行く末についてのことを「斎年鍊乳」と表現したものか。以上から、根本的には開基法道円徳上人の菩提を弔い、その報恩に報いるための造立と理解できる。

一方、基礎下段における刻銘にも経緯を示す内容が示されている。西面左面には宝篋印陀羅尼經・光明真言を読誦納置したことを示しており、それ以下北面にもわたり供養者 77 人が列記される。また、東面左面にも西面左面と同じ主旨の表現があり、ここでは宝篋印陀羅尼經・光明真言のそれぞれについて供養者とみられる戒名者が 1 名ずつ記されている。

基壇には、先住 4 人・関係僧籍者 8 名・供養者 79 人・願主とみられる俗名者 1 名が列記されており、先住・関係僧籍者は 63 世順遍住職及び祖門尼・了心尼の関係、供養者は 79 人と多いので、願主とみられる俗名者 1 名のみならず、石塔造立にあたって寄進を行なった檀家・檀信徒らの関係者を含んでいると思われる。俗名者は、山川という姓を持っており、藩士の可能性がある。当寺は加賀藩領に存在するが、加賀藩士に山川氏はおらず、富山藩に数家があり、富山藩士の可能性がある。ただし現存する藩士名簿や由緒書に該当者はいない。これらの情報からは、石塔造立の直接的動機はわからない。開基法道円徳上人の開寺（大宝 3 年）からは 1083 年経過しており年忌とは合わない。願主である祖門尼・了心尼の 2 人と寺との関係においての事柄と考えられる。

②浮彫文様の図柄について

基礎上下 2 段に用いられている浮彫文様は、総じて、祥雲文・波涛文・花文（牡丹）・獅子狛犬文・龍文がある。このうち、花文と獅子狛犬文は、一体となって唐獅子牡丹文様と理解される。一方基礎中空内部の支え石には、龍文があり、祥雲文・波涛文と組み合わさっている。

唐獅子牡丹の構図は、牡丹とたむれれる唐獅子を描いたものである。これは一般に、百獸の王である獅子と百花の王である牡丹との組み合わせから、もっとも強い吉祥をあらわす、あるいは魔除け・聖域守護の性格を持つなどとされている。また一説に、無敵の獅子が唯一恐れる獅子身中の虫は、牡丹花の夜露に当たると死ぬため、獅子が夜そこで眠る、あるいは戯れて舞い踊るとされている。この虫を人間の煩悩に例え、それを牡丹である仏が救済するとみなす仏說もある。また、支え石の龍は、悟りを開いた完全なる智慧を持ち、庶民を導き教う伝説上の神獸・畫獸である。この龍は、下段に描かれた牡丹と戯れる唐獅子を救済する目的で、まさに下降してくる形の位置関係が築かれている。

以上のように、用いられた浮彫文様は、それぞれ個別に吉祥の意味をもつものであり、また、全体の組合せからみると、人間の煩悩を救済する仏の姿を間接的に描くというストーリー性をもった構成となっていると考えることができる。

③石工佐伯伝右衛門について

富山町石工佐伯伝右衛門は、2 代にわたることが判明している〔古川 2013a〕。この 2 人は、ある時点をもって代替りしたのではなく、2 人の伝右衛門がそれぞれ伝右衛門を名乗る重複期間があったとみられることが、石工銘の検討から判明している。

初代伝右衛門勝行は、天明 6 年千光寺宝篋印塔、寛政 7（1795）年刀尾寺宝篋印塔を製作した。この間 10 年間ある。千光寺において宝篋印塔で初めて基礎四脚化+支え石という立体化を行い、また基礎文様に初めて浮彫文様を採用した。刀尾寺では立体化・浮彫文様が消え、様相を異にする。この様相は常願寺川石工が製作する宝篋印塔に近似しており、発注者における意図が反映している可能性がある。

2 代伝右衛門吉忠は、寛政 3 年常楽寺宝篋印塔、文化 2（1805）年祇樹寺宝篋印塔を製作した。常楽寺宝篋印塔は、立体化・浮彫文様は初代を踏襲しており、初代との変化は、基礎側面・支え石における文様構成であり、基礎側面における牡丹+獅子狛犬の消滅と支え石における祥雲文の加飾である。祇樹寺宝篋印塔は、常願寺川石工が幕末まで採用していない龍文が採用されている。

2 人の伝右衛門に共通した特徴は、笠の隅飾突起が大きく外傾することである。この外傾度の変化

は、年代の経過とともに次第に起きあがってくる。常願寺川石工においては、寛政後期以降製品が増加してくる。その変化をみると、年代の経過とともに次第に外向きに広がって行くという、全く反対の傾向を示している〔富山市教委埋文センター編 2012〕。

④石塔の構成について

本石塔は、基礎から上が安山岩石材、基壇が金屋石・イカハマ石と、上下で大きく異なっている。これまで確認されている佐伯伝右衛門製作の石塔は、基壇が5段前後で、階段状に下に広がる形態である。本寺の初期塔のみがこのように特異な形態を示す。これが初期作品であるため他と異なる形態となったのか、後年の改修において階段状基壇が取り替えられたのか、については判断できない。

なお、これについて考慮される情報としては、基壇直上にある基礎の1石が大きく破断していることがあげられる。基礎石は最も大きく破断しにくい部材であることから、解体修理等の際に影響を受けたと推定することも可能である。

(10)まとめ

本塔は、千光寺第世住職順延代において、祖門尼・了心尼の発願により、開基法道円徳上人の報恩を目的として、天明6年造立されたものである。製作石工は、富山町石工佐伯伝右衛門勝行（初代伝右衛門）であり、富山町石工が製作した宝篋印塔のうち、石工名を刻銘した最初の宝篋印塔として位置づけることができる。

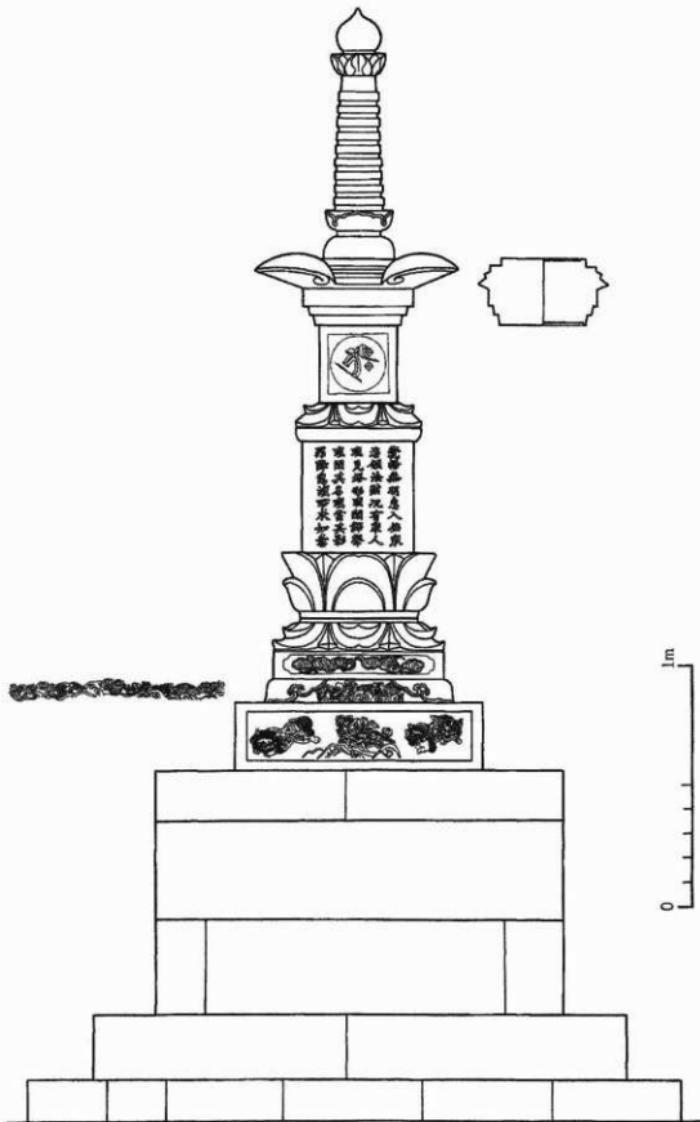
18世紀中葉以後さかんに造立された越中における近世期宝篋印塔の模範様式を備え、その先駆的形態といえる。基礎に四脚を付け立体化し中央に支え石を置く構造は、本寺を含め2例しか見られず、伝右衛門のみが用いた独特的な造作である。基礎に用いた浮き彫り文様は吉祥文様であり、祥雲文・波涛文・唐獅子牡丹文・龍文がある。このうち、唐獅子牡丹文は本例のみであり、それ以外の文様は、以後常願寺川石工が継承し発展させた。

以上により、本宝篋印塔は、富山町石工の宝篋印塔製作の歴史を解明する上で、重要な位置づけにあるといえる。

基礎刻銘にある僧籍者・戒名者は、過去帳の調査により、その関係性が明らかにできる可能性がある。



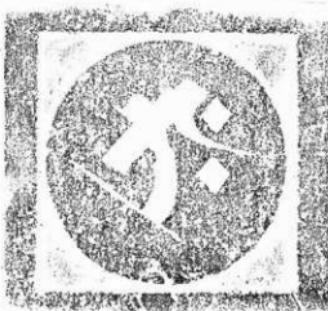
基礎下段石正面浮彫文様（唐獅子牡丹） (1:6)



千光寺宝篋印塔实测图



隅飾突起 拓影



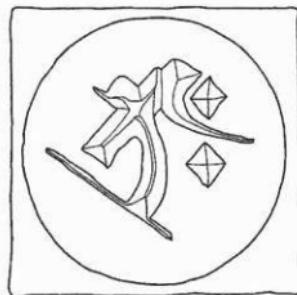
軸1 南面 キリーグ 拓影

覺悟無明忽入佛家
恣領法財況有衆人
或見塔形或聞鐸聲
或聞其名或當其影
罪孽悉滅所求如意

軸2 南面刻銘

覺悟無明忽入仏家
恣領法財況有衆人
或見塔形或聞鐸聲
或聞其名或當其影
罪孽悉滅所求如意

時天明第六龍次丙午
十月功德日造立之
芹谷山千光密寺六十三世
現住順道代
祖門尼
了心尼



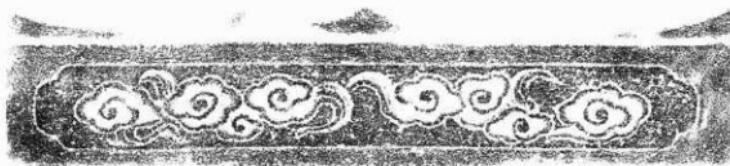
軸1 南面 キリーグ 実測図

時天明第六龍次丙午
十月功德日造立之
芹谷山千光密寺六十三世
現住順道代
祖門尼
了心尼

軸2 北面刻銘



軸2 北面刻銘 拓影



基礎上石 南面側面浮影（祥雲文）拓影



基礎上石 南面側面浮影（祥雲文）實測圖



基礎上石 東面側面浮影（波濤文）拓影



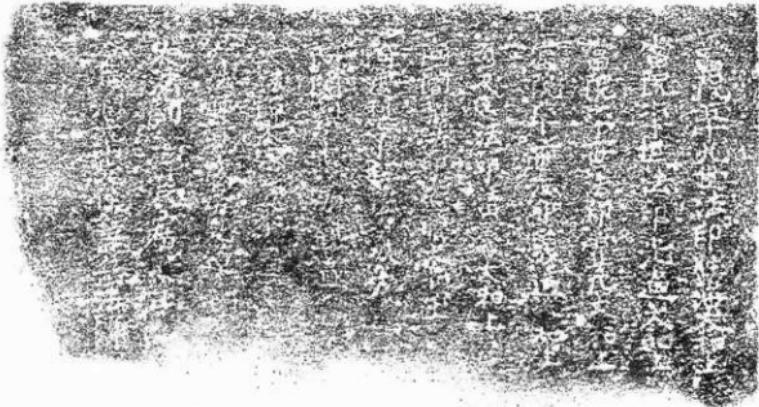
基礎上石支え石 側面拓影 (中央が南正面)



基礎上石支え石 側面実測図

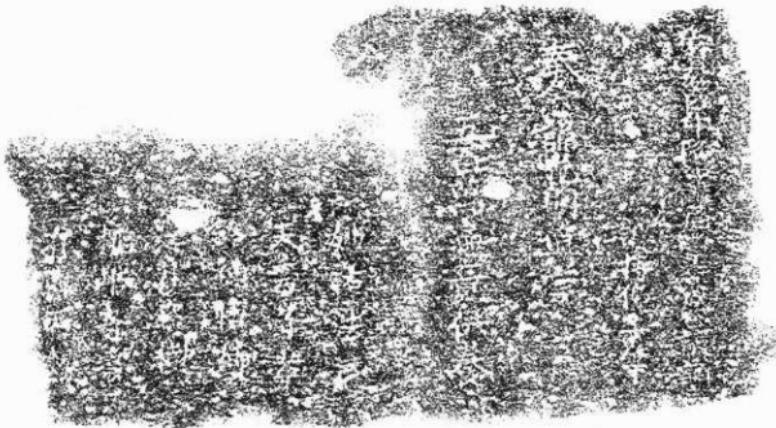


基礎上石支え石 側面実測図 (龍の全体を表現するよう組み換えた図・龍部分網掛け)

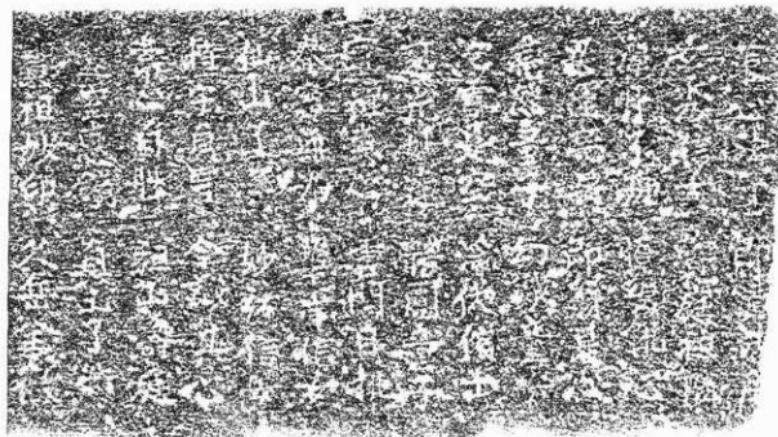
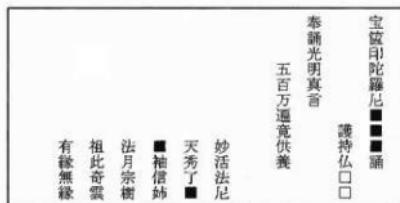


基礎西面刻銘① (南半)

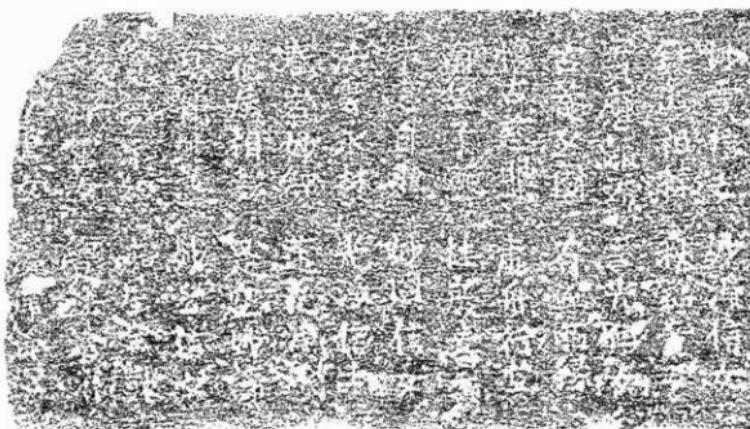
■ ■ ■ 光山先住 ■ 岳法師	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ 法印 ■ ■	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ ■ 大和上	當寺五十九世法印性海大和上
■ ■ ■ 大法師 ■ ■ 長房照山	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ ■ 永遍	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ ■ 大和上	當寺六十世法印光遍大和上
■ ■ ■ 大法師 ■ ■ 坊 ■ 道	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ ■ 義通大和上	■ ■ ■ 阿闍梨法印 ■ ■ 大和上	當寺六十一世法印童光大和上
			當寺六十二世法印義通大和上



基礎西面刻銘②（北半）

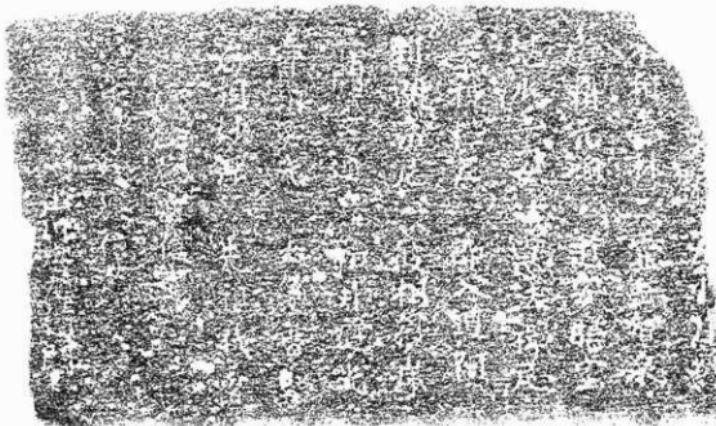


基礎北面刻銘①

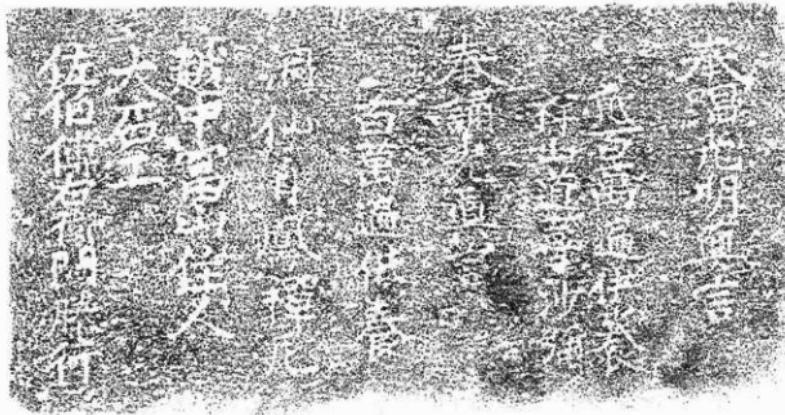


基礎北面刻銘②

■ 心法師	即	月
玄秀信士		
淨月了	■	
忍還亮	■	
泡雪是空		
慈光妙蓮		
亮然童子		
寒理惠心		
春寂■淨		
仙山了宗		
持宗貞言		
常心自■		
■室慧鏡		
實祖妙印		
妙音信女		
鐵山祖煉		
寒古夢眼		
南岳了施		
本寧自■		
法雲永林		
春岩妙無		
花屋相■		
是空妙跡		
直室沙■		
妙空信女		
夢■覺	■星全■	
影智童女		
覺夢■		
夢■淨心		
覺法清明		



基礎東面刻銘①



基礎東面刻銘②



0 10cm

基礎東面刻銘② 實測圖

佐宿傳右衛門勝行	大石工	洞山自鳳禪尼	祥山道喜沙弥	奉誦光真言	二百万遍供養	奉唱光明真言	月■	■相為林 雲泉碧泉
							■■■■■	相元論 道安勝空
							■■■■■	苾法禪尼 即入道阿
							■■■■■	劉統■尼 彼相得岸
							■■■■■	丙玄道 和月道光
							■■■■■	実相失光 大淨普照
							■■■■■	妙相妙普 先祖代々
							■■■■■	坂 信士
								山川■左衛門



観音堂と宝篋印塔の位置（西から）



全景（南から）



全景（南西から）



全景（東から）



相輪（宝珠・請花・九輪）



相輪（請花、伏鉢上部）



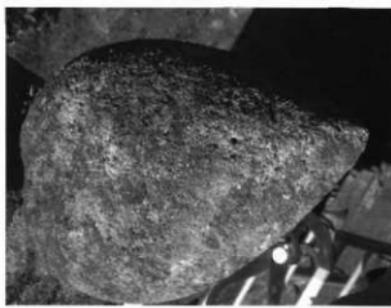
笠・相輪との接合部（コーリング）



笠（南から）



笠・溝飾突起上端面



笠・溝飾突起上面の金具差し込み穴



軸2 (南から)



反花 (南から)



軸2 (南から)



軸2 (東から)



軸2 (北から)



軸2 (西から)



請花・基礎上石 (東から)



基礎（南から）



基礎（西面）



基礎（東面）



基礎（北東から）



基礎上石 脚部



基礎上石 脚部側面



基礎支え石 浮彫文様 (南面)



基礎支え石 浮彫文様 (北面)



基礎下石西面右 刻銘



基礎下石東面左 刻銘



基礎下石 南面浮彫文様 獅子部分



基礎下石 南面浮彫文様 牡丹部分



基礎下石 南面浮彫文様 狶犬部分



基壇 南面 (1~4段目金屋石、5段目イカハマ石)



観音堂雨落側溝縁取り石に使用・転用されたイカハマ石

3 立本山刀尾寺宝篋印塔

- (1)調査の目的 富山町石工佐伯伝右衛門製作石造物の記録調査
(2)調査日 平成 25 (2013) 年 8 月
(3)調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4)所在地 富山市太田南町 立本山刀尾寺境内
(5)種別 宝篋印塔
(6)年代 宽政 7 (1795) 年
(7)刀尾寺の概要

立本山刀尾寺は、真言宗古刹である。

常願寺川支流鮎川右岸中流に位置し、江戸時代には加賀藩領太田本江村に所在した。本村は、富山城下や町新庄からの幹道が合流する交通の要衝地であり、本寺の東を立山道が通る。

本寺は、南に隣接する刀尾神社の別当寺である。

貞享 2 (1685) 年「寺社由緒書上」〔井上校訂 1974〕によれば、大宝年中 (701~704) 慈光上人開基と伝える。慈光上人とは立山開山とされる慈興上人のことである。享保年中 (1716~1735) 頃とみられる「三州寺号帳」〔井上校訂 1974〕では慈弘開基と伝える。慈弘も慈興上人のことであろう。

本尊大日如来は慈興上人作と伝える。開扉仏は元和 3 (1617) 年銘のある不動明王像は、もと刀尾神社の神体として祀られていたものである。

(8)調査概要

①経緯 本石塔は、境内入口の左側、境内南東隅に置かれている。

この宝篋印塔は、組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。塔本体の遺存状態は良好である。

②全体構成 (表 1)

本体高さは 9 尺 1 寸 7 分 (277.9cm) である。宝珠先端が欠損しており、復元高は 9 尺 2 寸 2 分 (279.4cm) である。

石塔本体の構成は、上から相輪、笠、塔身 4 段、基礎 2 段、基壇 5 段の 13 段構成である。

塔身最下部には通常般頭形（敷茄子）が存在するが、本例では消失している。本来所在したとすれば、他の同規模宝篋印塔の例から、高さ約 3.5 寸が復元できる。般頭形が存在したと仮定した場合、塔全体復元高は、95.7

表 1 刀尾寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ	幅	石材	備考		
本体	相輪	寸	cm	寸	cm		
	相輪	19.5	59.1	5	15.2	安山岩	推定復元高 20 寸
	笠	6	18.2	16.4	49.7	立山天狗山石	軒上 5 段、軒下 2 段
	軸1	5.2	15.8	5	15.2	立山天狗山石	4 面に梵字種子
	反花	2.9	8.8	9.5	28.8	立山天狗山石	軸 2 と 1 石
	軸2	8.6	26.1	9.5	28.8	立山天狗山石	正面「宝篋印塔」、裏面光明真言梵字、1面篆文、1面絆縫
基礎	講花	6	18.2	14.4	43.6	安山岩	
	反花	3.1	9.4	14.4	43.6	安山岩	
	基礎	3.5	10.6	14.4	43.6	安山岩	
	基壇1	7	21.2	19	57.6	安山岩	
	基壇2	7	21.2	22	66.7	安山岩	
	基壇3	7.5	22.7	26.4	80.0	安山岩	
基壇	基壇4	9.2	27.9	29	87.9	安山岩	
	基壇5	6.2	18.8	33.5	101.5	安山岩	
	計		91.7	277.9			

部請花との間には欠首（かきくび）がある。上部請花は、主弁 6 弁、間弁 6 弁の計 12 弁構成である。主弁は単弁で、先端が丸い。間弁は先端が三角形である。九輪は断面方形である。上端の 1 段目の輪と下端の 9 段目の輪の直径は 0.2 寸（0.6cm）と殆んど差がなく、円柱状である。下部請花は、横長花弁の上縁が 3 段の花頭形になるもので、弁縁は縁取がされ盛り上がり、両端は渦を巻く。伏鉢は半球形である。下部請花との間には欠首がある。

④笠 軒上 5 段、軒下 2 段である。軒上は三角形に突出する段であり、それより上は階段状となり、上ほど小さい。上端面は、相輪下端が収まるように、径 5.2 寸、深さ 6mm に彫りくぼめている。

隅飾突起は 61.5° の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。先端はすべて欠損しているが、復元した場合隣接する隅飾突起 2 つの先端の間隔は 1 尺 6 寸 4 分（49.7cm）である。隅飾突起外面の文様は、突起上端のみ輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となる。内部は無文で、丁寧に平滑加工している。隅飾突起上端面には、基部から 3 寸（9.1cm）入った中央に小穴が開けられている。これはかつてここに銅製輪金具が埋め込まれ、相輪上部との間に装飾のため金属製鎖が渡されていたものと推定される。隅飾突起上端面は、笠上端よりも 0.2 寸程高い。

⑤塔身 3 石 4 段で構成する。上から軸 1、反花、軸 2、請花となる。反花とその下の軸 2 を 1 石で造る。

A 軸 1 方形石である。上の笠下部が 5mm 程度彫り込まれ、そこに天端が収まる。また下の反花天端も同様に浅く彫り込まれ、そこに底部が収まる。4 面には、花頭形に彫り込まれた中に月輪を浮き彫りし、その中央に梵字種子を篆研彫で陰刻する。本塔では北側正面がウーンとなっており、半時計回りに 90 度ずれている。月輪下の蓮華は 5 葉で、左右端は大きく反り、弁長が長い表現である。

B 反花 下の軸 2 と 1 石で作る。上面は軸 2 がはまるよう 5mm 程度方形に彫りくぼめている。主弁は単弁 8 葉で、内側を一段彫りくぼめ、幅広縁帯をもつ。弁端は小さく尖って反る。間に先端三角形の間弁 8 葉を置く。間弁はシャープな稜をもつ。計 16 弁である。

C 軸 2 縦長の方形石で、反花と 1 石で作る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面となる南面は、「宝篋印塔」と縱に大きく彫る。裏面は、5 字 × 5 行の 25 文字の梵字で、光明真言梵字 23 字の末尾に「ビ」「タ」2 字を加えたものである。タは聖語を意味する。右上から左下に進む。左面（東面）は、6 文字 × 4 行 = 24 文字の経文である。「暫來塔影及踏草摧破惑障覺悟無明忽入佛家態領法財」は、連続した経文であり、宝篋印陀羅尼經と通称する

「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」（大正 T.1022B）の 19.0714b24 ~ 25 途中からの引用である。右面（西面）は、5 行にわたる銘文である。1・2 行目は戒名者である。1 行目は「沙弥」位号で男性、2 行目は「人姉」位号で女性であり、夫婦とみられる。過去帳の確認により由緒が知られる可能性がある。3・4 行目は石塔造立年月で、寛政 7 年（1795）5 月である。

これは大願成就日と位置づけられている。5 行目は願主名で、「宰符氏」である。1・2 行目の戒名者は、この宰符氏の肉親（両親等）と推定され、石塔を造立して供養する目的である供養者である。

以上により、軸 2 銘文の流れは、（正面）「宝篋印塔」→（左面）宝篋印陀羅尼經文→（裏面）光明真言梵字→供養者・造立年・願主名の順で記載されている。

【東面
右面】
佛家態領法財
覺悟無明忽入
暫來塔影及踏
草摧破惑障
覺悟無明忽入
佛家態領法財

【西面
左面】
大願成就日
五月
寛政七乙卯年
慈眼了海沙弥
蓮妙露質大師

軸 2 刻銘

D 請花 主弁は、單弁 8葉×2段で、上段の主弁間に間弁を置き計 24弁となる。主弁は厚みが薄く、弁は平らである。弁先端はわずかに肥厚し小さく反る。下段の弁は、上段より厚く、弁先端の反りも大きい。間弁は弁中央に稜をもち、薄い。

⑥基礎 2段からなる。上段は反花、下段は方形壇であり、これらを1石で作る。反花の主弁は8葉で上下2段である。間に間弁を置き、計24弁となる。上段の主弁はやや厚みがあり、先端は尖って反る。下段の主弁先端の反りはやや小さい。弁中央に稜がある。間弁は先端が三角形となり厚い。稜はシャープである。方形壇の側面は、四面ともに無文である。

⑦基壇 (表2)

A 規格 5段からなる板石組みである。全体が階段状となる。各段4~8石、計31石で構成される。下

段ほど石数が多い。基壇内部は中空と推定される。

1段目の西面石材の隅に、3寸×3寸の方形の切込みがあり、同寸の蓋石が嵌め込まれている。これは基壇内部に礎石経を投入する目的で設けられた穴である。礎石経が基壇内部に存在するかどうかは不明である。板石単体の長さは、最小5寸(15.2cm)から最大2尺1寸(63.6cm)である。平均は1尺3寸9分(42.1cm)である。小口面は厚さ3~5.9寸のものが多い。

B 刻銘 基壇1段目の側面のうち2面には、楷書陰刻による刻銘がある。正面は「光明真言都合十二万五千遍」とあり、石塔造立にあたり光明真言を12万5千遍唱える(た)とする主旨である。

東面は石工名で、富山城下町に工房をもつ佐伯伝右衛門である。ここでは佐伯を「伯佐」と逆転させて表記している。

⑧補修痕跡 本体各部材は造立当初のものと推定されるが、一部防水コーキングやモルタルによる接着を施している部分もある。また、軸1の方位方向が、半時計回りに90度ずれていますから、本塔は一度解体され、修復等されていると考えられる。

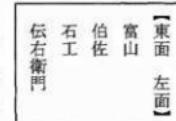
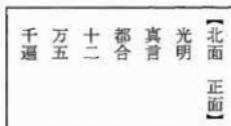
(9)考察

①宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯は、軸2東面の銘文により判明する。これによれば、刀尾寺関係者(信徒か?)と思われる宰符氏が、両親と思われる血縁者の菩提を弔うため、追善供養としてこの石塔を造立したものである。この追善供養は年忌を意識していることと思われるが、現段階でその2人の忌日が不明なため、三回忌・七回忌などのいずれにあたるかは不明である。東薬寺では、加賀藩十村役野

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚		備考
			尺	cm	尺	cm	尺	cm	
1段目	1	北面	14.6	44.2	7	21.2	5.1	15.5	刻銘
	2	東面	15	45.5	7	21.2	4.4	13.3	刻銘
	3	南面	14	42.4	7	21.2	4	12.1	
	4	西面	13.9	42.1	7	21.2	4.8	14.5	礎石終段入口あり
2段目	5	北面	12.6	38.2	7	21.2	計測不能		
	6	東面	9.1	27.6	7	21.2	5	15.2	
	7	東面	12.7	38.5	7	21.2	4.3	13.0	
	8	南面	13.7	41.5	7	21.2	計測不能		
3段目	9	西面	8.5	26.8	7	21.2	4	12.1	
	10	西面	13.4	40.6	7	21.2	4.4	13.3	
	11	北面	15.2	46.1	7.5	22.7	計測不能		
	12	東面	12.6	38.2	7.5	22.7	5.9	17.9	
4段目	13	東面	13.4	40.6	7.5	22.7	5.6	17.0	
	14	南面	15.5	47.0	7.5	22.7	計測不能		
	15	西面	10	30.3	7.5	22.7	4.8	14.5	
	16	西面	16.1	48.8	7.5	22.7	5.3	16.1	
5段目	17	北面	18.6	56.4	9.2	27.9	計測不能		
	18	東面	14	42.4	9.2	27.9	5.8	16.1	
	19	東面	15.7	47.6	9.2	27.9	3.8	11.6	
	20	南面	15.5	46.4	9.2	27.9	計測不能		
6段目	21	南面	5	15.2	9.2	27.9	計測不能		
	22	西面	15.4	46.7	9.2	27.9	4.9	14.8	
	23	西面	14.8	43.8	9.2	27.9	5.1	15.5	
	24	北面	18	54.5	6.2	18.8	3	9.1	
7段目	25	北面	15.8	47.9	6.2	18.8	3.4	10.3	
	26	東面	11.5	34.8	6.2	18.8	計測不能		
	27	東面	15	45.5	6.2	18.8	計測不能		
	28	南面	12.5	37.9	6.2	18.8	4.3	13.0	
8段目	29	南面	21	63.6	6.2	18.8	3.2	9.7	
	30	西面	10.5	31.8	6.2	18.8	計測不能		
	31	西面	18	54.5	6.2	18.8	計測不能		
	平均			13.9	42.1				



基壇1段目刻銘

口氏が文化4年宝篋印塔を造立寄進した契機は、妻の三回忌の年忌供養であったことが判明している〔古川・伊集2008〕。

宰符氏が刀尾寺信徒と推定されることのほか、刀尾寺との直接的関係は不明であるが、基壇正面刻銘にあるとおり、造立にあたり光明真言12万5千遍を唱えて供養を引導したのが、刀尾寺住職であったと考えられる。

寺史等諸資料によれば、照応・秀説・秀恵・探道喚龍(24世)・如龍・遷我等の住職名が知られる。照応は「寺社由緒書上」を提出した人物で、貞享2年段階の住職である。秀恵は医王山東薬寺の住職である〔伊集2007〕。その後の調査により、元禄8(1695)年に東薬寺に在職したことが判明した(東薬寺人見住職の教示による)。如龍は大岩山日石寺11世住職で、文政4(1821)年宝篋印塔を造立した〔富山市教育委員会埋蔵文化財センター編2013〕。遷我は安政6(1859)年の住職である。

本寺宝篋印塔を造立時の住職は、24世とされる探道喚龍もしくはその1,2代前(22~23世)のいずれかと推定される。

②顧主宰符氏について

顧主として記載がある宰符氏について考察する。

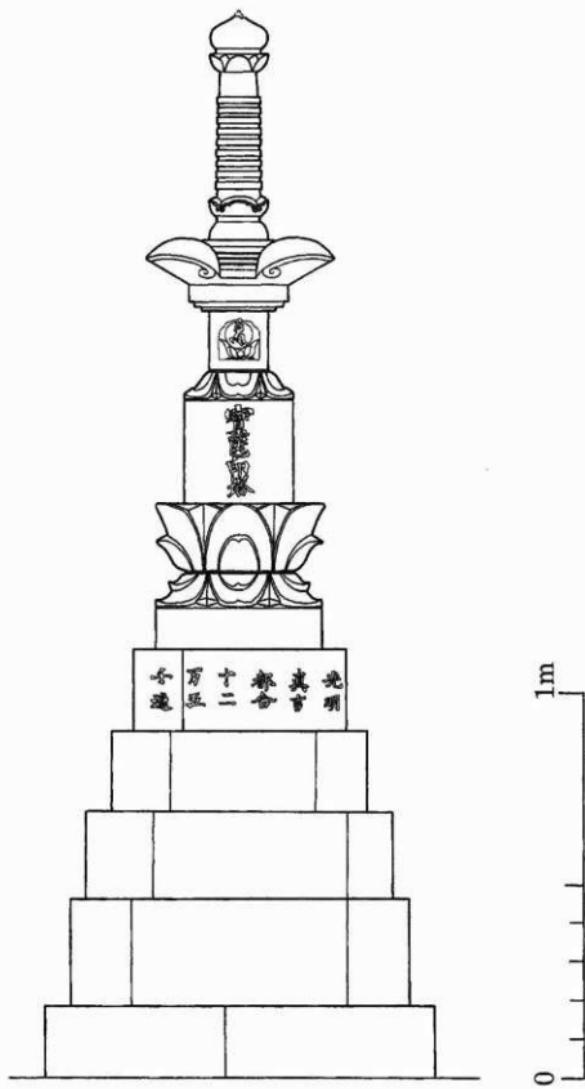
宰符は氏名(うじな)であるが、氏名としては一般的ではない。宰符氏の名称は、「宰符」に由来すると思われる。「宰符」とは、古代の九州北部に置かれた大宰府が、官符を西海道諸国に下す大宰府符のことをいう。一方、宰符は「さいふ」と呼び、「割符」(わりふ)の別表記の意味もある。割符は、中世における為替手形で、金錢や米穀の預り証書である。鎌倉以降割符を利用した為替行為が始まり、室町以降主要都市に割符を取扱う専業商人が現れ、割符屋・割符人と呼ばれた。

現時点では、いずれの由来か不明であるが、後者の意味と推定しておく。その場合、宰符氏は、富山町に在住する割符商人であると考えられる。いずれにしても、刀尾寺檀信徒と推定される。なお、同時期の富山藩士名簿に宰符氏の名はなく、また武士や商家などを掲載した五百羅漢寄進者名簿にも見当たらない。

(10)まとめ

本石塔は、寛政9年刀尾寺檀信徒と推定される宰符氏が顧主となった両親と思われる肉親2人の追善供養を目的として造立・寄進したものである。造立にあたり、刀尾寺住職が光明真言を読唱して引導したと考えられる。

製作石工は、富山町石工佐伯伝右衛門勝行(初代伝右衛門)である。伝右衛門は、富山町石工のうち宝篋印塔に最初に刻銘を入れた石工として評価され、本石塔は初代伝右衛門の2作目の宝篋印塔である。1作目に見られた基礎に四脚を付け立体化し中央に支え石を置くといった伝右衛門独特の造作は消えているが、この理由としては、刀尾寺の所在地周辺では、常願寺川石工による宝篋印塔が多数所在しており、そこで一般化した様式に基づいて発注者(顧主である宰符氏か、もしくは伝右衛門への注文を取り次いだ者)が依頼したことによる、あるいは立体化した宝篋印塔は2人とも初期の1作のみであり、普及が認められることから、伝右衛門自身が形態を変化させた、等が推定される。



刀尾寺宝箇印塔 実測図



輪1　側面　調飾突起　拓影



輪1　北面　梵字ウーン　拓影



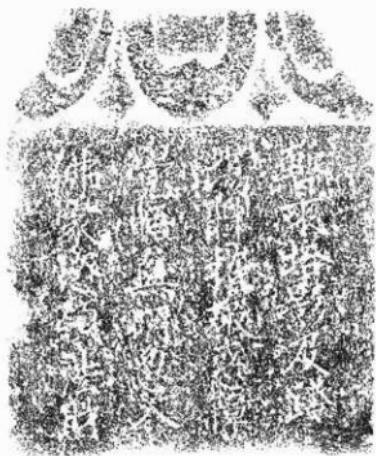
輪1　東面　梵字タラーク　拓影



輪2　正面（北面）「宝篋印塔」拓影



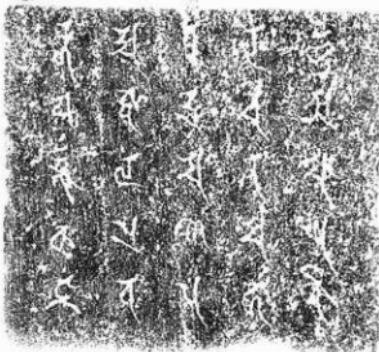
輪2　上記実測図



軸2 裏面 刻銘 拓影

斯是塔影乃屬
塔碑推破惡障
覺悟無明慾入
佛家必領法財

軸2 東面 刻銘



軸2 東面 刻銘 拓影

ଶ୍ରୀ ପାତ୍ର କାନ୍ତି
ଶ୍ରୀ ପାତ୍ର କାନ୍ତି

軸2 東面 刻銘



軸2 西面刻銘

軸2 西面刻銘 拓影



基礎 正面（北面）刻銘 拓影

光明
 真言
 都合
 方五
 十二
 方五
 千遍

基礎 正面（北面）刻銘



基礎 東面 石工名刻銘 拓影



基礎 東面 石工名刻銘



宝篋印塔位置



宝篋印塔全景（南西から）



宝篋印塔全景（北から）



相輪 宝珠



相輪 上部請花



相輪 下部請花



相輪下部（下部請花・伏鉢）・笠上面



笠・軸1



笠 階段部側面



笠 四隅飾突起文様（下から）



笠 四隅飾突起 上面の小孔



北西隅飾突起 欠損状況



軸1（北面）ウン



軸1（南面）タラーク



軸2 反花（上方から）



軸2 反花（側面）



軸2 北面 「宝篋印塔」



軸2 東面 経文



軸2 南面 光明真言梵字



軸2 西面 造立經緯等



請花 側面



請花 側面



基礎・基壇1段目(刻銘) 北から



基壇 1 段目 東面刻銘



基壇全景（北西から）



基壇全景（南東から）

4 船崎山帝龍寺宝篋印塔

- (1)調査の目的 神通川石工石屋浅吉製作石造物の記録調査
(2)調査日 平成 25 (2013) 年 5 月
(3)調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4)所在地 富山市寺家 船崎山帝龍寺境内
(5)種別 宝篋印塔
(6)年代 安政 5 (1858) 年
(7)帝龍寺の概要

船崎山帝龍寺は、言宗古利である。

神通川上流の神通峠入口右岸側に発達した河岸段丘舟倉丘陵上に位置する。本寺の西 1.5km を飛騨街道東街道が通るが、笹津から分岐した幹道は、かつて本寺西にある門前町舟倉集落へ延び、ここから北へ屈曲して布市方面へつながる「舟倉道」であり、これが旧飛州街道であったとみられる〔古川・蓮沼 2009〕。

本寺の開基は、文武天皇大宝 2 (702) 年、天皇の御連枝（兄弟）真福上人と伝える。

貞享 2 (1685) 年「寺社由緒書上」〔井上校訂 1974〕によれば、文武天皇勅願により大宝 2 年御宇真福上人開基とし、本尊は姉倉比売神社、本地仏は嵯峨虚空藏菩薩である。このとき「帝立寺」と称した。享保年中 (1716~1735) 頃とみられる「三州寺号帳」〔井上校訂 1974〕では慈弘開基と伝える。

県指定文化財十一面觀世音菩薩立像の胎内銘には、正安 2 (1300) 年千手觀音として越前僧により製作されたものである。

『建内記』の文安元 (1444) 年条に、越中船崎泰隆寺が比叡山延暦寺の末寺と記されており、この頃天台宗に転宗したことがわかる〔久保 1991〕。延喜式内社に比定されている姉倉比売神社に隣接し、この別当寺として存在したと推定される。

(8)調査概要

①経緯 本石塔は本堂北東側に置かれる。近年改修され、高さ 90cm のコンクリート基壇上に置かれた。改修以前は、本堂の北西側に置かれていた。石塔は、組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。経年劣化により、風化・ひび割れが生じている。全て細粒砂岩製で、この石材は神通峠産の猪谷石である。

②全体構成 本体高さは 10 尺 4 寸 (315.1cm) である。石塔の構成は、上から相輪、笠、塔身 (5 段)、基礎 (2 段)、基壇 (5 段) の 14 段構成である。

③相輪 上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の構成で、1 石で造る。宝珠はつぶれた半球形で、上端は小さく尖る。請花は上下とも横長の単弁で、弁の周囲が盛り上がる。主弁 6 弁、間弁 6 弁の計 12 弁構成である。九輪は断

表1 帝龍寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		備考
		寸	cm	寸	cm	
相輪	相輪	15.4	46.7	6.5	19.7	
笠	笠	6	18.2	15	45.5	軒上5段、軒下2段
塔身	軸1	6.6	20.0	6	18.2	4面に梵字種子
	反花	9.8	29.7	1.5	4.5	
	軸2	10	30.3	9.8	29.7	正面に「宝篋印塔」、3面に銘文
	請花	5.5	16.7	14	42.4	
基礎	鏡頭形	3.7	11.2	12.8	38.8	4面に浮彫文様
	反花	2.25	6.8	14.8	44.8	
	基礎	3.75	11.4	14.8	44.8	4面に浮彫文様
	基壇1	6	18.2	19	57.6	
基壇	基壇2	8	24.2	23	69.7	4面に刻銘
	基壇3	8	24.2	27	81.8	南面に石工名刻銘
	基壇4	9	27.3	31	93.9	
	基壇5	10	30.3	35	106.1	
計		104	315.1			

面が半円形である。このような特徴は、立山町芦峠寺間魔堂境内の猪谷石製宝篋印塔【富山県立山博物館調査 D-85】〔富山県「立山博物館」編 1998〕の九輪の特徴と一致する。伏鉢は、上下 2 段に分かれ、上段は半球形、下段は四角柱形となる。

④笠 軒上 5 段、軒下 2 段である。軒の上 1 段目は三角形に突出する段であり、軒との間には三角形の縫みがある。軒上 2~5 段目は、階段状となり、上ほど小さい。隅飾突起は 39.5° の角度で外側へ広がり、内側は 2 段の弧状である。隣接する隅飾突起 2 つの先端の間隔は 1 尺 5 寸 (45.5cm) である。隅飾突起内外面の文様は、輪郭を巻く弧上端が 2 つの小さな弧に分けられる。内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する。隅飾突起上端と笠上端は同一レベルである。

⑤塔身 4 石 5 段で構成する。上から軸 1、反花、軸 2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸 2 を 1 石で造る。

A 軸 1 やや縱長の方形石である。4 面には、無段の花頭形に彫り込みがあり、中央に梵字種子が薬研形で陰刻される。花頭形の内側は、中央に向い皿状に彫り込まれている。本塔では、西側正面がウンとなっており、180 度反転している。移転の際に誤って置かれた。

B 反花 軸 2 と 1 石で彫る。主弁 8 葉で、間に間弁を置き、計 16 弁である。主弁の厚みは薄く、弁先端は小さく尖って反る。間弁は厚く稜をもつ。

C 軸 2 反花と 1 石で彫る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面となる西面は、中央に縱に大きく「宝篋印塔」と彫る。北面は「若有有情能於／此塔・香一華／ノ礼拝供養八十／億劫生死重罪」、東面は「一時消滅生免／災殃死生仏家／暫見是塔能除／諸災難」、南面は光明真言陀羅尼梵字 24 字を 3 行にわたり刻む。北面と東面の銘文の内容は、宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經」(大正 T.1022B) の 19.0713b19~21 及び同 29 からの経文の引用である。北面から東面への移行は途切れなくつながる。東面の前 2 行の後は、経文において 22~28 の文節が抜けている。また末尾は、「諸災難」であるが、経文では「一切災難」となっており、若干異なる。

D 請花 1 石で造る。主弁は単弁 8 葉×2 段で、上段の主弁間に間弁を置き計 24 弁である。主弁は弁周縁が盛り上がり、弁中央が丸く膨らむ。弁先端は肥厚し尖って反る。間弁は弁中央に稜をもつ。

E 饅頭形（敷茄子） 1 石で造る。平面形は四角形で、側面は橢円形である。4 面の側面は、額内を彫りくぼめた中に浮彫文様を施す。西面は中央に菊花、左右に菊葉が延びる、北面は祥雲文、東面は菊花・菊葉と蔓、南面は波涛文と 2 匹の兎でいわゆる波兎である。いずれも吉祥文様と理解される。東西面の菊花文は、意匠が異なる。

⑥基礎 2 段である。上部の反花とその下の方形石を 1 石で造る。反花は、主弁が単弁 8 葉×2 段で、間弁をもつ。主弁の弁先端は厚く、尖って大きく反る。間弁も厚く、高い稜をもつ。基礎側面は四面ともに額内を一段彫りくぼめ、その中に浮彫文様を表現する。四面とも文様意匠が異なり、正面の西面は、菊花文・菊葉文が 3 ブロックに分かれ、それが水に浮かぶ様子が表現される。北面は頭部のみの龍文・波涛文、東面は波涛文上を鳥 2 羽が飛翔する。南面は横置きの花文（菖蒲か？）である。南面の菖蒲とみられる横置きの花文は、真言宗五般山龍高寺宝篋印塔下部饅頭形に見える菖蒲文様と類似する〔古川・蓮沼 2009〕。龍高寺の花は茎が熨斗に入っている（花包み）が、本例では茎下に半円形のモチーフを加えた表現であり、やや異なる。基礎の浮彫文様は、塔身饅頭形の浮彫文様に比べ浅い彫込みである。

⑦基壇（表 2）

A 規格 5 段からなる基壇である。1 段目は 1 石で造る。2 段目より下は板石を組み合せた板石

組基壇である。内部は中空となっている。2・3段目は板石4石、4・5段目は板石6石を組み合わせており、計21石である。

板石単体の長さは、最小1尺5寸(45.5cm)から最大2尺1寸8分(66.1cm)である。平均は1尺7寸9分(54.3cm)である。小口面は幅6寸のものが多い。板石表面の整形は、ビシャン叩きにより仕上げられている。表面は風化により劣化している部分が多いが、一部に簾状の跡が残る。

B 刻銘 基壇の2・3段目には楷書陰刻による刻銘がみられる。2段目には東西南北4面ともに刻銘がある。正面となる西面は「願以此功德／普及於一切／我等與衆生／皆共成仏道」の20文字で、大藏經のうち妙法蓮華經・胎藏梵字真言など18經中に見える経文である。なお、宝鏡印陀羅尼經には見えない。北面は、造立年月と造立時の住職名が記される。造立年月は、安政5(1858)年4月で

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚		刻銘
			尺	cm	尺	cm	尺	cm	
1段目	1	西面	19	57.6	6	18.2			
	2	西面	17.1	51.8	8	24.2	6	18.2	経文
2段目	3	北面	16.8	50.9	8	24.2	5.8		造立年・願主
	4	東面	16.9	51.2	8	24.2	6	18.2	法名4人
3段目	5	南面	16.9	51.2	8	24.2	6	18.2	願意
	6	西面	19.8	60.0	8	24.2	6	18.2	
4段目	7	北面	20.7	62.7	8	24.2	6	18.2	
	8	東面	20.8	63.0	8	24.2	6	18.2	
5段目	9	南面	20.8	63.0	8	24.2	6	18.2	石工名
	10	西面	18.4	55.8	9	27.3	計測不能		
6段目	11	北面	15.4	46.7	9	27.3	6.8	20.6	
	12	北面	15.5	47.0	9	27.3	8	24.2	
7段目	13	東面	15.4	46.7	9	27.3	計測不能		
	14	南面	15	45.5	9	27.3	7.5	22.7	
8段目	15	南面	15.9	48.2	9	27.3	5.8	17.6	
	16	西面	21.2	64.2	10	30.3	計測不能		
9段目	17	北面	17.9	54.2	10	30.3	7.6	23.0	
	18	北面	16.9	51.2	10	30.3	6.7	20.3	
10段目	19	東面	21.8	66.1	10	30.3	計測不能		
	20	南面	18.5	56.1	10	30.3	6.3	19.1	
11段目	21	南面	16.4	49.7	10	30.3	6	18.2	
	平均		17.9	54.3					

造立之	光教代	当山現住	四月上旬	維時安政五年	【2段目北面】	皆共成仏道	我等與衆生	普及於一切	願以此功德	【2段目西面】	也	皆成仏道	貴賤靈等	有縁無縁	為	【2段目南面】	為各々増(進)	【2段目東面】
																		法印光賢大和上

基壇刻銘

あり、約150年前である。当時の住職は第70世光教である。光教は慶応2(1866)年没した。東面は、4人の位号の後に文章がある。

光賢は光教の1代前の第69世住職で、嘉永2(1849)年没した。墓は医王山東菴寺千住墓内に所在し、東菴寺過去帳によればこの墓石は安政2(1855)年造立されたとみられる[古川・伊集2008]。光寛は、第67世住職と推定され、天保13(1842)年没した(帝龍寺過去帳)。次に釈号者2人が列記され、男女各1人である。真宗信徒と推定され、現住あるいは先住2名の肉親等関係者と考えられる。第70世光教の両親である可能性が高い。これら先住や両親(?)の菩提を弔うため造立したとする意味とみられ、造立の目的と理解される。なお同寺過去帳(同寺72世円海代作成)には釈号者2名はともに記載がなかったため、現段階では2人の由来等については不明である。南面は、有縁無縁貴賤靈等皆が成仏するためという主旨であり、東面から継続して目的(願意)を記載したものである。三界万靈・法界万靈と同意で、ありとあらゆる精靈に対して供養するという意味である。3段目の南面には「石工/布尻/浅吉」とあり、製作石工名である。

⑧補修痕跡 各部材は造立当初のものと推定されるが、各石材は、モルタルで接着され、一部防水

浅吉	布尻	石工	【3段目南面】
----	----	----	---------

コーティングを施している部分もある。

(9) 考察

① 宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯は、基壇 2 段目東面・南面の銘文により判明し、その内容は先に述べたとおり、先住や住職関係者（肉親等か？）の菩提を弔うためであったと推定される。石塔が造立された安政 5 年には、2 月 26 日にマグニチュード 7 以上の飛越大地震が発生し、2 か月のうちに常願寺川流域に土石流が押し寄せ、多くの村々に被害を及ぼした。神通川流域においても、神通峡での山崩れによる田畠損壊、飛驒街道の寸断等が発生しており、甚大な被害であった。帝龍寺のある寺家村、石工の本拠地布尻村では、人的被害はなかったが、山崩れ・崖崩れが生じた〔高野 2013〕。このような混乱のさなかにおいて、本石塔が造立されたといえる。石塔製作には相当の月数を要することから、発願と製作着手は、大地震発生よりも数か月早く行われたと考えることができ、大地震による被害を受けて発願・製作を開始したものではないといえる。

以上により、直接的な造立の契機は、光教の関係者の死去などが契機になっていいると思われる。

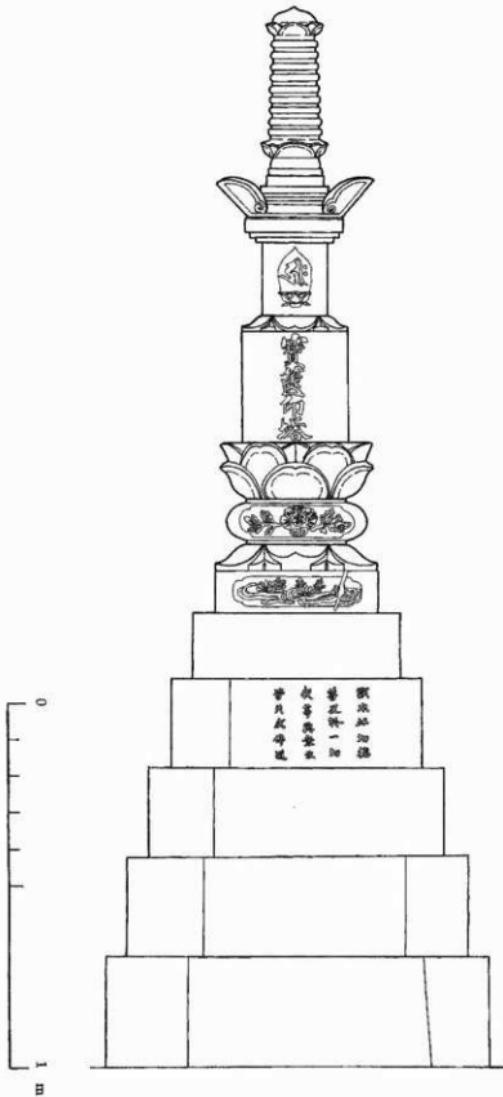
② 石工布尻浅吉について

「浅吉」は、本石塔を製作した石工の名前である。「布尻」は、浅吉が工房を置いた本拠地で、神通峡の右岸に所在する布尻村をさす。浅吉が製作した石造物は、在銘品では安政 5（1858）年から文久 3（1863）年まで 6 年間確認できる。銘がないが浅吉作の推定品も含めれば、元治元（1864）年まで 7 年間である。所在地はすべて神通川右岸であり、神通峡に多く集中し、下流側は中流の蜂川地区まで及ぶ。これは工房が神通峡右岸の布尻村に所在したことが影響しているとみられる。製作した石造物の種類は、宝篋印塔・石仏・墓石・狛犬・自然石碑がある。本寺の宝篋印塔は、浅吉唯一の宝篋印塔で、製作期間初期における代表作といえる。

(10)まとめ

本石塔は、帝龍寺第 70 世住職光教が発願し、安政 5 年造立したものである。その直接的理由は不明であるが、寺院そのもの、先代住職関係者、あるいは光教の肉親等、何らかの大きな画期を反映しているものと推定される。

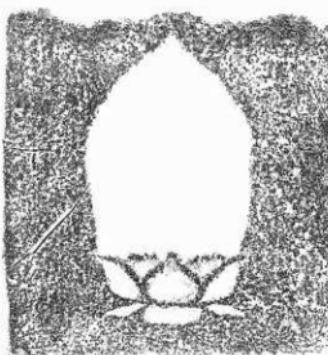
宝篋印塔は、常願寺川石工から神通峡布尻村へ移転した石工石屋浅吉が製作した。浅吉は宝篋印塔製作は、この 1 基のみである。そこには常願寺川石工として培った技術が反映され、吉祥を表す祥雲文・波彂文・蓮花文などの文様表現は、その技量の高さが知られる。



帝龍寺寶箧印塔實測圖



笠 隅飾突起側面



軸1 額（蓮花）



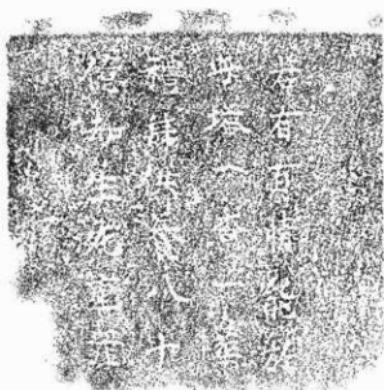
軸1 額内梵字種子キリーク
本来西面（正面）



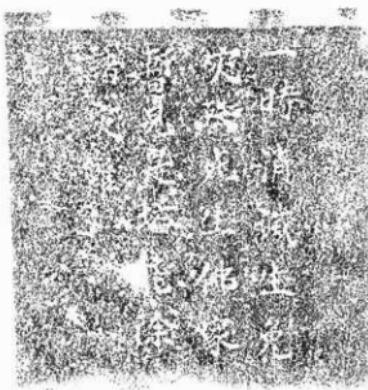
軸1 額内梵字種子アク
本来北面



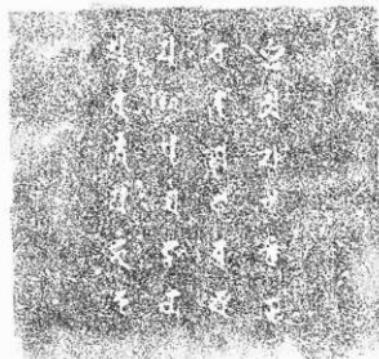
軸1 西面刻銘「宝篋印塔」



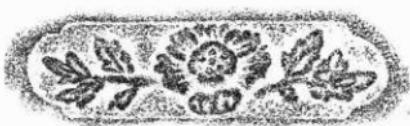
軸 2 北面刻銘



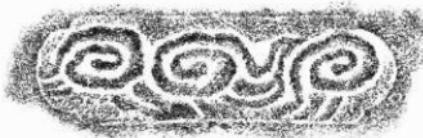
軸 2 東面刻銘



軸 2 南面刻銘 光明真言梵字



錢頭形 西面文様



錢頭形 北面文様



錢頭形 南面文様



錢頭形 東面文様



基礎文様（西面）



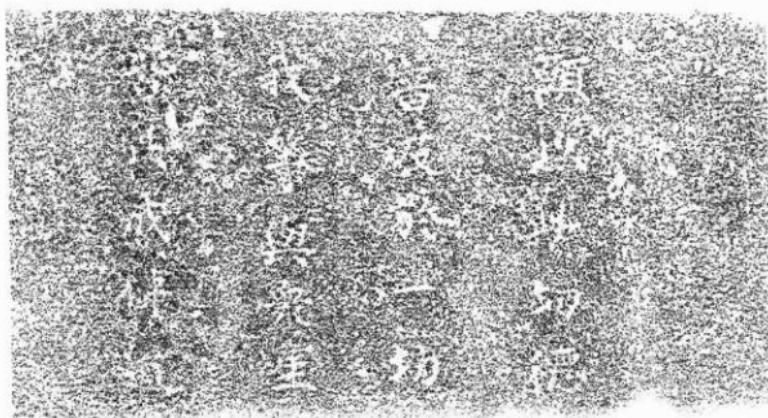
基礎文様（北面）



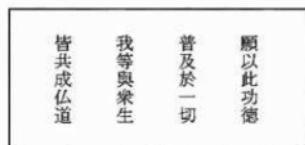
基礎文様（東面）

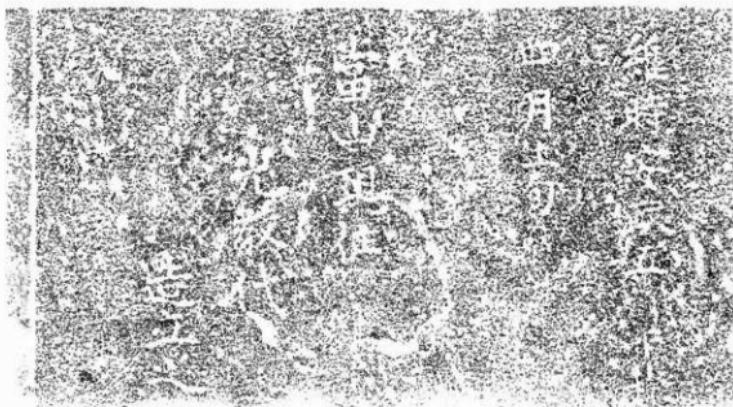


基礎文様（南面）



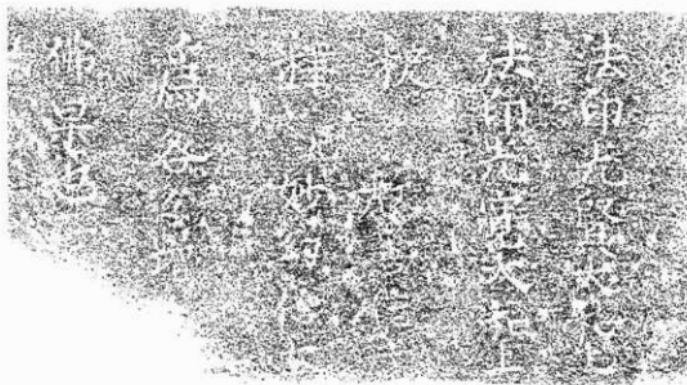
基壇 2 段目刻銘（西面）





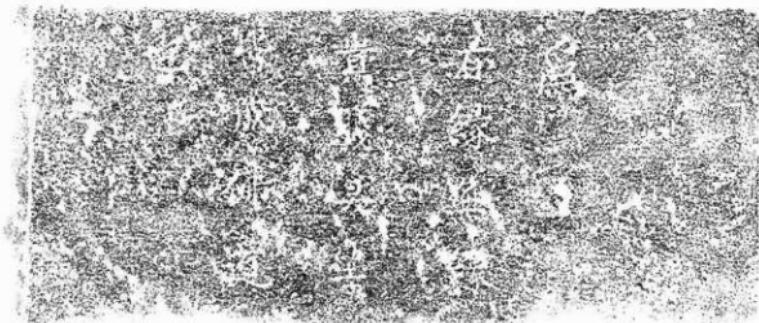
基壇 2 段目刻銘（北面）

造立之	光教代	當山現住	四月上旬	維時安政五年
-----	-----	------	------	--------

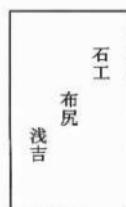
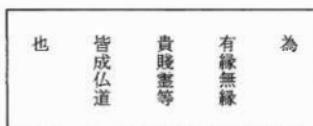


基壇 2 段目刻銘（東面）

法印光賢大和上	寂教信士	觀音院住持	為各々増進	法果也
---------	------	-------	-------	-----



基壇 2段目刻銘（南面）



基壇 3段目刻銘（南面）



船崎山帝龍寺本堂と宝篋印塔の位置



宝篋印塔全景（北東から）



宝篋印塔正面（西から）



相輪 宝珠



相輪 請花・伏鉢



相輪下部・笠上部



笠 隅飾突起（側面から）



軸1 梵字種子キリーク（阿弥陀如来）（東面）



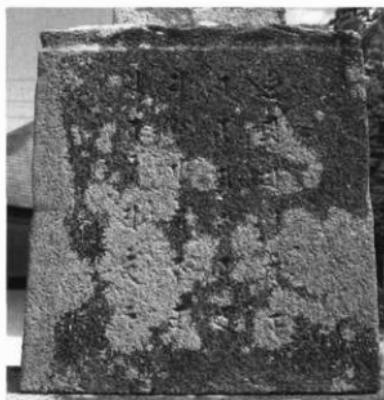
笠 隅飾突起（下方から）



軸1 梵字種子アク（不空成就如来）（南面）



軸2 銘文（経文）（北面）



軸2 銘文（光明真言梵字）（南面）



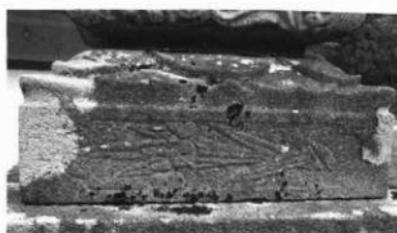
鏡頭形浮影文様（波兔）（南面）



鉢花



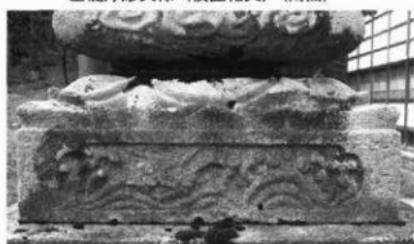
鏡頭形浮影文様（花文様）（東面）



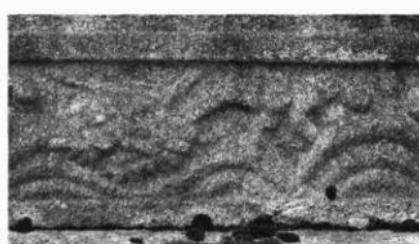
基礎浮影文様（横置花文）（南面）



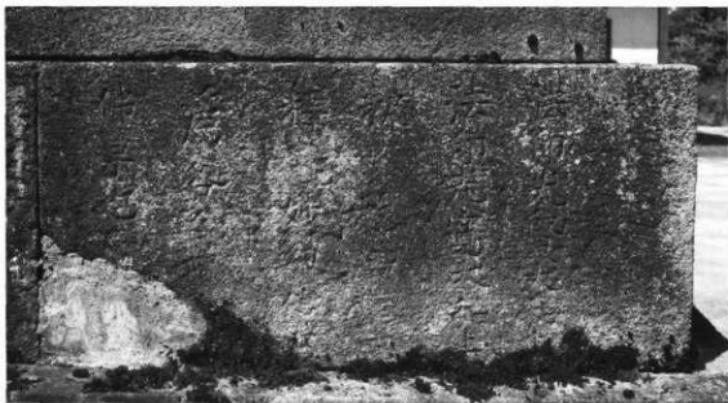
鏡頭形浮影文様（祥雲文）（北面）



基礎浮影文様（龍文・波涛文）（北面）



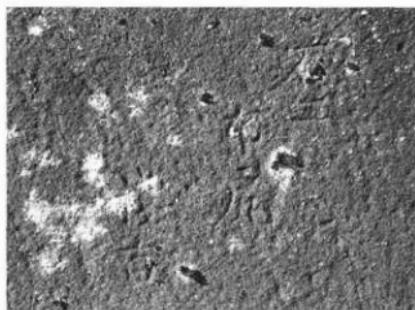
龍文部分拡大



基壇 2 段目刻銘（東面）



基壇 2 段目刻銘（南面）



基壇 3 段目石工名刻銘（南面）

5 十二王山吉祥寺宝篋印塔

- (1) 調査の目的 富山町石工製作石造物の記録調査
(2) 調査日 平成 25 (2013) 年 8 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 富山市八町 十二王山吉祥寺前
(5) 種別 宝篋印塔
(6) 年代 嘉永 5 (1852) 年
(7) 吉祥寺の概要

十二王山吉祥寺は、真言宗古刹である。

「十二王山吉祥寺由緒並創立沿革記」(万治3年栄運著、明治33年古川賛瑞写)によれば、開基は仁和元(西暦885)年吉祥僧都による。

文永2(1265)年焼失、元徳2(1330)年神保氏が再興。天文年間(1532~1555)上杉との攻防で焼失、万治3(1660)再興。現在に至る〔八町自治会編2009〕。

(8) 調査概要

① 経緯 本石塔は、吉祥寺入口の道路を挟んだ対面となる東側に所在する。

この宝篋印塔は、組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。道路に面した西側が正面である。

現在はコンクリート基壇上に置かれる。一度解体が行われたと考えられ、元の位置は不明である。

② 全体構成 現存する本体高さは7尺5寸2分(277.9cm)である。相輪が消失しており、復元高は9尺3寸7分(283.9cm)である。石塔本体の構成は、上から笠、塔身5段、基礎3段、基壇4段の13段構成で、消失した相輪を加えると、14段構成に復元される。軸1は笠の上に置かれ、その上に相輪の代わりに、中世宝篋印塔・中世五輪塔空風輪が置かれている。

③ 相輪 欠失する。他例では、宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢を1石で造る。本塔では中世五輪塔空風輪・中世宝篋印塔笠の各1石を代用して置いている。

④ 笠 軒上4段、軒下2段である。軒上は三角形に突出する段が2段、その上に階段状の段が2段ある。隅飾突起は46.5°の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。隣接する隅飾突起2つの先端の間隔は1尺8寸(54.5cm)である。

隅飾突起外面の文様は、突起上端のみ輪郭を卷いた弧下端が渦巻状となる。内部は無文で、細かくハツリが行われている。隅飾突起上端面は、笠上端よりも0.2寸程低い。

⑤ 塔身 4石5段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花、般

表1 吉祥寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	笠	7.6	23.0	18	54.5	立山天狗山石	消失。復元高18.5寸
本体	軸1	7.3	22.1	6.5	19.7	立山天狗山石	軒上4段、軒下2段
	反花	2	6.1	9.8	29.7		4面の繊細月輪に梵字種子
	軸2	8.8	26.7	9.8	29.7	立山天狗山石	軸2と1石
	請花	5	15.2	13.2	40.0	立山天狗山石	正面「宝篋印塔」裏面光明真言梵字、1面釋文、1面託拂
	般頭	3	9.1	11	33.3	立山天狗山石	正面家紋?
基礎	反花	3	9.1	14	42.4		基礎と1石
	基礎	3.5	10.6	14	42.4	立山天狗山石	
	基礎2	7	21.2	18.8	57.0	立山天狗山石	正面に刻銘
	基礎3	7	21.2	29.8	90.3	立山天狗山石	
基壇	基礎4	7	21.2	33.8	102.4	立山天狗山石	
	計		75.2	227.9		立山天狗山石	

頭形となる。

A 軸1 縦長の方形石である。大きく割れて破損しており、モルタルにより接着修理されている。4面には、月輪を浮き彫りし、その中央に梵字種子を薬研彫で陰刻する。本塔では、西側正面がタラークとなっており、時計回りに90度ずれている。雪等で落下し、破損後復元する際に、誤って置かれたものか。月輪下には、浮彫で蓮華を6葉配する。中央には宝珠形の蓋を置く。下には長い子葉2葉を配する。

B 反花 軸2と1石で作る。主弁は8葉で、間に間弁を置き計16弁である。主弁はやや厚みがあり、先端は尖って反る。弁中央に稜がある。間弁は先端が三角形となり厚い。稜はシャープである。

C 軸2 方形石で、反花と1石で作る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。正面(西面)は、宝篋印陀羅尼経を意味する梵字種子「シッヂリア」を筆書き体で大きく深く彫る。左面(北面)は、6文字×4行=24文字の経文である。「暫來塔影及踏場草摧破感障覺悟無明忽入佛家恋領法財」は、連続した経文であり、宝篋印陀羅尼経と通称する「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経」(大正T.1022B)の19.0714b24~25途中からの引用である。右面(南面)は、光明真言梵字23文字である。左上から始まり、右に進める。2段目は左から始まる。奇数行は5文字、偶数行は4文字である。字形はやや太い筆書き体である。

万遍	真言七十	奉唱光明	〔北面〕
金岡勝任	嘉永五月	〔東面裏面〕	〔東面〕

軸2刻銘

以上により、軸2銘文の流れは、(正面)「(梵字)シッヂリア」→(左面)宝篋印陀羅尼経文→(裏面)造立年・願主名→(右面)光明真言梵字の順で記載されていることになる。願主は金岡勝任、造立年は嘉永5(1852)年である。

D 請花 1石で造る。主弁は、単弁8葉の二重形式で、主弁間に単弁8葉の間弁を置き計24弁である。軸1上部反花とは弁の形態が異なり、先端が厚く尖って反る。上側主弁は丸みをもつ。間弁は薄く中央に明瞭な稜がある。

E 鎧頭形(敷茄子)

1石で造る。平面四角形で、側面は半円形である。正面にのみ文様が施される。額内を一段彫り込み、中央には六角形の枠内に二ツ巴文が浮彫される。

⑥基礎 2石3段で構成する。上から反花、方形石1、方形石2となる。反花と方形石1を1石で作る。

釈尼妙誓	理福院	林照院	理德院	常楽院	現證院	為	〔南面〕
							〔右面〕

A 反花 主弁は8葉の二重形式で、間に間弁を置き、計24弁となる。請花と一対の型式である。上面の主弁は厚みがあり、先端は大きく尖って反る。弁中央が膨らみ丸い。下面の主弁も厚みがあり先端の反りは大きい。間弁は先端が三角形となり厚い。稜はシャープである。

円明院	心鏡院	源法院	梅雲院	理教院	法岸院	密窓院	〔西面〕
							〔正面〕

B 方形石1 側面は4面ともに無文である。上の反花と1石で造る。

C 方形石2 1石で造る。側面は4面ともに楷書で陰刻された刻銘がある。

追善	法界万靈	〔東面裏面〕
釈尼嚴淨	秋首童子	寒相童子

釈尼嚴淨	秋首童子	寒相童子	釈尼妙專	帰寒童女	貞信院	〔北面〕
						〔左面〕

D 方形石2刻銘 方形石2の側面四面には、楷書陰刻による刻銘がある。右面となる南面は、最初に「為」があり、ここから始まることを示す。次に

基礎刻銘

戒名のうち院号者の院号 3 文字等を列記する。南面には 6 人が記される。正面となる西面には、右面から引続いて 7 人の院号がある。左面となる北面には、院号者・釈号者が 7 人記される。裏面となる東面には「法界万靈／追善」とあり、他の 3 面に刻まれた 20 人の戒名者に対する追善供養、及びあまねく有縁無縁の靈に対する供養を目的として造立したことを記す。

以上によりこの基礎刻銘は、南面（右面）→西面（正面）→北面（左面）→東面（裏面）の順で進み、右回りで記されたことがわかる。

⑦基壇 4 段の板石組基壇である。全体が階段状の方形壇となる。1・3・4 段目は 4 石、2 段目は 5 石の計 18 石で構成する。1 段目北側の石材 2 の中央下端には、半円形の小さな穴があり、貫通している。この穴は礫石經投入口と考えられる。本来は上端にあったが、解体に際し、天地を逆にしておいたものと推定される。板石の長さは下段ほど長いものが用いられている。2 段目北東隅角の石材 7 のみは、極端に短く、補修石材と思われる。

板石単体の長さは、最小 6 寸 3 分（19.1cm）から最大 2 尺 9 寸 7 分（200cm）である。平均は 2 尺 1 寸 7 分（65.7cm）である。補修石材とみられる石材 7 を除いた平均は、2 尺 2 寸 7 分（68.6cm）である。小口面は幅 4~6.7 寸で、平均は 5.1 寸である。

⑧補修 本体各部材は造立当初のものと推定されるが、一部防水コーティングやモルタルによる接着を施している部分もある。また、軸 1 の方位方向が半時計回りに 90 度ずれていること、基壇石材 2 の穴が天地逆になっていること等から、本塔は一度解体され、修復等されていると考えられる。

⑨考察

①宝篋印塔造立の背景について

宝篋印塔造立に関わる吉祥寺関係資料は存在しない。また、吉祥寺過去帳において、金岡勝任及び基礎刻銘者は見えないとのことである。銘文中にも吉祥が積極的に関わった痕跡が見えないため、寺院資料から造立の背景について解明することは困難である。

②戒名者について

基礎に刻銘されている 20 人の戒名者の内訳は、表 2 のとおりである。

院号者の割合が多いことから、これらの人々は、財政的に裕福な階層であったと考えられる。いずれも真言宗等密教系信徒と考えられる。

釈号者は、浄土真宗信徒と考えられる。

院号者のうち、5 名については、同定が可能である（表 3）。

富山市古鍛冶町真言宗藤居山富山寺宝篋印塔の旧塔軸 2 の刻銘（寛政 5 年）には「密窓院真山道法居士」が本堂再興に尽力したことを記す〔富山市教委埋文センター 2013〕。

また、富山寺に『大般若経』を寄贈した檀家衆の一人小杉屋彦三郎は、「理福院悦山道安居士」の供養のためと記している。

長慶寺五百羅漢第二百五・二百十一番の刻銘には、小杉屋彦三郎が「密窓院真山道法居士」「法岸院清光妙泉大姉」「理教院孤峯良仙居士」「梅雲院高岸義明大姉」の 4 人の供養のため寄進奉納したことを見ている〔館森 1990〕。そこには「改金岡」と付記があり、小杉屋彦三郎が金岡を名乗ったことがわかる。

以上により、5 人の院号者は、いずれも小杉屋彦三郎によって供養された人々であり、彦三郎の血縁者であると考えられる。また彦三郎は金岡姓であり、願主である金岡勝任とも肉親の関係が想定される。なお小杉屋彦三郎は、売薬商人であった〔館森 1990〕。

内訳	人数	割合
院号者	13	65%
釈号者	4	20%
子女	3	15%
計	20	

表 2 戒名者内訳

表3 吉祥寺宝篋印塔基礎戒名者データ

戒名 院号	過去帳等情報							
	位号	忌日	西暦	月	日	個人情報	寺院名	典故
現証院								
常楽院								
理徳院								
林照院	花屋妙雲大姉	文化元	1804	3	23	朝瑞家	富山寺	過去帳
理福院	悦山道安居士					丸業商人小杉重彦三郎血 縁者	富山寺	大般若經寄贈者
駅尼妙誓						米屋藤兵衛血縁者	長慶寺	五百羅漢(十大弟子六番)
密窓院	真山道法居士					富山寺有力植家	富山寺	弘化5年造立宝篋印塔軸刻銘で 顕彰
法岸院	清光妙泉大姉					小杉屋金岡彦三郎血縁者	長慶寺	五百羅漢(第二百五・二百十一)
理教院	淨室自光大姉	宝暦12	1762	12	25	小杉屋金岡彦三郎血縁者	長慶寺	五百羅漢(第二百五・二百十一)
	孤峯良仙居士					木村家	富山寺	過去帳
梅雲院	高岸義明大姉					小杉屋金岡彦三郎血縁者	長慶寺	五百羅漢(第二百五・二百十一)
源法院						小杉屋金岡彦三郎血縁者	長慶寺	五百羅漢(第二百五・二百十一)
心鏡院								
円明院	仙嶽祥寿大姉					太田本郷村四郎右衛門血 縁者	長慶寺	五百羅漢(第十七)
貞信院								
佛寒童女								
駅尼妙尊						富山藩士甲山忠太夫清明 血縁者	富山寺	大般若經寄贈者
実相童子		寛政5	1793	7	4	山崎吉次	各願寺	過去帳
秋音童子								
駅塵芳								
駅尼麿淨								

③宝篋印塔造立者金岡勝任について

本石塔が造立された経緯は、軸2裏面と基礎2の銘文の情報をもとに推定が可能である。これによれば、現証院ほか計20人の戒名者の追善供養のため、金岡勝任が発願して造立したものである。

金岡勝任の詳細については、V考察編で検討する。

④製作石工の推定

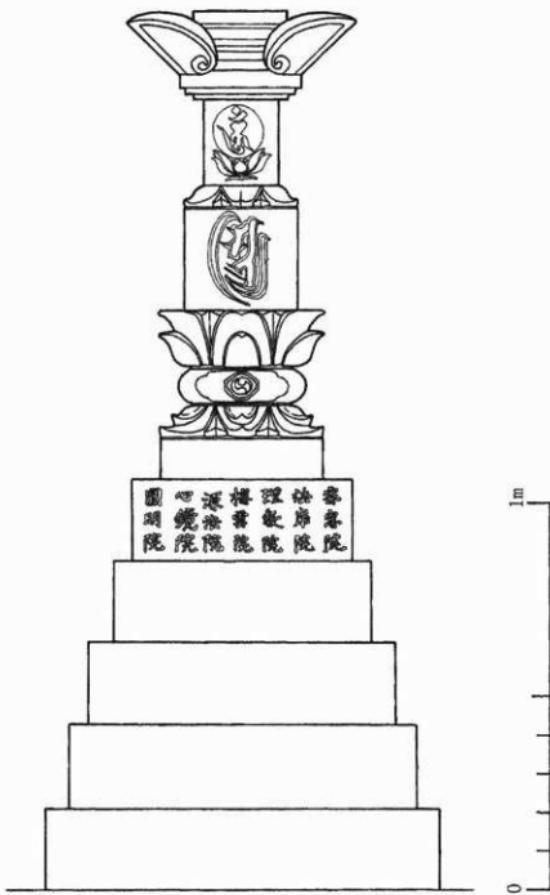
本石塔の製作石工は、石工名刻銘がないため、不明である。

V考察編において製作石工の推定を試みた結果、製作石工は、富山町石工見上兵右衛門の可能性が高いといえる。

(10)まとめ

本宝篋印塔は、富山藩士金岡彦一郎勝任が嘉永5年造立した宝篋印塔である。基礎には勝任の血縁者とみられる20人の戒名の刻銘があり、これらの人々の菩提を弔うため、造立したものである。勝任は、V考察編で検討するが、これ以前において、弘化5(1848)年真言宗富山寺、嘉永2(1849)年曹洞宗福寿寺にも宝篋印塔を造立し、のべ48人、最終的には20人すべての戒名者が吉祥寺塔に集約されて記載されたといえる。この20人は複数宗派にまたがったため、真宗を除いた戒名者の檀那寺での造立となったものか。

勝任は富山藩士として高島流砲術を学び、後に中条流剣術・民弥流居合差引役に任せられ、藩校広徳館で師範を務めたと思われる。このような中で勝任は、4年間という短期間のうちに3基もの宝篋印塔を次々と造立てていった。この背景は不明であるが、最も近い肉親である両親の死去などといった直接的な理由が存在するかもしれない。しかし具体的な詳細は不明である。



吉祥寺宝箇印塔 実測図



隅飾突起側面 拓影



軸 1 拓影



軸 2 正面 シッチリア 拓影



同 実測図



軸 2 北（左）面 拓影



同 実測図



軸2東(裏)面 拓影



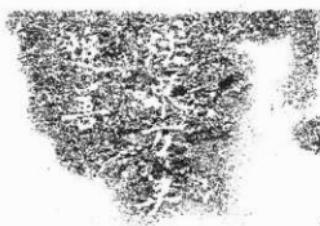
回 実験



軸2南(右)面 拓影



回 家測図



基礎裏（東）面 拓影



同 実測図

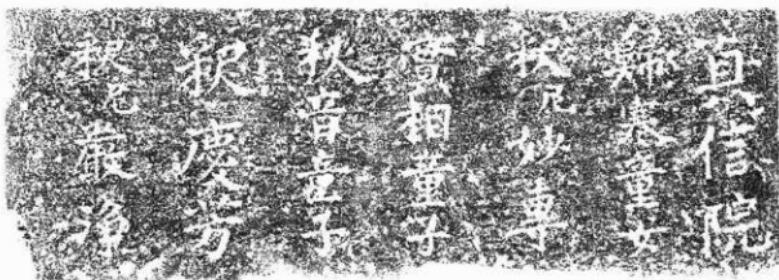


船頭形 正面浮影 拓影



密窓院
海岸院
理教院
梅雲院
源法院
心鏡院
圓明院

基礎正面 拓影 (上)・実測図 (下)



基礎左 (北) 面 拓影



全景（南西から）



全景（西から）



全景（南西から）



全景（南西から）



笠（南から）



笠 隅飾突起（下から）



軸1 梵字アク（東から）



軸2 正面（西面）梵字シッチリア



軸2左面（北面）



軸2裏面（東面）



軸2右面（南面）



請花（南から）



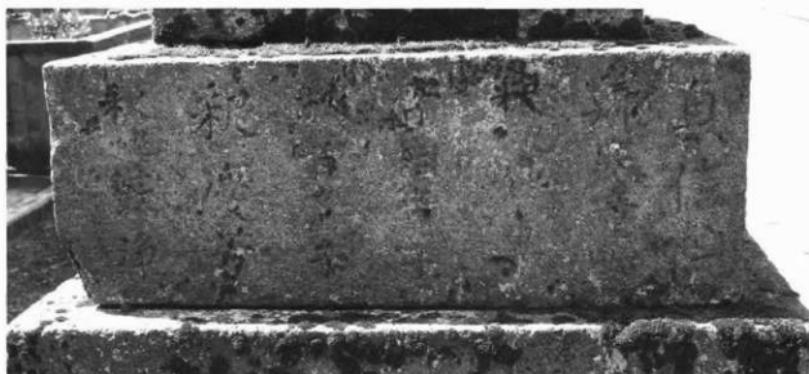
鰐頭形正面（西から）



請花・鰐頭形（南東から）



基礎 正面 刻銘（西面）



基礎 左面 刻銘（北面）



基礎 右面 刻銘（南面）



基礎 裏面 刻銘（東面）

II 雪見燈籠

1 富山金刀比羅神社燈籠

- (1) 調査の目的 富山藩家老奉納石造燈籠の記録調査
(2) 調査日 平成 24 (2012) 年 11 月～平成 25 (2013) 年 5 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 富山市泉町 2 丁目金刀比羅神社境内
(5) 種別 雪見燈籠
(6) 年代 元治元 (1864) 年
(7) 金刀比羅神社の概要

富山金刀比羅神社の来歴は、境内所在的解説板によれば、天正年間 (1573～92) 越後上杉氏の能登攻略に当たり、石動山の金鷲山持福院に奉斎されていたが焼討に伴って鮒川右岸の現在地へ遷宮した。その後越中国主佐々成政や前田氏の祈願所となつたとされる。

万治年間『富山旧市街図』(富山県立図書館蔵)・寛文 6 (1666) 年『御調理富山絵図』(富山県立図書館蔵) では、空地である。

江戸時代末期 (天保 2 (1831) 年あるいは文久 3 (1863) 年) とされる『御城内外御燒失御絵図面』(富山県立図書館蔵 前田文書第 282 号) には、「チリシ」(散地) と記され、建物移転後に空地となつたことを示す。

安政元 (1854) 年写図『越中富山御城下絵図』(富山県立図書館蔵 T092.93-106) は、本燈籠を寄進した富田大隅が写した絵図で、極彩色である。現在地には寺院であることを示す赤塗がなされており、文字は判読困難だが、「○○院」と読める。

江戸時代末期とされる『富山町絵図』(富山県立図書館蔵 T092.93-107) には、吉祥院北側に、東林寺と並んで現在地に「金比羅」とある。

以上の絵図の変遷からみて、江戸前期には空地、その後「○○院」が置かれ、その後その寺院が撤退し、その跡に金刀比羅社が勧請されたという流れが推定される。

(8) 調査概要

① 経緯 泉町金刀比羅社に富山藩家老寄進と伝承する燈籠の存在が、富山市郷土博物館に伝えられた。富山市郷土博物館からの情報提供を受け、本センターで所在を確認し調査を行なつたものである。

所有者は、富山市泉町 2 丁目金刀比羅神社宮司金山昌浩氏である。

本殿・拝殿は西を向き、参道には社標・鳥居・燈籠一対・狛犬一対が置かれる。境内西南部には、景石・雪見燈籠・花崗岩製手水鉢・植栽を置いた和風庭園が築造されている。今回調査を行なつた雪見燈籠は、庭園中央にシンボル的に置かれている。

② 全体構成 この石燈籠は、平面六角形で四脚が付く六角脚付型に分類される [京田 1970]。この型式では、一般に、宝珠・笠・火袋・中台・脚で構成される。本燈籠は、一部部材を欠失するが、笠・中台・脚は良好に遺存しており、脚に刻銘された寄進者が富山藩家老であったことが判明したこと、文化財的価値が見出された。

③ 各部材の解説 宝珠は消失する。金刀比羅神社入口向かって右側の六角型燈籠は、本例と近似した型式で、その宝珠は、球形の宝珠と六角柱形の請花からなる。本例もこのような形態の宝珠であつたと推定される。

表1 燈籠規格

部位	高さ		幅		復元値(高さ)		石材	帯磁率($\times 10^{-5}$ SI)
	寸	cm	寸	cm	寸	cm		
宝珠	欠				3.4	10.3		
笠	4.3	13.0	40.5	122.7	4.3	13.0	灰色安山岩	2120~2480
火口	別物				9.5	28.8		
中台	5.8	17.6	22.8	69.1	5.8	17.6	暗赤色安山岩	480~680
脚	16	48.5	20	60.6	16	48.5	暗赤色安山岩	2460~2670
計					39	118.2		

笠は、薄く、平面六角形である。頂部には、宝珠を置くため六角形に削り出している。頂部から端部に向かい、緩やかにカーブを描く。端部の厚みは一定で、軒反はない。

火袋は、丸形の円窓のある山燈籠用の火袋が転用されている。本来は、六角柱形で、各面に火口が付く形態であったと推定される。

中台は、平面六角形で、台上を2段とし、台下は緩やかな皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。

脚は、4脚である。脚断面は四角形となる。正面である北面の脚上部には、横書きで「奉納」、裏面となる南面の脚面には、右脚「富田大隅直傳」、左脚「富田讀岐直照」と楷書で彫られる。これは寄進者名である。また正面に向かって右側面には、「元治元甲子年十月十日」とある。これは奉納が行われた日である。元治元年は西暦1864年である。

石材は、笠が灰色の安山岩、中台、脚が織模様のある暗赤色の安山岩である。

帯磁率からみて、笠は立山天狗石や八川石など常願寺川産安山岩の数値に含まれる。赤色系安山岩は、立山天狗石や八川石などと近いものと、この4分の1ほどの低いものの2種類がある。帯磁率の分析と評価についてはV考察で行う。

(9) 考察

① 寄進者について

この石燈籠の脚の1面にある2人の刻銘は、この石燈籠を寄進した人物を示す。

A 「富田大隅直傳」

富山藩家老である。

天保7(1836)年『富山藩主墓所長岡御廟所利幹公寄進燈籠刻銘』〔真国寺編1934〕に「富田下総直傳」とある。

天保9年『富山藩分限帳』〔高瀬編1987〕に「年寄中 三千石 富田下総」とある。

天保9年富田下総が提出した由緒である『富山藩士由緒書』〔新田編1988〕に、「靈昭院様(9代利幹)御代 天保四年巳十月二十四日 父直好遣知三千石家督相続 人持組被 仰出候 同六年未五月十五日御家老職被 仰出候」とある。これを提出したのは直傳である。父富田筑後直好は文化4年～文政4年、天保2年～天保4年家老職にあり、それを継ぐ形で天保6年から家老職となつた。

安政2(1854)年『富山御藩中分限帳』〔高瀬編1987〕には「御家老格 三千石 富田筑後」とあり、石高からみてこれが直傳と推定される。筑後は父直好の子と推定され、家老職を辞めた安政2年以前に亡父の遺跡を名乗ったのであろうか。

安政元年5月『越中富山御城下絵図』(富山県立図書館蔵)は、「富田大隅写之」とある。本石塔にある「富田大隅直傳」はこの絵図作成者「富田大隅」と同一人物であると推定される。

そうすると、直傳は安政元年5月において大隅を名乗り、翌年筑後に呼び名を改名していることに

なり、後の弾正も含め、改名が頻繁すぎるといえようか。

なお、安政元年に大隅と名乗っているとすれば、家老職は安政元年以前に退いていることが推定される。

安政 6 年『富山藩主墓所長岡御廟所利保公寄進燈籠刻銘』〔真国寺編 1934〕に「富田弾正直備」とある。この寄進は安政 7 年と推定されるので、安政 7 年以前に弾正と呼び名を改名したものとみられる。

B 「富田謙岐直照」

富山藩家老である。

嘉永 6 (1853) 年『富山藩主墓所長岡御廟所利友公寄進燈籠刻銘』〔真国寺編 1934〕に「富田璋之助直照」とある。嘉永 7 年寄進された。

安政 6 年『富山藩主墓所長岡御廟所利保公寄進燈籠刻銘』〔真国寺編 1934〕に「富田謙岐直照」とある。安政 7 年寄進された。

安政 7 年『富山御家中分限帳』〔高瀬編 1987〕に「年寄中 三千石 御備頭」とあり二〇歳とある。したがって、直照は天保 11 (1840) 年生まれであることが判明する。

慶応 3 (1867) 年『富城武鑑』〔高瀬編 1987〕に「三千石 丸ノ内」とあり、三ノ丸に屋敷を構えていたことがわかる。

明治 2 (1869) 年『富山藩分限帳』〔高瀬編 1987〕に「三千石 御備頭 刑法之事 三〇」とある。

②石燈籠の寄進年代と富田氏呼称について

石燈籠が寄進された元治元年は、直照が 3,000 石を押領し、25 歳で家老職にあった時期である。このとき直備が存命していたかどうかは、安政 6 年以後の資料がなく不明であるが、戒名法名が記載されているのではないことから、存命中であったと考えられ、40~50 歳代と推定される。

直備が大隅を名乗るのは、天保 9 年以降、安政元年以前である。安政 8 年以降は不明であり、元治元年に大隅となっているということは、安政 8 年以降「弾正」から再び大隅に変えたことになる。

直照が謙岐を名乗るのは、嘉永 7 年以降であり、元治元年に謙岐を名乗るのは矛盾しない。

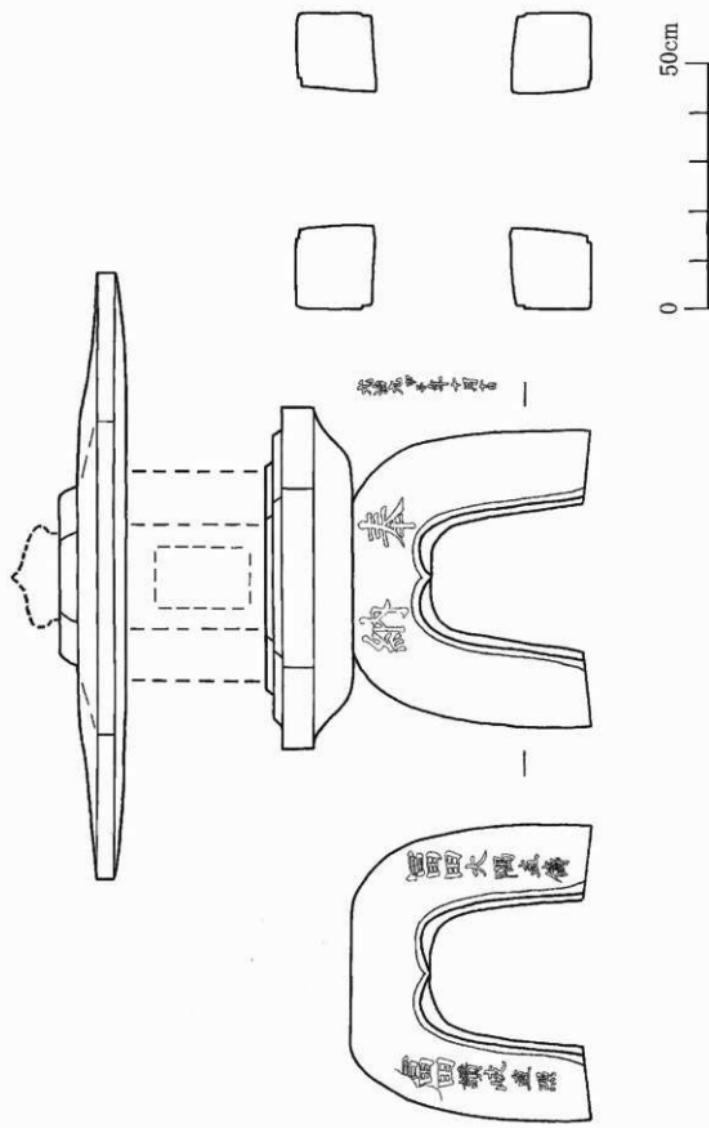
なお、「大隅」「謙岐」は、正しくは、「大隅守」「謙岐守」であり、守が省略された呼び名である。守は、それ以前の律令時代において國守であったことを意味する旧官職名であり、江戸時代において実効性が伴わないまま「〇〇守」と勝手に名乗ることが多かった。通常の呼び名として、あるいは藩士名簿にはこの旧官職名等のミドルネームが記載された。

(10)まとめ

本燈籠は、富山藩家老が寄進した通称雪見燈籠として、由来・年代が明確なものであり、歴史的価値が高い資料である。ただし、宝珠・火袋が欠失しており、原形をとどめていないという欠点がある。県東部に所在する他の類似燈籠の分析から、欠失した部品についてはほぼ正確に復元することが可能であり、これによる復元検討は V 考察で行う。

石工は不明であるが、富山町石工あるいは常願寺川石工の手によるものであろう。

本燈籠は、富山藩領内における雪見燈籠の歴史を明らかにするための形式的・年代的基準資料として位置づけることができる。



金刀比羅神社境内燈籠実測図



脚正面 刻銘「奉納」拓影

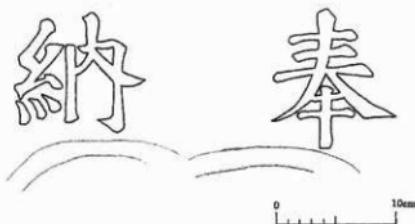


圖 2-2 脚正面 刻銘「奉納」実測図



脚側面年号刻銘拓影



脚側面年号刻銘実測図



脚左裏面寄進者刻銘拓影

宮田大隅直儕

脚左裏面寄進者刻銘實測圖



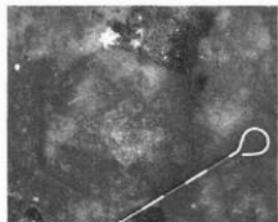
脚右裏面寄進者名拓影

宮田讚岐直昭

脚右裏面寄進者名實測圖



燈籠全景（北から）



笠頂部　宝珠台

笠頂部　六角宝珠台（上から）



中台



脚部上部刻銘「奉納」



中台のひび割れ状況



脚刻銘 2 「富田讚岐直照」



脚刻銘 1 「富田大隅直壽」



脚刻銘 3「元治元甲子年十月十日」



笠底面のノミ加工・油煙による黒化状況



脚部内面

2 黒部市倉田邸庭園燈籠

- (1) 調査の目的 富山藩関係石造燈籠の記録調査
(2) 調査日 平成 24 (2012) 年 5 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 黒部市三日市倉田邸庭園
(5) 種別 雪見燈籠
(6) 年代 江戸時代後期
(7) 倉田邸庭園の概要

本庭園は、かつて国会議員寺島権蔵氏が所有し、大正後期から昭和初期に造られたもの。昭和前期に倉田主が購入した。雪見燈籠は、舟見宿駅の加賀藩本陣となった脇坂家が所有していたもので、それ以前は富山城にあったと伝える。武内淑子氏より、黒部市に富山城に由来するという伝承のある燈籠が存在するという情報を得たため調査を行なった。

所有者は、黒部市三日市大黒町 3048 倉田一幸氏である。なお、倉田家庭園及び燈籠類等については、八木均氏により文書化され、またホームページに掲載・紹介されているものがある。

(8) 調査概要

①全体概要 (表 1)

この石燈籠は、平面八角形で四脚が付く八角脚付型 [京田 1970] に分類される。

全高は、5 尺 6 寸 7 分 (171.8cm) で、同種の燈籠では現在のところ最も大型品である。

②宝珠 扁平につぶれた半球形で、頂部は小さく突出し尖る。

③笠 やや薄く、平面八角形である。屋根は、頂部が広い平面となり、傾斜は直線的である。軒反ではなく、軒端は 1 寸 (3cm) と薄い。裏面は平坦で、中央の火袋上部が削り貫かれているため、その部分は煤で黒化している。

④火袋 八角柱形で、上下端には帯状の突帯が巡る。各面に縦長長方形の火口が付く。現状は各火口にガラス格子板が嵌め込まれている。火口の上下には、横長長方形の浅い彫り込みがある。内部は、天井部が削り貫かれており、煤が直接屋根底面に当たる。床面は、火口下面より 2.7 寸 (8.2cm) ほど高くなっている。石材は花崗岩系で未見の石材である。新補品の可能性がある。

⑤中台 平面八角形で、台上を 3 段とし、台下は緩やかな皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。側面は額内を彫りくぼめ、中に蓮葉+唐草 (蔓か) を浮彫するもの 5 面、唐草のみのもの 2 面、無文のもの 1 面で構成する。無文部分は母屋からみて裏面、唐草のみのものはその両側面としている。

⑥脚部 上部がすぼまる四角柱形で、対する 2 面が平面、残る 2 面が中空である。平面部には四脚を模した額が彫り込まれる。刻銘はない。

脚は稻荷神社境内燈籠と似た作りである。
⑦石材 宝珠・笠が灰色安山岩の立山天狗山石、火袋は不明石材 (花崗岩か?)、中

表 1 燈籠規格

部位	高さ		幅・辺長		石材	帶磁率($\times 10^{-5}$ SI)
	寸	cm	寸	cm		
宝珠	3.5	10.6	11	33.3	立山天狗山石	
笠	6	18.2	20	60.6	立山天狗山石	2320～2870
火口	14.7	44.5	7.7	23.3	花崗岩?	2460～2960
中台	8	24.2	11.2	33.9	赤色安山岩	820～1260
脚	25.5	77.3	28	84.8	立山天狗山石	2320～2640
計	57.7	174.8				

台は産地不明赤色安山岩、脚部は黒色の脈が嵌入する灰色安山岩で、立山天狗山石とみられる。

(9)まとめ

本燈籠には刻銘がなく、由来や年代を明らかにする根拠に欠ける。

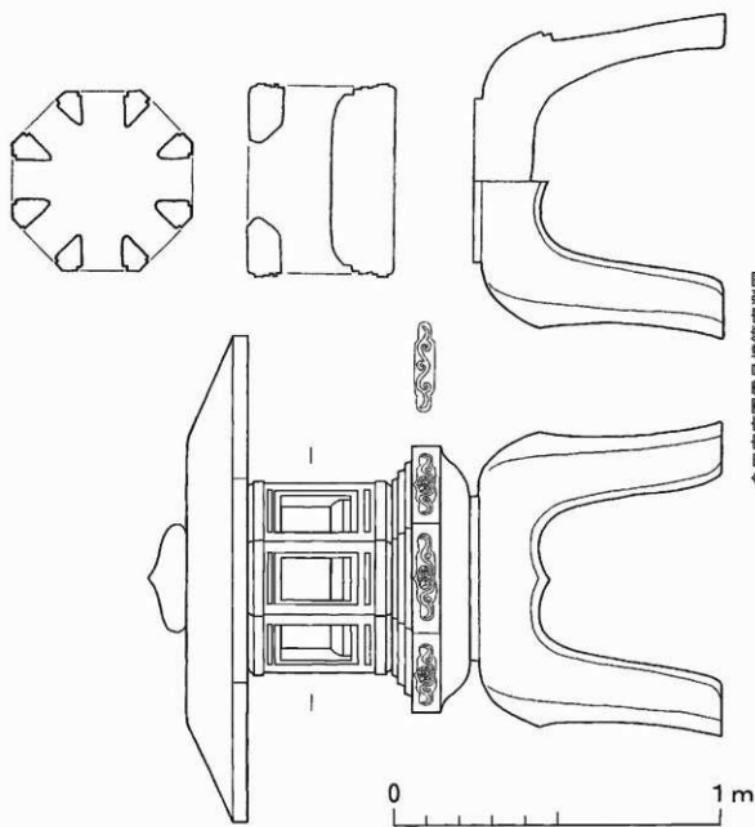
伝承にあるように、本燈籠の製作年代は富山藩政期から近代初期にかけてと推定され、数少ない雪見燈籠の一つである。V考察で検証を行うが、本燈籠は常願寺川石工が製作した可能性が高く、製作当初は富山城下町内あるいはその周辺に所在していたと推定される。また製作年代を詳細に見れば、文久以前の幕末期であり、類似した雪見燈籠のうち最も古いものと考えられる。

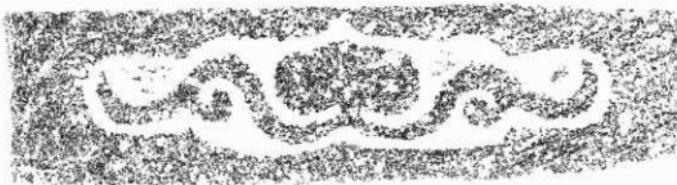
常願寺川石工による雪見灯籠は、富山市内に多く、本燈籠が富山城に関係したものかもしれないという口碑伝承は、概ね妥当といえよう。ただし、富山城に直接関連したものかどうかは不明である。

前項の泉町2丁目金刀比羅神社燈籠は唯一富山藩現職家者が寄進したものであるが、それ以外の多くは、神社神主や有力氏子が寄進したものである。本燈籠では願主等の銘がなく、どのような人物のが製作したかは不明であるものの、大型品で、他にない中台の浮彫り文様など華美な装飾といった特徴は、かなりの有力者が依頼主であったと推定できる。

以上の推定は、まだ予測であり、最終結論とするには至っていない。今後、さらに加賀藩領域における類例の検証も進め、データを増やすことにより、より確実性の高い結論を提示していく必要がある。

食田家庭園雪見燈籠実測図





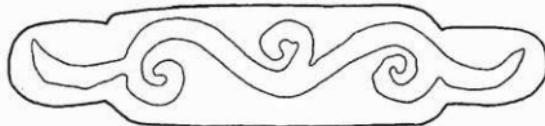
中台浮彫文様A 拓影



中台浮彫文様A 実測図



中台浮彫文様B 拓影



0 10cm

中台浮彫文様B 実測図



燈籠位置（母屋側、北西から）



燈籠全景（北西から）



燈籠全景（南から）



笠 上部



宝珠



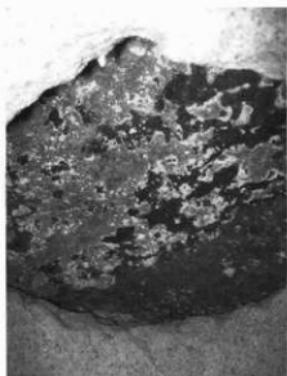
笠 隅角部



笠 底面黒化状況



火袋



火袋天井部の黒化状況



火袋 下部影込み



火袋内部



火袋内部



中台



中台 主浮彫文様A



中台 浮彫文様B



脚部（北から）



脚部側面加工状況



脚部内面

3 越中稻荷神社燈籠

- (1) 調査の目的 富山城下町内石造燈籠の記録調査
(2) 調査日 平成 25 (2013) 年 5 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 富山市稻荷町 2 丁目・館出町 1 丁目 越中稻荷神社境内
(5) 種別 雪見燈籠
(6) 年代 江戸時代後期
(7) 稲荷神社の概要

越中稻荷神社は、旧北陸街道に面した稻荷村に鎮座する (図 1)。もと奥田村であった。明治 3 年同社由緒書によれば、大宝元 (701) 年佐伯有頼創建とする。¹⁾ 戦国末には、富山城に籠った一向一揆勢を打つため上杉謙信が当地に砦を築いた。この砦に拠った土肥源七郎が永禄年間 (1558-70) に稻荷社を祀り、後に越中國主佐々成政が社殿を再建したと伝える [高瀬監修 1994]。

『越中旧事記』には「別当照岸寺 上宮土祖神中社倉稻神下社大山祇女と云」とあり [富山郷土研究会 1932]、本社の別当寺として、天台宗照岸寺が隣接して存在したが、明治の廢仏毀釈で廃絶した [柳町郷土史編集委員会編 1996]。

(8) 調査概要

① 経緯 本燈籠は、富山稻荷神社境内に所在する。北側参道から境内に入ると、参道右側に「三集殿」建物があり、参道に面した入口右側にこの石燈籠が置かれている。石燈籠前には、小さな説明板が設置されており、そこに「お化け燈籠」と説明されている。

また、本燈籠は昭和 11 年に、県庁近くの神通川沿いにあったものを、当地に移設したという。²⁾ 本燈籠は、組合せ式の石造燈籠で、本体の遺存状態は良好である。

② 全体構成 (表 1)

この石燈籠は、屋根平面八角形で四脚が付く八角脚付型に分類される [京田 1970]。全高は、5 尺 3 寸 7 分 (160.6cm) で、同種の雪見燈籠では大型の部類に入る。

③ 宝珠 扁平につぶれており、肩部に稜をもつ。頂部は小さく突出し尖る。

④ 笠 厚みが薄く、平面八角形である。屋根は、頂部が広い平面となり、起り屋根形態である。軒反はない。軒端は 1 寸 (3cm) と薄い。裏面は平坦で、中央の火袋上部が刺り貫かれていたため、その部分は煤で黒化している。

表 1 燈籠規格

部位	高さ		幅・一边長		石材	帶磁率($\times 10^{-5}$ SI)
	寸	cm	寸	cm		
宝珠	4.5	13.6	15	45.5	立山天狗山石	
笠	6	18.2	28	84.8	立山天狗山石	2300~2500
火口	16.2	49.1	22.6	68.5	赤色安山岩	750~850
中台	7.5	22.7	32	97.0	赤色安山岩	460~780
脚	18.8	57.0	31.4	95.1	赤色安山岩	510~560
計	53	160.6				



図 1 燈籠位置図 (図中●)

煤が直接屋根底面に付着している。床面は、火口下面と同じ高さであり、平坦面である。

⑥中台 平面円形で、台上は平面、台は4.5寸の厚みがある。台下は緩やかな皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。側面は無文で、中台表面全体が粗いハツリ整形で仕上げられている。

⑦脚部 上部がすぼまる四角柱形で、対する2面が平面、残る2面が中空である。平面部には額はなく、無文である。脚部表面全体が粗いハツリ整形で仕上げられている。刻銘はない。

⑧基壇 四角形状の板石4枚を組み合わせて基壇戸している。中央は空き土間となっている。この基壇は、元来の燈籠基壇ではなく、転用材を用いて作ったものである。

⑨石材 宝珠・笠が灰色の安山岩である立山天狗山石、火袋・中台・脚部は、産地不明の赤色安山岩である。帯磁率測定の結果、笠は立山天狗山石の範囲、火袋・中台・脚部はこれの約4分の1の数值で、泉町2丁目金刀比羅神社燈籠の中台・脚に用いられる暗赤色安山岩に類似する。

(9)まとめ

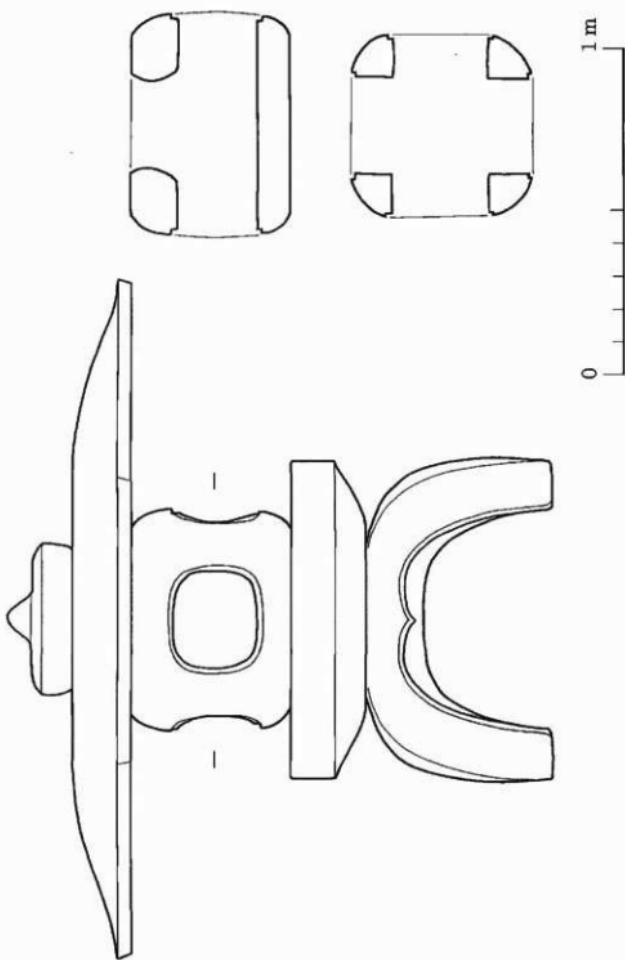
本燈籠には、刻銘がなく、由来や年代を明らかにする根拠に欠ける。

本燈籠は、富山藩政期から近代初期にかけて製作された数少ない雪見燈籠の一つである。検証の結果、常順寺川石工が製作した可能性が高いと推定される。また製作年代は幕末期であり、類似した雪見燈籠中、最も古いもの一つと考えられる。本燈籠は大型品であり、製作の依頼者はかなりの有力者であったとみられる。

注

- 1 越中稻荷神社ホームページに解説がある。

お化け燈籠 実測図





燈籠位置（白丸内が燈籠）



お化け燈籠 全景（東から）



宝珠



笠 隅角部



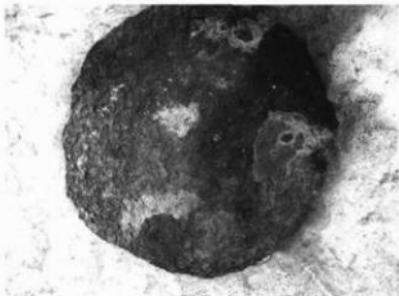
笠 端部



笠 下面 (整形及び黒化)



火袋 側面から



火袋 天井部穿孔（真下から）



火袋 底面



火袋 天井部



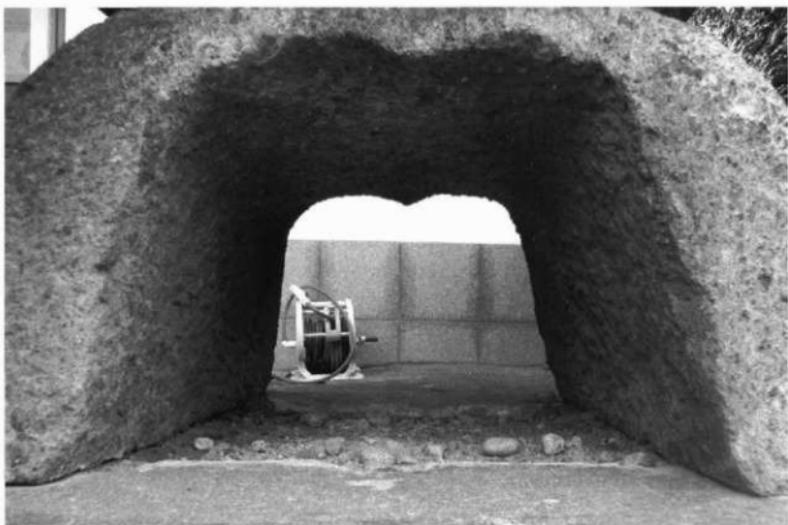
中台（円形）



脚部（基礎）



脚部 外面整形



脚部 内面整形

III 一字一石塔

1 平等山海翁寺

- (1) 調査の目的 常願寺川石工製作石造塔の記録調査
(2) 調査日 平成 25 (2013) 年 8 月～11 月
(3) 調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)
(4) 所在地 射水市白石 曹洞宗平等山海翁寺境内
(5) 種別 一字一石塔
(6) 年代 文化 3 (1806) 年
(7) 海翁寺の概要

海翁寺は、射水市白石に所在する曹洞宗寺院である。

貞享 2(1685)年 7 月に加賀藩に提出された寺社由緒書上によれば、文明 5 (1473) 年富山海岸寺四代の大初和尚による開基で、下村百姓地が寄進されたことを記す。貞享 2 年における住職は天養である〔井上校訂 1974〕。

高岡瑞龍寺 18 世国常閑雲 (1778～1859) は、江戸で仏道修行中、帰郷の際本寺で碧巖錄や儒学の講義を行った〔『富山県史』〕。

明治 24 年 3 月に再作成された同寺所蔵『過去帳』によれば、開基は太初宗甫大和尚である。太初宗甫和尚は海岸寺（現在富山市梅沢町 3 丁目）九世住職であり、天文 9 (1540) 年没した。以後本寺五世までは海岸寺から赴任した（延享～寛政年代）。以後の住職歴は次のとおり。

六世 梵龍石音大和尚 享和 3 (1803) 年 7 月 29 日寂
七世 大道活門大和尚 文化 10 (1813) 年 2 月 11 日寂
八世 梵翁補參大和尚 文政 5 (1822) 年 8 月 21 日寂

なお、本寺過去帳には寺社由緒書上にある天養住職の名は見当たらない。

(8) 調査概要

① 経緯 本石碑は、石造物のうち、経碑と呼ばれるもので、元来礫石經経塚の標識として地上に建立されたものである。経碑の型はさまざまであり、この石碑は中世五輪塔をモデルにした石塔形である。

経碑はいくつかの種類に分類される。経典を読誦した「經典読誦塔」、経典を書写した「經典書写塔」、小石 1 個に 1 字ないし數文字の経典を書写した小石（礫石經）を埋めた「一字一石塔」などがある。

礫石經経塚とは、礫石經を土中に埋めたものをいい、多くは地上に墳墓として残る。書写した経典は、「法華經」が大半で、ほかに「陀羅尼經」「般若經」「観音經」等がある。この経碑では法華經が書写されたことが、碑正面の刻銘に記載されている。

ここでは、「一字一石塔」と呼称して進めるものとする。

本一字一石塔は、本堂南西隅に置かれている。

この場所は、かつて法華納経塚が存在し、その跡地にこの石塔のほか、板状石碑・円形台石が置かれている。板状石碑には「奉納絶供養塔」と刻まれており、明治 37 年に巡礼記念として造立されたもので、経緯がわかる。碑には円形台石が「踏石」で、その下に四国霊場の砂が埋められていることを刻んでいる。円形台石は、一字一石塔の北 2.4m の地点に存在する。

したがって、板状石碑・円形台石は、一字一石塔とは直接関係がなく、一字一石塔は板状石碑と同じ形のコンクリート製台座の上に置かれていることから、この台座が施工されたときに、一度解体さ

れ復元されたものと思われる。なおその時期については、明治37年ではなく、昭和に入ってからと考えられる。

②全体構成（表1）

石塔の全体形は、中世の五輪塔の形状をモデルにし、変形したものである。

本塔は北側を正面とする。コンクリート製台形状基壇の上に置かれる。

本体高さは4尺6寸1分(139.7cm)である。コンクリート台座は高さ84.8cmで、全体高は224.5cmである。

石塔の形状は、中世五輪塔の基本形（空輪・風輪・火輪・水輪・地輪の5区分し、空輪と風輪を1石で造る）を踏襲し、空輪を宝珠、風輪を台形状、地輪を板石組に変更している。このような変更に基づき、各部位を「○輪形」と呼び、以下進める。

本体の構成は、上から空輪形、風輪形、火輪形、水輪形、地輪形からなる。

③空輪形 いわゆる宝珠

の形であり、上から宝珠・請花の順となる。これらは1石で造る。

宝珠は整った球形で、上端は尖る。正面には、径4寸の月輪が浅く彫り込まれている。それ以外の宝珠部分外面には、縦書きで戒名が彫られている。月輪の上には戒名とみられる刻銘3列、月輪の左側から始まり周囲を廻る25人の戒名があり、計28人の戒名者が刻銘されている。

請花は、主弁4弁、間弁4弁の計8弁構成である。主弁は単弁で、弁の形状は丸く、先端が外向きに突出する。表面には10本の弁脈がある。間弁は先端が三角形で、弁脈は6本である。

底面には円柱状のホゾがある。径2.6寸(7.9cm)、高さ0.8寸(2.4cm)で、下の風輪形の上面中央に開けられたホゾ穴に収まる形状である。

④風輪形 部材の形状は、逆台形状である。上面が広く、中央が盛り上がる。上面中央に円形の本ゾ正穴があり、空輪形底部のホゾを受けるようになっている。

正面中央には、花蕾形に彫りこぼめられた中に仏像形を浮彫りしたものを2つ配する。

各像形の大きさは、縦4.6寸横3.7寸である。

右尊は、像右側に「多宝」と刻銘がある。「多宝」は多宝如来のことである。像形は、禅定印を結び、半跏趺坐する坐像である。蓮台の蓮弁には6本の弁脈がある。

左尊は、像左側に「釈迦」と刻銘がある。「釈迦」は釈迦如来のことである。像形は、禅定印を結び、半跏趺坐する坐像である。蓮台の蓮弁には6本の弁脈がある。

残る3面には、戒名が縦書きで記載される。左（東）面10人、裏（南）面5人、右（西）面9人の計25人である。

⑤火輪形 五輪塔火輪と同形の笠である。

軒下端は、わずかに軒反りとなる。軒端部はやや薄い。

正面には2尊が浮彫される。各像形の大きさは、縦4.4寸横3.5寸（蓮台幅）である。

右尊は、像右側に「觀音」と刻銘があり、右手施無畏印を結び、左手に蓮蕾を持つ坐像である。光背の頭光は円光である。蓮台の蓮弁には6本の弁脈がある。

表1 海翁寺石塔規格

区分	形態	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
空輪形	宝珠	10.2	30.9	8.2	24.8	安山岩	側面に刻銘
風輪形		6	18.2	14.6	44.2	安山岩	正面に2尊、3面に刻銘
火輪形	笠	6	18.2	15.8	47.9	安山岩	正面に2尊、3面に刻銘
水輪形	塔身	9.3	28.2	12.2	37.0	安山岩	正面に1尊、3面に刻銘
地輪形	基礎1	3.6	10.9	18	54.5	安山岩	正面に刻銘「法華石経塲」
	基礎2	7.5	22.7	17.4	52.7	安山岩	正面に刻銘
	基礎3	3.5	10.6	22	66.7	安山岩	側面に刻銘
	計	46.1	139.7				

左尊は、像左侧に「無尽意」と刻銘があり、左手と願印を結び、右手は腹の前で拳を握る（寂迦の触地印・降魔印の変形か）坐像である。光背の頭光は円光である。蓮台の蓮弁には6本の弁脈がある。無尽意菩薩は、密教における賢劫十六尊の一つ、また薬師八大菩薩の一つで、梵鏡（經典）が持物であるとされるが、本像では円形状のもの、おそらく数珠を左胸前に掲げる。

残る3面には、戒名が縦書きで列記される。左（東）面7人、裏（南）面4人、右（西）面6人の計17人である。

裏面の4人の戒名の後には、造立年代等経緯が記される。「維時文化二乙丑天（？）／結別立時勤發而／寅正月口立正口」とある。文化2年は西暦1805年で、「寅」はその1年後の文化3年正月である。この文の意味は、文化2年に「結別」=死去し、発願して翌年にこの石塔を造立したという経過を示したものである。末尾の不明文字は「尚」か。

⑥水輪形 五輪塔水輪と同じ球形で、均整のとれた形状である。これが塔身にあたる。

正面中央には、花頭形の額内に、禅定印を結ぶ地蔵菩薩坐像が浮彫される。これは風・火輪形の2尊よりも大きく表現され、主尊と理解される。

主尊以外の部分には刻銘がある。刻銘は左から始まる。1行目は願主情報である。「尾陽前常清密之仙願主記者」とあり俗名である「常清密之仙」が願主名とみられる。「尾陽」は尾張の意味で、現在の愛知県である。常清密之仙は、後述する石工3人以外の唯一の俗名者であることから、願主のうち最も有力な人物と推定される。その後戒名者26人が書かれ、計27人である。20人目と21人目の間に「先祖代々」の文言が挿入されている。

末尾行は「当寺現法九世大信代置正尚」とあり、九世大信戒和尚代に造立したことを示す。

⑦地輪形 3段からなる板石組基壇で、全体が箱形となる。9石で構成される。基壇内部は中空と推定される。

1段目は、長方形の板石1石を横置きする。幅18寸、奥行17.5寸で、ほぼ正方形である。正面には陰刻で「法華石經塚」の楷書刻銘がある。

2段目は、板石4石を縦置きし、方形に組む。東西面に長い石を置き、南北は2石の間に入れ込む形で、小口面は見えない。表面に見えている石面は、ビシャン叩きにより平滑面を整形する。簾状の痕跡を残す。

2段目の刻銘は、4面ともに認められる。詳細に見れば、各石材5大面（4面）のすべてのほか、露出する小口面をもつ石材3・5のうち、石材5の両小口面のみに刻銘がある。刻面のある全面数は計6面である。

刻銘は、戒名者と石工名がある。戒名者は、正面（北面） $3+10+4=17$ 人、左（東）面5人、裏（南）面 $10+2=12$ 人、右（西）面16人の計48人である。

石工名は、東面の頭書から3人の後にやや間隔を空けて刻む。「富山／馬瀬口村」の「甚右衛門／宗八／善七良」であり、3人で共作したものである。筆頭者の甚右衛門が棟梁、後の2人は甚右衛門工房所属石工と推定される。戒名者二人は善七郎の次行から再度始まる。

3段目は、細長い板石4

表2 基礎板石規格

段 番号	位置	長		高		厚		備考
		尺	cm	尺	cm	尺	cm	
1段目	横置き	18	54.6	3.5	10.6	17.5	53.0	正面刻銘
	2 北面	10	30.3	7.5	22.7	計測不能		刻銘
	3 東面	17.8	53.9	7.5	22.7	4	12.1	刻銘
	4 南面	10.5	31.8	7.5	22.7	計測不能		刻銘
	5 西面	17.9	54.2	7.5	22.7	3.4	10.3	刻銘3面
2段目	6 北面	22	66.7	3.5	10.6	5.8	17.6	
	7 東面	10.8	32.7	3.5	10.6	計測不能		
	8 南面	21.9	66.4	3.5	10.6	4.8	14.5	
	9 西面	11	33.3	3.5	10.6	計測不能		
平均		16.5		47.1				

石を横置きする。刻銘はない。

板石単体の長さは、最小 1 尺 (30.3cm) から最大 2 尺 1 寸 9 分 (66.4cm) である。平均は 1 尺 5 寸 5 分 (47.1cm) である。小口面は厚さ 3.4~5.8 寸である (表 2)。

⑧補修 基壇がコンクリートに変更されており、一度解体されていると考えられる。ただし、本体各部材は造立当初のものと推定される。

(9) 考察

①石塔の意義

一字一石塔は、主に法華経を書写した礎石経を土中に埋納した塚の上に、石標として建てるものが多い。このような石塔は、多様な形態が認められているが、本例のような像形を浮彫した五輪塔形の石塔は珍しい。

本例では、地輪形 1 段目正面に「法華石經塚」とあることから、法華経を小石に書写した礎石経を埋納した塚が存在し、その上に標識として置いた経碑であることがわかる。現在その塚は跡形もなく、どこに存在していたかも不明であるが、本石塔の近辺に所在していたものと推定される。

本石塔では、地輪形の基礎が板石組となっており、その中は中空であることから、礎石経はそこに収められたことも考えられるが、空間が狭小であることから、礎石経の一部あるいは經典そのものが納められた可能性もある。いずれにせよ、法華経を奉納することにより功德を得られるとして、戦国末以降一字一石塔の造立が開始され、江戸以降盛んになったという歴史的背景がある。

②石塔造立の背景について

本石塔には、各部材に戒名等が刻銘されていた。その内訳は、戒名者計 146 人、願主 1 人、当寺住職 1 人、石工 3 人である。

造立された経緯は、本寺七世大僧 (?) 住職代において、尾張の常清密之仙が願主となって発願し、文化 3 年に造立したものと考えられる。本寺過去帳においては、七世住職は大道活門住職となっており、刻銘の解説をもう少し詳細に行う必要もある。

直接の契機は、文化 2 年における供養者の死去とみられる。石塔の造立は、一周忌に当たることから、供養者の年忌供養の行事として行われたものであることがわかる。

③風・火・水輪形における像形について

この石塔の部材のうち、風・火・水輪形には、それぞれ 2 尊・2 尊・1 尊の計 5 体の仏像が浮彫りされている。仏像の種類は、風・火輪形では各像の横に刻銘があることから判明する (表 3)。

風輪形において多宝如来と釈迦如来が並んでいる姿は、法華経文において、釈迦の説法を庶民に伝える役割を多宝如来が行うといった関係にあることから、この 2 如来が並べて表現されることが多い。これを並坐像とも呼ぶ。曹洞宗における本尊は釈迦如来である。

火輪形において觀音菩薩と無尽意菩薩は、ともに薬師八大菩薩の一つである。薬師如来の功德を庶民に知らせる役割をもつ。

水輪形の地藏菩薩は、中央に 1 体のみ大きく表現され、全体の主尊である。地藏菩薩は最も多い庶民信仰対象であり、それが反映されたものか。

表 3 各部材の仏像種類

部材	仏像名称	位置	備考
風輪形	多宝如来	右	一對、並坐像
	釈迦如来	左	
火輪形	觀音菩薩	右	薬師八大菩薩の一
	無盡意菩薩	左	
水輪形	地藏菩薩	中央	常教の賢劫十六尊の一、薬師八大菩薩の一

表4 海翁寺一字一石納経塔刻銘一覧

番号	部位／人數	面位置／人數	戒名等	過去帳との照合	備考
1	空輪形	正面	●●●●		
2	28	3	●●●●		
3			●●乃六		
4		左から	●●●●		
5		25	祝尼妙淨信女 福拍院宗樹居士		
6			●●○●●女		
7			●●●●信女		
8			●●●●信女		
9			●●●●		
10			●●●●		
11			●●妙惠信女		間
12			●●●和尚		間
13			●●●●		
14			●●●阿沙弥		
15			●●●●比丘		
16			●●●●庵主		
17			●●●●		
18			●●●●信女		
19			●南院松印信女		
20			●●●●		
21			●●●●居士		間
22			●●●●		間
23			●●●●女		間
24			●●●●		間
25			●●●●信女		間
26			●●●●		間
27			●●●●		間
28			●●●●信士		
29	黒輪形	東面	白龍護善和尚		
30	24	10	高安道方上座		
31			光誓不白居士		
32			光山慈相信士		
33			夏天水消居士		
34			法輪真正大姑		
35			正窓妙念信女		
36			果了禪覚子		
37			流正童女		
38			貞●未始大姑		
39		南面	瑞英童子		
40			幻池童子		
41			海音潮直信士	海音潮直信士 文化元(1804)年没	
42			月窓良円信女	永森家(加茂中部)	
43			天外智清大師	寛政2(1790)没 永森家(加茂中部)	
44		西面	●●●●居士	天明4(1784)没 永森家(加茂中部)	
45			●●●●招居士		
46			●●妙姓大姑		
47			●●妙微信女		
48			●●既我心居士		
49			●正●●常居士		
50			●●宝●比闍尼		
51			●●光見居士		
52			●●宝泉●比丘尼		
53			●班空林麻尼		
54	火輪形	東面	安清院●光攝樹居士		
55	17	7	臺●院●●●●居士		
56			真●●●●●●●●座		
57			孤●●●●●●安居士		
58			阿学了源居士		
59			●山政芳大姑		
60			●林榮芳大姑		
61		南面	祝尼妙惠		
62			楚山幻空妙殊		
63			青船陀妙●日悠		
64			黑月院妙曉日慧		
65		西面	一造廣清居士		
66			政覺妙願信女		
67			真苞改範信女		
68			尽雷得海信女		
69			知往童女		
70			浮池童女		
71	水輪形	27	延攝院前常清密之仙		願主名
72			円門了●居士 ■		
73			校妙一美大姑 ■		
74			清林妙淨信女		
75			普空信士		

番号	部位／入数	面位置／入数	院名等	過去帳との照合	備考
78			清順明西信女		
77			春蓮・祖山居士		
78			円山智益大師		
79			釈尼・秋円		
80			分山了懶信士		
81			華嚴智是信女		
82			直翁・舉伝居士		
83			桜森・梁衡信士		
84			寛岸・貞心信女		
85			香外・鐵樹信士		
86			鶴慶義・信士		
87			寅或法源居士		
88			窓外・良案居士		
89			自性童子		
90			玄空・妙光大師		
91			透門・智闇信士		
92			深慈信士		
93			察音・上座		
94			空林・想徳信女		
95			真性・妙空大師		
96			●屋造・清信士		
97			生菴・印居士		
98	地輪形 48	石材5北面 3	●林葉密信士 ●●●●● ●●●同大師		
100		石材2北面 10	●●●宗透・玄沙跡 ●妙●大師 天雪●山居士 見性●●沙跡 龍●風●比丘尼 泰異大秀居士 ●空流善大師 天外正綱沙跡 ●廣実●居士 ●●白●大師		
111		石材3北面 4	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●		
115		石材3東面 5	長那●●信士 芳室智●大師 広空妙有大師 徳岩智林居士 慈正妙純大師		
120		石材4南面 10	光山崎道沙跡 究志然雲信士 ●●●●● ●●●●●居士 ●益宗温信士 ●●●自●●● ●筑●●●●心 ●由●●●●● ●瓶安水比丘尼		
130		石材5南面 2	善山●門上座 ●●道全慶生		
132		石材5西面 16	●●●●●比丘尼 ●●●院空窓●●白居士 ●●●院空●●●居士 ●●●院円普居士 春水海天居士 ●●●源正居士 ●●●道居士 米●貞松大菩薩 ●芳西当比丘尼 ●●●比丘尼信士 ●●●●居士 ●●●●大師 ●●●●比丘尼 ●●●●信士 ●●●●居士		

これら5尊を正面に配置することにより、かつて存在したと思われる法華経一字一石納経塚の願意について、より功徳が高められるよう意図したものと考えられる。

④戒名者について

前述のとおり、刻銘された戒名者は 146 人に上る（表 4）。このうち、位号が明らかになる戒名者は 121 人であり、その内訳は表 5 のとおりである。

僧籍者は和尚 2 人がいる。名前の判明する「白龍護峯和尚」は同寺過去帳に記載はなく、素性は不明であるが、4 文字であることから禅宗系僧侶と推定される。

位号者のうち沙弥・庵主・比丘・比丘尼は、僧籍者もしくは僧の室の可能性がある。

富裕層である院号者は 9% を占める。

別宗派の者は、浄土宗または浄土真宗の釈尼号者 2 人と、日蓮宗法号者で院号者 2 人の計 4 人が含まれる。

位号者のうち数人は、当寺過去帳に記載があり、檀信徒である。この檀信徒の所在地は、射水市加茂中部・白石・片口等の周辺地域である。

したがって、水輪形に記載のあった尾張の常清密之仙が供養の対象とした供養者は、戒名者 146 人の全てではなく、例えば水輪形に記載された 26 人など、限定されると思われる。その他の戒名者は、複数の周辺地域檀信徒がそれぞれ複数の供養者を記載したものと考えられる。

それらの詳細状況は、今後過去帳の情報分析により、明らかになるものと思われる。

⑤石工について

本石塔を作成した石工は、地輪形の東面の石材 3 の刻銘の後半から、馬瀬口村に工房をもつ甚右衛門・宗八・善七良の 3 人である。

馬瀬口村は、常願寺川左岸中流の集落で、現在の富山市馬瀬口である。

「甚右衛門」「宗八」はこれまで知られていた石工であるが、「善七良」は初出である。

「甚右衛門」は中川甚右衛門のことである。甚右衛門は、四代にわたり常願寺川石工を代表する棟梁として石造物の製作を続けた。甚右衛門の作品についての集成と考察は、筆者が甚右衛門作石仏についての概要報告を行ったものがある〔古川 2011〕。これによれば、甚右衛門は、舟形石仏の光背に初めて祥雲文を配した、初めて笠付円盤形石仏を製作したなどの点において、常願寺川石工における石仏製作の先駆的役割を果たすとともに、卓越した像容は、それまでになかったアリティを顕出することで、その後の常願寺川石工における伝統的基盤を築いた石工として高く評価できる。甚右衛門は、このほか宝篋印塔や狛犬など多種類の石造物を製作している。

「宗八」の名字は不明である。文政 3 (1820) 年富山市善名の舟形石仏（地蔵菩薩）、安政 3 (1856) 年富山市南金屋の笠付円盤形石仏（聖観音菩薩）の 2 体の石工名在銘石造物が確認されている。また、天保 11 (1840) 年富山市月岡 6 丁目地蔵堂の舟形石仏（聖観音菩薩）は銘がないが宗八の製作と推定される。

甚右衛門と宗八の共作はこれまで確認されておらず、初出である。

なお、詳細に見れば、風輪形の並坐像、火輪形の 2 尊、水輪形の主尊は、像容や手足の表現が甚右衛門の特徴と一致しており、仏像部分は甚右衛門の手によって彫られたと推定される。

表5 戒名者区分

区分	細別	人数	計
僧	和尚	2	2
	居士	8	
院号者	大師	1	10
	僧女	1	
	上座	3	
	沙弥	6	
	庵主	4	
	比丘	1	
	比丘尼	7	
位号者	居士	25	
	大師	18	
	僧士	17	105
	僧女	14	
	達信女	1	
	達童子	1	
	童子	5	
	童女	1	
	僧女	2	
釈号者	釈尼	2	
日蓮宗法号者	院号者	2	2
	計	121	121

⑥類例の検討

本石塔は、先に述べたように、きわめて特殊な形態であるが、ほぼ同じ形式の石塔が 1 基存在する。

富山市五番町にある曹洞宗光嚴寺境内墓地には、富山藩士墓地が多く存在している。この一つ池上家墓地に、本石塔より大型同形の石塔 1 基がある。

池上家は、富山藩中級藩士で、利次代から藩士名簿に名が見える。貞享 3 (1686) 年には馬廻組 150 石であったが、享保 20 (1735) 年には町奉行、明和元 (1764) 年には小性組 300 石に加増され、安永 9 (1780) 年には大目付となった。中級ではあるが重臣の立場にあった家系である。刻銘はなく、造立目的や年代は不明であるが、本寺石塔と同じ文化年間の造立と推定される。この時期の池上家当主は弥四郎信庸であるが、信庸は文化 10 年病死しており、定吉武清が家督相続した [高瀬編 1987・新田 1988・深井 1992]。年代からみてこの石塔は信庸の死去に伴うもの、あるいはその後の年忌供養として造立されたものと推測される。造立年代は、海翁寺塔が文化 15 年造立ということと照らし合わせれば、三回忌である文化 12 年、七回忌である文政 2 (1819) 年、九回忌である文政 4 (1821) 年のいずれかが候補となろう。地輪形及び墓壇が原形を残すものの検証が必要であるが、高さ 58.5 寸 (177.3cm) あり、海翁寺塔の約 1.3 倍の大きさである。

(10)まとめ

本石塔は、文化 15 年、尾張国の大常清密之仙及び近在有力檀信徒らが願主となって造立した一字一石塔である。かつて塔下には、法華経を書写した襖石経を埋納した経塚が存在していたが、現在は欠失し石塔のみが残ったものである。造立時の本寺住職は「七世大仲」代と記載があるが、現存する本寺過去帳の内容と異なる。過去帳は明治以降復元されたものであり、それ以前の正確な記録が欠落する等したためであると思われる。

本寺が造立に関わった経緯は不明であるが、主たる願主である常清密之仙の両親等血縁者が本寺檀信徒であった等の理由が推測される。造立にあたっての祭式執行は大仲和尚が行ったのであろう。造立にあたっての直接的な動機は、常清密之仙の血縁者が文化 10 年死去したことに起因するが、造立年が年忌供養の年回に当たっていないことから、その他の理由も想定できる。その一つとして本寺における記念的行事（本堂再興等）があるが、記録がなく不明である。

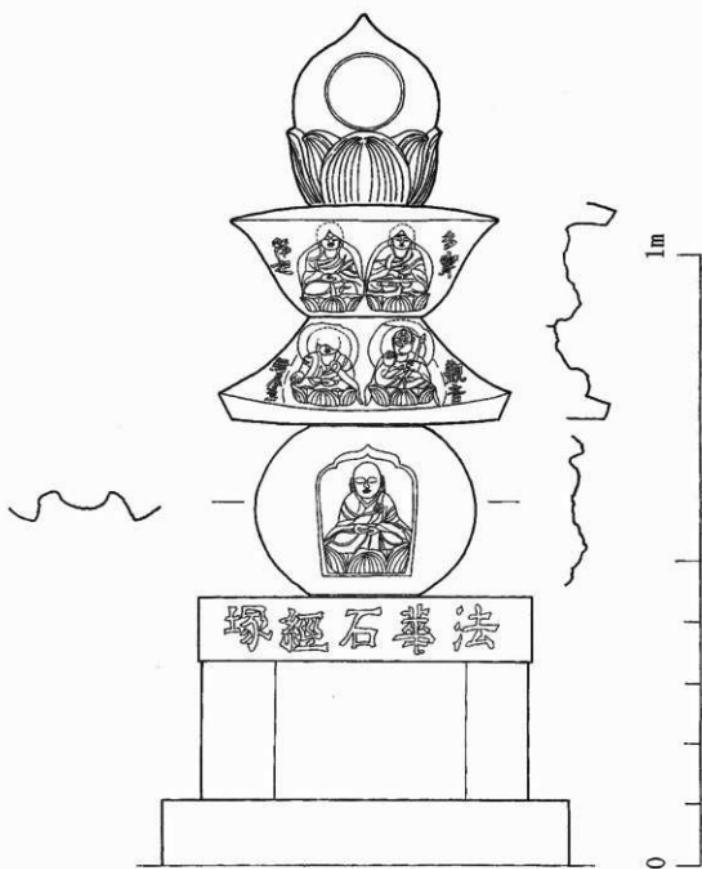
製作石工は、常願寺川石工中川甚右衛門ら 3 人である。甚右衛門は当時常願寺川石工のうち最も力量のあった石工であり、その製作は射水周辺にも多く搬入されている。そのような知名度に基づき、本寺における一字一石塔製作にあたって甚右衛門が選定されたのであろう。

本寺のような五輪塔形式の一字一石塔は、極めて稀であり、県内には本例を含め 2 基のみ存在する。

今後は、刻銘についての解説・過去帳との照合等の調査を進めることにより、造立における歴史的背景がより明らかになるものと思われる。



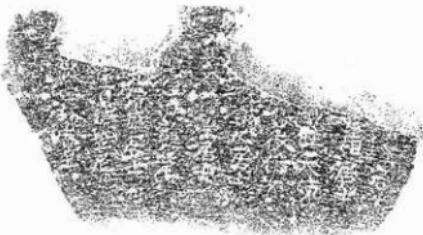
池上家墓地供養塔（東から）



海鷺寺一字一石塔 実測図 (1:8)



空輪形 蓮弁弁脈 (1:4)



風輪形 西面刻銘 (1:4)



風輪形 積迦像刻銘
(1:4)

自流真正法甚光光高
御工了窓輪天山鑿安北
來禮妙貞冰能未道
柏空空免正消相白方
大空空信大善信居士
尊女子正信大善士復



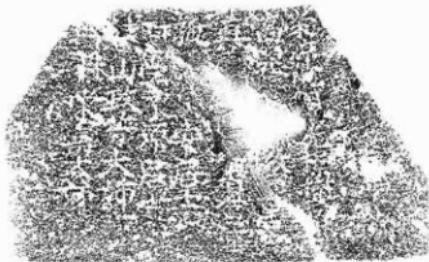
風輪形 東面刻銘 (1:4)



風輪形 多寶刻銘
(1:4)

天月海幻
外慈都迦
智見那
貴圓真
火勝舍
妙女古
子千

風輪形 南面刻銘 (1:4)



火輪形 東面刻銘 (1:4)



水輪形 刻銘 (像左) (1:4)



火輪形 南面刻銘 (1:4)



寶昌現寶大德代置

尼陽府南青州望仙縣主文

像左
(1:4)

水輪形 刻銘 (像右) (1:4)



無時文化二乙正天
始用土磚為瓦而
寶昌現寶大德代置

火輪形 南面刻銘 (1:4)



風輪形 左仏（阿迦）

(1:3)



風輪形 右仏（多宝）

(1:3)



風輪形 2尊実測図(1:3)



火輪形 左仏（無尽意）

(1:3)



火輪形 右仏（觀音）

(1:3)



水輪形 中央仏（地藏）

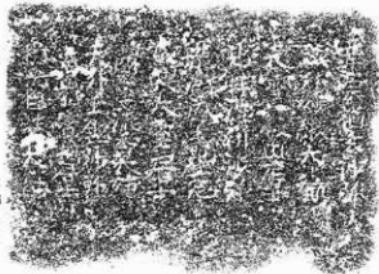
(1:3)





塚經石華法

基礎 1段目刻銘 (1:4)



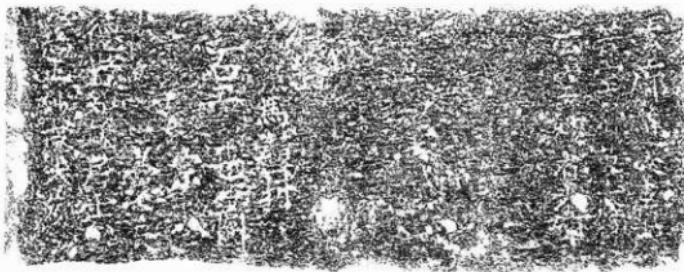
基礎 石材 2 北面刻銘 (1:4)



基礎 石材 5
北面刻銘 (1:4)



基礎 石材 5
南面刻銘 (1:4)

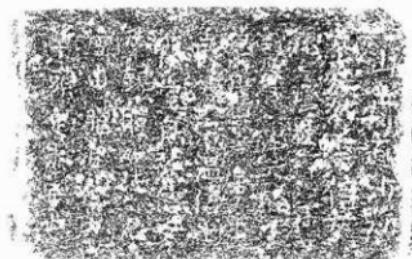


基礎 石材 3 東面刻銘 (1:4)

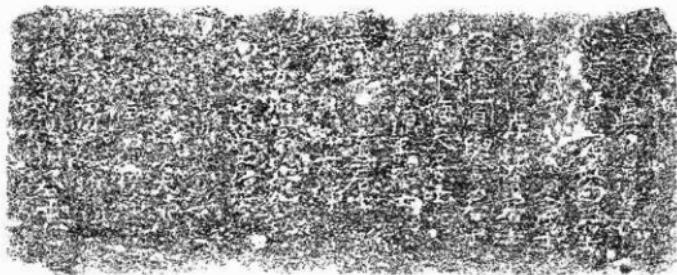


基礎 石材 3 東面刻銘

(石工名部分) (1:3)



基礎 石材 4 南面刻銘 (1:4)



基礎 石材 5 西面刻銘 (1:4)



海翁寺入口参道



海翁寺 本堂



石塔位置（北から）



花崗岩製円板



一字一石塔 正面（北から）



一字一石塔 左側面（東から）



空輪形（宝珠）正面



空輪形 蓮弁の弁脈表現



空輪形宝珠部分 刻銘（正面右）



空輪形 底面の円形ホゾ



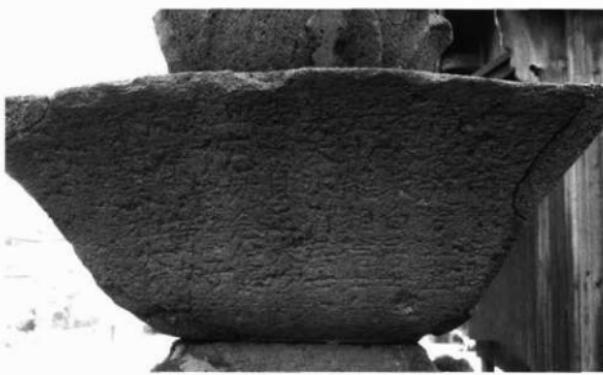
風輪形 正面（北から）



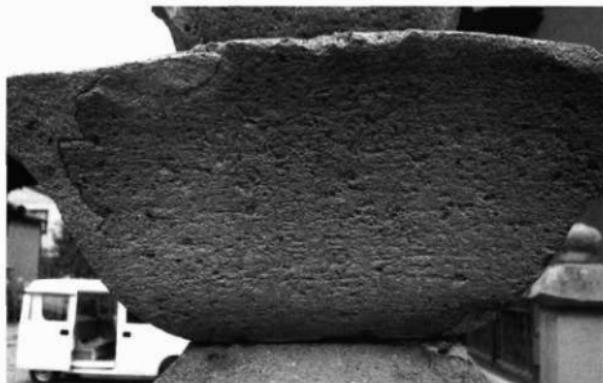
風輪形 左尊（釈迦如来）



風輪形 右尊（多宝如来）



鳳輪形 左面刻銘（東から）



鳳輪形 裏面刻銘（南から）



鳳輪形 右面刻銘（西から）



火輪形 正面（北から）



火輪形正面（北西から）



火輪形 正面2尊



火輪正面 左尊（無尽意菩薩）



火輪正面 左尊（觀音菩薩）



火輪 左面刻銘（東から）



火輪 裏面刻銘（南から）



火輪 右面刻銘（西から）



水輪形 正面（北から）



水輪形 正面 地藏菩薩



水輪形 正面 地藏菩薩 上半身



水輪形 正面 地藏菩薩 蓮台



水輪形 左面刻銘（東から）



水輪形 裏刻銘（南から）



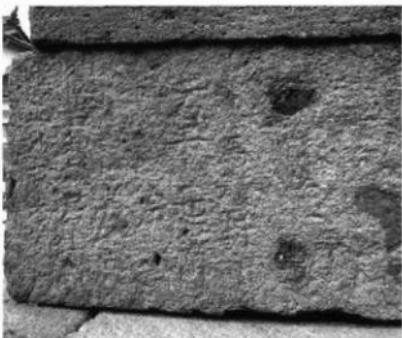
地輪形 正面（北から）



地輪形 正面



地輪形 左面（東から）



地輪形 左面 石工名刻銘



地輪形 裏面（南から）



地輪形 右面（西から）

V 考察

1 富山藩士金岡氏の石塔寄進について

富山寺宝鏡印塔をはじめ、弘化から嘉永年間に 3 塔を造立した願主である金岡勝任について、その人物像や由来を明らかにしたい。

金岡勝任は、富山藩士金岡彦一郎勝任のことである。

金岡彦一郎が初めて藩史に登場するのは、天保 5 (1834) 年 10 月、藩財政が逼迫したことによる改革のため、家老蠣江監物をはじめ 22 名が処分された。その一人が金岡彦一郎で、元御郡頭取金岡彦四郎の子として、御郡頭取を世襲していたものか。若干 17 歳であったが、「知行召放」の処分を受けた (『富山県史 通史編 近世 1』)。

弘化 4 (1847) 年、富山藩が招請した高島流砲術家松下健作のもとに、田上兵助らと入門した。このとき彦一郎は 30 歳である。その後安政 7 (1860) 年の藩士名簿『富山御家中分限帳』では、御先手廻組に属し、「五拾石 金岡彦一郎 四十三」とあり、「中条流剣術・民弥流居合差引役」の付記がある [高瀬編 1987]。これにより、勝任氏は、文化 14 (1817) 年生まれであることがわかる。差引役という役職が付与されているが、これは藩校広徳館の師範であったと推定される。

明治 2 (1869) 年『士族分限帳』の「一等士族直衛」に、「五拾三俵毫斗八升八合 金岡彦一郎 勝任 五十三」とある [高瀬編 1987]。

勝任が最初に富山寺塔を造立したのは弘化 5 年 32 歳の時であり、松下健作のもとに入門した 1 年後である。吉祥寺塔の造立はその 4 年後の嘉永 5 (1852) 年 36 歳の時であり、高島流砲術を習得した後であり、中条流剣術・民弥流居合差引役に就任する以前、あるいは就任した時のことと思われる。

勝任は、吉祥寺塔のほか、富山市内の 2 か所 (富山寺塔・福寿寺塔) にも宝鏡印塔を造立した (本章前項)。この 3 基は、5 年間という短期間のうちに造立している。これらに共通する要素は、次の 2 つがある。

① 騎頭形浮彫文様に見る共通性

3 基ともに騎頭形正面に、家紋分類では「角取り角に二ツ巴」に該当する浮彫文様が彫られている。

これは金岡勝任家の家紋と理解するのが妥当とみられる。

② 基礎刻銘に見る共通性 (表 1)

3 塔の基礎刻銘に見る戒名者名について、表 1 により比較したところ、3 塔ともに共通した戒名者は 10 人がいる。年代順に見ると、最も古い富山寺の記載数は 14 人で、そのうち 10 人が福寿寺と共通する。この 10 人はそのまま吉祥寺へ引き継がれるのであるが、福寿寺で新たに追加された 4 人は、そのまま吉祥寺へ引き継がれている。また、富山寺から引き継がれなかった人のうち 3 人が吉祥寺に記載がある。吉祥寺のみに新たに掲載されたのは 3 人のみである。

20 人の戒名者は、宗派が異なる者もいるが、男女子女があり交じっており、家・家族形態を示していると思われる。このことからこれらの戒名者らは、肉親を含めた勝任氏の血縁者 (先祖集団) と推定される。

一方、上記 3 塔より古い造立である真興寺塔には、上記と重複する戒名者の刻銘があり、願主は同じ金岡姓の金岡勝久である。勝久は勝任に年代的に先行していることから、勝久は勝任の肉親あるい

は近親者である可能性が高い。具体的には、勝任の父彦四郎と推定される。

金岡彦四郎は、小杉屋彦右衛門が姓を改めたもの〔館盛 1990〕とされてい

る。
真興寺塔の戒名者は全
部で 27 人がおり、このうち、
勝任造立の 3 塔に同じ
戒名が見える者は 12 人で
ある。いずれも院号である
ことが留意される。

金岡家系統に関する資
料には、以下がある。

慶応 3 (1867) 年藩士名
簿『富城武鑑』に掲載のあ
る「金岡彦三郎」は、八人
町在住で、六〇石取りの中
級藩士である。家紋として
「角取り角に三ツ巴」紋と
記載がある〔高瀬編 1987〕。

4 つの石塔に共通して見
られる浮彫文様は、「角取り角形内に三ツ巴」であり、金岡彦三郎家とわずかに異なる。

この金岡彦三郎は、小杉屋彦三郎が金岡姓に改めたものである〔館盛 1990〕。彦三郎は、長慶寺五百羅漢寄進者の一人で、第二百五番・第二百十一番の 2 体を寄進している。台座に彫られた供養者 4 人は、いずれも戒名者であり〔館盛 1990〕、表 1 の No.7~10 の 4 人と一致している。彦三郎は、寛政 6・7 年伯耆国懸場充買〔『富山壳薬業史史料集』〕に名前が見えることから、1794・95 年段階での存在が確認できる。その年代からみて、彦四郎・彦一郎よりも先行する人物であることがわかる。

このように金岡彦三郎・金岡彦四郎・金岡彦一郎が刻銘を行った戒名者は、共通者が多いことから同族者であることがわかる。また、元来小杉屋を名乗り、のち金岡姓を名乗ったという経過が把握できる。金岡彦三郎家は、金岡彦四郎・金岡彦一郎家とは家紋が異なり、また、彦一郎存命時には彦三郎も同時に別家として同時存在していた〔高瀬編 1987〕ことから、少なくとも 2 家があったことがわかる。

このような状況で、(彦四郎) 勝久・彦一郎勝任は、彦三郎と共に先祖供養を目的に造塔を行った。それぞれの造塔の直接的契機は異なるであろうが、肉親の死去等大きな事案が契機となったものと推測しておく。今後金岡氏に関する過去帳等資料が蓄積した段階で、改めてこの課題を検討したい。

なお、金岡氏末裔は現在砂町に在住との情報もある。

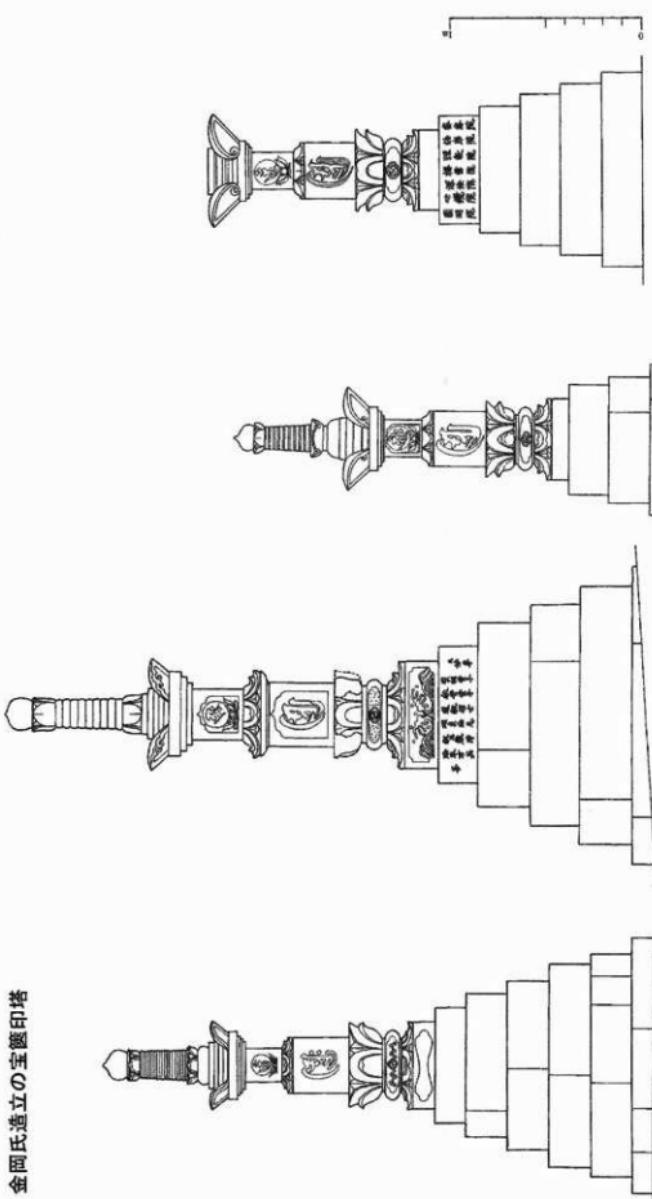
表 1 金岡氏造立 刻銘供養者一覧

番号	表記	該当者情報	真興寺塔	1848 富山寺塔	1849 福寿寺塔	1852 吉祥寺塔
1	現証院		●		●	●
2	常楽院		●		●	●
3	理德院		●		●	●
4	林照院		●		●	●
5	理福院	悦山道安居士		●	●	●
6	駿尼妙誓		●	●	●	●
7	密窓院	真山道法居士	●	●	●	●
8	法岸院	清光妙泉大師	●	○	●	●
9	理教院	弧峯良仙居士	●	○	●	●
10	梅雲院	高岸義明大師	●	●	●	●
11	源法院		●	●	●	●
12	心鏡院					●
13	円明院		●	○	●	●
14	巖●院		●			
15	光林院		●			
16	貞信院					●
17	佛寒童女			○	●	●
18	駿尼妙専		●		●	●
19	実相童子		●			●
20	秋音童子		●		●	●
22	駿尼戲淨		●		●	●
計			12	13	14	19
備考		願主名	金岡勝久	金岡勝任	金岡勝任	金岡勝任

*院号者は掲載、それ以外は2塔以上の重複がある者のみ掲載した。

4 塔に共通する供養者

金岡氏造立の宝篋印塔



2 富山町石工見上兵右衛門について

(1) 研究史

富山町石工見上兵右衛門についての研究は、筆者が近世富山町石工の石工名在銘石造物を集成する過程において、兵右衛門製作狛犬2基1対を確認し、富山町石工のうち佐伯伝右衛門に次いで古い文政3(1820)から刻銘を開始したことを見出した〔古川2012・2013〕。

その後城下町内の古鍛冶町藤居山富山寺の弘化5(1848)年造立宝篋印塔が兵右衛門が製作したことが判明した〔富山市教育委員会埋蔵文化財センター編2013〕。その後筆者の分布調査により新たに数基の石造物を確認した。

本稿では、これまで確認された見上兵右衛門製作石造物を概括し、兵右衛門の石造物製作の特色と動向を明らかにするものである。

(2) 兵右衛門製作石造物の概要

兵右衛門が製作した石造物は、前項で報告した2件3点のほか、推定品も含め、新たに7件8点を確認し、計9件11点となった(表1)。

石造物の種類は、題目塔・宝篋印塔・狛犬・石碑の4種類であり、宝篋印塔4基(44%)で最も多く、題目塔2基(22%)、狛犬2対(22%)、石碑1基(12%)である。

①宝篋印塔 (p128図)

4基はいずれも寺院境内に所在する。石工名が刻銘され兵右衛門が製作したことが明らかである富山寺宝篋印塔との比較を主眼に、各塔の概要を述べる。

これらの4塔に共通する要素として、饅頭形側面に「角取り角にニッ巴」の浮彫文様が存在すること

表1 見上兵右衛門作石造物一覧

番号	在銘年号 和暦 西暦	種類	所在地	寺院情報	石工名表記	石材	意匠	備考
1	文政元	1818	題目塔	富山市梅沢町2丁目	—	石工／兵右衛門	安山岩	なし
2	文政2	1819	狛犬(一对)	高岡市中田	広川神社境内 社移田社	なし(推定見上兵右衛門)	安山岩	なし
3	文政3	1820	狛犬(一对)	富山市中野新町	白山社	富山住／石工／見上兵右衛門	安山岩	祥雲文(台座)
4	天保3	1832	自然石碑	富山市田中町4丁目	浄土宗本誓寺	石工／富山／兵右衛門	安山岩	なし
5	天保4	1833	宝篋印塔	富山市梅沢町3丁目	真言宗華岡山真興寺	不明(欠損)	安山岩	唐草文・家紋(角取り角にニッ巴)
6	弘化5	1848	宝篋印塔	富山市古鍛冶町	真言宗藤居山富山(普泉)寺	石工／見上兵右衛門	安山岩	波涛文・家紋(角取り角にニッ巴)
7	嘉永2	1849	宝篋印塔	富山市本郷町	曹洞宗福寿寺境内	なし(推定見上兵右衛門)	安山岩	家紋(角取り角にニッ巴)
8	嘉永5	1852	題目塔	富山市中野新町	日蓮宗乗光寺	石工／三上兵右衛門	花崗岩	なし
9	嘉永5	1852	宝篋印塔	富山市八町	十二王山吉祥寺門前	なし(推定見上兵右衛門)	安山岩	家紋(角取り角にニッ巴)

とである。前項においてこの文様は金岡勝久・勝任家の家紋と推定したところである。

A 藤居山富山寺宝篋印塔 [富山市教委 2013]

富山市古鍛冶町に所在する真言宗寺院である。

弘化 5 (1848) 年に造立したもので、真興寺塔の 15 年後の造立である。4 塔のうちで最も大型塔である。戦災による焼損が認められる。

全高は 338.5cm (11 尺 1 寸 7 分) で、上から相輪・笠・塔身 (5 段)・基礎・基壇 (5 段) の 14 段構成である。饅頭形には額を彫り、中央に「角取り角にニッ巴」紋の浮彫文様が見られる。

塔の細部様式は、笠の隅飾突起上部の装飾文様、軸 1 の花頭形額、軸 2 上の饅頭形の有無、軸 2 の梵字を花頭形額に入れて陽刻にする、基礎側面の浮彫文様などが認められ、常願寺川石工製作の宝篋印塔と比較すると装飾性が高いといえる。

基礎には造立年・願主名の他 3 面に戒名者計 14 人の刻銘がある。願主は富山藩上金岡勝任である。

基壇内部には、寛政 5 (1793) 年に造立した旧塔の軸 2 が、697 個の礎石経とともに納められており、弘化 5 年塔はこれを再建したものである。

本石塔の製作石工は、基礎刻銘により兵右衛門である。兵右衛門の石工名刻銘のある宝篋印塔は、現在この 1 基のみである。

B 花岡山真興寺宝篋印塔 (写真 1)

富山市梅沢町に所在する真言宗寺院である。現在調査中のため、概説説明にとどめる。

天保 4 (1833) 年に造立したもので、富山寺塔より 15 年古い。戦災による焼損が認められる。

全高は 300cm (9 尺 9 寸) で、上から相輪・笠・塔身 (5 段)・基礎 (2 段)・基壇 (6 段) の 15 段構成である。

塔の細部様式は、富山寺塔と比較すると、相輪の諸花形態・九輪形態・伏鉢形態の差異、笠の隅飾突起形態（本寺は新補石の可能性がある）の差異、軸 1 花頭形額の欠如、軸 2 上の饅頭形の欠如、軸 2 花頭形額の欠如等の諸点において異なる。饅頭形側面中央の「角取り角にニッ巴」紋の浮彫文様に、左右に唐草文を加えている。基礎側面には変形した額のみ彫り込む。

刻銘は、軸 2 に造立年、基壇 1 段目に願意・石工名、基壇 2 段目に願主名のほか、4 面に戒名者計 27 人の刻銘がある。願主の金岡勝久は、富山藩上金岡彦一郎勝任の父、あるいは年上の肉親である可能性が高い。

本石塔の石工は、基壇に刻銘が記載されているが、名前部分が焼損により欠落し特定できない。

C 福寿寺宝篋印塔

富山市本郷町 3 区に所在する曹洞宗寺院で、現在無住寺である。本塔は富山寺塔の翌年の嘉永 2 (1849) 年に造立したものである。



写真 1 真興寺宝篋印塔

全高は 367.5cm (121.3 寸) で、4 塔のうちで最も小型塔である。上から、相輪・笠・塔身 4 石 5 段・基礎 2 石 3 段・基壇 2 段である。塔の細部様式は、富山寺塔と比較すると、相輪の寸詰まり化、下部請花・伏鉢形態の差異、軸 2 の上の饅頭形の欠如、厚みのある請花・反花表現等の諸点において異なる。

基礎には造立年・願主の金岡勝任の名のほか、3 面に戒名者計 14 人の刻銘がある。刻銘の当初に「為／光口聖靈」、末尾に「有縁無縁菩提」とあり、実質的には勝任の先祖・肉親者である戒名者の供養を行なうとしている。

D 十二王山吉祥寺宝篋印塔

本塔については本書 I-5 で詳細は報告済である。富山寺塔の 4 年後の造立である。

塔の細部様式については、本塔の 3 年前に造立された福寿寺塔と富山寺塔の比較内容は先に述べたとおりであり、これを踏まえ福寿寺塔との比較を行うと、笠伏鉢の形態の差異、軸 1 の花頭形額の欠如程度であり、形態上近似性が高いといえる。

②題目塔 2 基がある。

A 富山城下町内 富山市梅沢町 2 丁目に所在する題目塔は、文政元（1818）年の製作である（写真 2）。兵右衛門が製作した石造物のうち、最も古い石工名刻銘品である。安山岩自然石製で、表面には焼損による剥落がわずかに認められる。裏面に、年号・願意・納主・施主・石工名が楷書により陰刻される。願意は「奉書寫大乘妙典一石一字」とあり、これが礫石経を納めた経塚の石標として造立されていたことを示す。石工名は「石工／兵右衛門」とある。このほか、「体具山三十一世日慈代」の明治 34 年現在地に移転したという内容の追刻があり、別地の日蓮宗寺院にかつて存在していたことを裏付ける。

B 乗光寺境内 富山市中野新町日蓮宗乗光寺境内の題目塔は、嘉永 5（1852）年製作の、花崗岩製の大型塔である（写真 3）。この塔はもと舟橋向かいの旧寺地にあったが、戦後当地に移動し、平成 15 年改修された。裏面の刻銘から啓心院日象により建立された。台座側面に「石工三上兵右衛門」とある。三上兵右衛門は見上兵右衛門と同一人物と思われる。この左に「正心口尔？」とあるが、彫りは浅く、後刻とみられる。

③狛犬 2 対がある。

A 富山市中野新町白山社境内 文政 3 年白山社拝殿前に狛犬一対がある（写真 4）。安山岩製。蹲踞の姿勢で、やや猫背となる。顔の特徴は、太い眉・目玉に瞳を描く・横耳・大きな团子鼻・頸両脇に満巻の瘤形髭・二重に縁取った口等がある。顔は正面からわずかに外を向く。尾は团扇形で中央の太い尾が独立して立つ。盤台は、隅角を丸く加工し、側面のみ橢円形に縁取りし、波瀾文を浮彫する。

基礎は長方体の切石 2 石を横置きし、正面に「奉納」と楷書で陰刻する。その他の 3 面は町名・寄進者名・年号・「石工／富山住／見上兵右衛門」の陰刻がある。基壇は欠失する。

B 高岡市中田移田神社境内 白山社の前年となる文政 2 年の製作である。移田八幡宮境内社広川社の本殿前に狛犬一対（写真 5）がある。像形は蹲踞の姿勢で、背はまっすぐである。顔の特徴は、太い眉・目玉に瞳を描く・横耳・大きな团子鼻・頸両脇に満巻の瘤形髭・二重に縁取った口等がある。顔は正面からわずかに外を向く。尾は团扇形で中央の太い尾が独立して立つ。これらの諸点は全て白山社狛犬と共通した特徴であり、細部表現が異なる部分があるものの、兵右衛門の製作と考えられる。基礎は、長方体の安山岩切石 2 石を横置きし、側面に「奉納」の刻銘及び年号と願主「麻生屋／權



写真2 梅沢町題目塔



写真3 乗光寺題目塔



写真6 本誓寺源洞祠碑



写真4 中野白山社狛犬（吽形）



写真4-2 犬（吽形）顔



写真6-2 本誓寺
源洞祠碑 石工名



写真5-2 犬顔面（吽形）



写真5 高岡市中田広川神社
狛犬（吽形）



写真4-3 石工名

兵衛」と刻銘する。安山岩製。

④石碑 富山市田中町の浄土宗本誓寺境内に所在する「源洞祠」碑(写真6)は、安山岩自然石(河川玉石)に陰刻したもので、天保3(1832)年作である。基礎は安山岩玉石である。

(3) 考察

① 分布

兵右衛門の製作品の分布についてみると(図1)、工房のあった富山城下町(詳細場所は不明)から1里(4km)以内に6件(67%)、1里半以内に2件で累計8件(89%)を占める。このことから、兵右衛門は近傍地への供給を主にした石工と評価できる。唯一遠隔地である高岡市中田移田八幡社は、約4里半(18km)離れており、他例とは異質な状況である。これは神社という特質性が関係していると思われる。

② 宝篋印塔における型式変化

推定品も含めた4基の宝篋印塔について、その属性を比較分析し(表2)、年代経過に基づく変遷について検討する

A 規格における変化

宝篋印塔の本体大きさについて見ると、7尺5寸~11尺1寸までバラエティがあり、大型塔と小型塔に区分されうるが、規格と年代の関係において、同一の願主にもかかわらず、出現傾向に一定の法則は見いだせない。

B 隅脚突起における変化(グラフ1)

笠の隅脚突起の外傾角度をみると、40°から48°であり、8°の範囲内に分布し、平均44.9°で変

表2 宝篋印塔属性表

番号	在銘年号	寺院	塔高		笠段数	隅脚突起外傾角度	輪2銘文		基礎・基壇銘文	備考
			寸	cm			正面: 背面: その他面	経文		
1	天保4 1833	真言宗華岡 山真興寺	99	300	4	3	48 梵字シツ チリア	光明真言 梵字 経文	供養者27人・ 願主名	願主(富山藩士) 金岡勝久
2	弘化5 1848	真言宗藤居 山富山(普 衆)寺	111.7	338.5	5	2	40 梵字シツ チリア	光明真言 梵字 経文	供養者23人・ 願意・願主・ 石工名	願主富山藩士 金岡彦一郎勝 任
3	嘉永2 1849	曹洞宗福寿 寺境内	75.7	229.4	4	2	45 梵字シツ チリア	光明真言 梵字 願意	供養者15人・ 願主名	願主富山藩士 金岡彦一郎勝 任
4	嘉永5 1852	十二王山吉 祥寺門前	(93.7) (283.9))	4)	2	46.5 梵字シツ チリア	造立經 緒・願主 光明真言 梵字・願意	供養者20人	願主富山藩士 金岡彦一郎勝 任	

「経文」は、宝篋印陀羅尼經

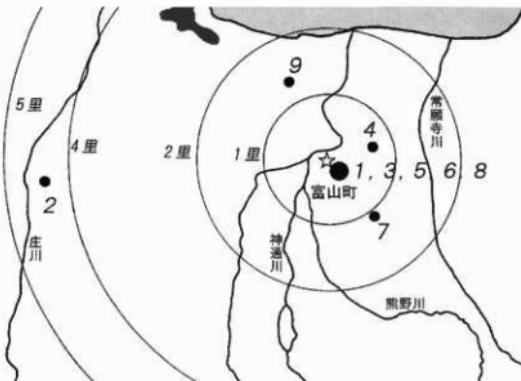


図1 兵右衛門製作品の分布

化の幅がそれほど大きいとはいえない。また、この数値変化と年代経過との間に相関関係は見いだせないものの、概ね一定で推移する傾向にある。

同時期における他の富山町石工の状況をみると、兵右衛門より先行する佐伯伝右衛門は、2代にわたるが、全体として 40° から 74° の間に分布し、年代の経過とともに角度が小さくなっていく、すなわち隅飾突起が次第に立ってくるという傾向が認められる〔古川 2013〕。

一方、常願寺川石工における状況をみると、善名村親成は、大型塔を除き、 20° から 24° の範囲内にありほぼ一定であるが、詳細にみると年代の経過につれ角度がわずかに大きくなるといった傾向にある。馬瀬口村中川甚右衛門は、 40° ～ 50° の範囲にあり、年代の経過につれ角度がやや大きくなる傾向にある〔古川 2014〕。常願寺川石工においてはその変化は緩やかであるが、富山町石工佐伯伝右衛門は短期間で急激に変化しており、大きく異なる。兵右衛門は常願寺川石工同様の緩やかな変化傾向を示しており、伝右衛門と異なる。

隅飾突起の外傾角度の変化については、石工個人について概ね傾向性を把握することができることがわかつた。しかし変化の様態については個々の石工によって異なっており（表3）、石工集団全体としてあるいは年代上の全体的な特徴として把握できる属性とは言い難い。

C 各部材における変化

各部材における文様・形態に主眼を置いて比較すると、相輪においてはどの部位も変化が激しい。下部諸花部分は、単弁請花→反花→花頭形と変化し、また伏鉢は、半球形→四角形→半球形→四角形と変化する。

軸1の梵字種子は、額なし・陰刻→額あり→額なし・陽刻と変化する。

軸2の上に般頭形を置くのは富山寺塔だけである

般頭形の家紋浮彫文様は、先述のとおり、真興寺塔では唐草文を伴うが、富山寺塔ではそれが消え、額内を細かいハツリ整形する。以後は額内を平らに整形する。

基礎下部は、当初変形額彫込みのみの表現が、富山寺塔では波渦文浮彫となり、以後無文となる。

D 経文等刻銘

軸2の刻銘の内容についてみると（表2）、いずれも正面に宝篋印陀羅尼を示すとされる梵字種子シ

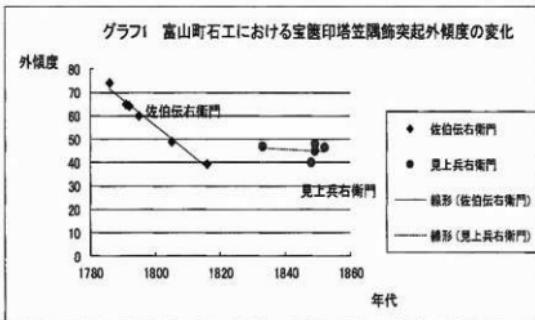


表3 石工別隅飾突起の変遷

区分	石工名	製作年代	角度		傾向	備考
			min	max		
富山町石工	佐伯伝右衛門	1786～1805	49	74	>	
	見上兵右衛門	1833～1852	40	48	=	
常願寺川石工	親成	1795～1821	20	24	=	善名村
	中川甚右衛門	1797～1856	20	50	<	馬瀬口村

傾向の凡例
< 外傾角度が大きくなる
> 外傾角度が小さくなる
= 変化少ない

ッチリアを刻むが、富山寺以外は陰刻である。対する裏面は光明真言梵字であるが、その書き順は、8文字 3 行・縦書→5 文字 4 行+4 文字 1 行・横書→5 文字 3 行 4 文字 2 行・横書と変化する。

真興寺塔から富山寺塔へは、縦書から横書へ大きく変化しているといえる。

③石工名刻銘

石工名刻銘は 5 基に認められる。文政元年当初は姓がない「石工／兵右衛門」とし、ほかに「石工／富山／兵右衛門」の表現もある。姓を加えるのは文政 3 年からで、「富山住／石工／見上兵右衛門」と表記する。弘化 5 年以降は姓を加えるが、嘉永 5 年の姓は「見上」ではなく「三上」となっている。これは表音の関係と思われ、製作品から見ても、三上兵右衛門は見上兵右衛門と同一人物と考えてよいといえる。

「富山住」のように「〇〇住」と表記する方法は、常願寺川石工觀成が享和 4 (1804) 年「善名住」として善名村に工房をもつことを示したのが端緒であるが〔古川・蓮沼 2011〕、この起源としては、富山町石工佐伯伝右衛門が「富山住人」「富城住人」の表記を行なったこと〔古川 2013〕に由来すると思われる。

④使用石材

兵右衛門が使用した石材は、花崗岩・安山岩の 2 種類である。花崗岩は、乗光寺題目塔の 1 基のみであり、組合せの部材 4 個はすべて同一の母岩から探ったものである。その他はすべて灰色の安山岩である。宝篋印塔では、本体基礎より上の部材はほとんどが立山天狗山石で、組み合わせ基壇に使用される板石のほとんどは、混入物の少ない産地不明の安山岩である。このような石材の使い分けは、多くの宝篋印塔において認められる手法である。

(4) 石工見上兵右衛門の評価

富山町石工の一人石工見上兵右衛門は、大石工佐伯伝右衛門以後に出現し、主に幕末期の富山城下町を主に活躍した石工である。

兵右衛門の製作品は、文政元 (1818) 年から嘉永 5 年まで 35 年間確認できる。製作した種類は題目塔・宝篋印塔・狛犬・自然石碑があり、宝篋印塔が最も多い。兵右衛門以前の同じ富山町石工佐伯伝右衛門や常願寺川石工觀成が宝篋印塔のみを製作したことからみると、製作した石造物種類が増加しており、様々な需要に対応するように変化していくことがわかる。

兵右衛門が取り入れた浮彫文様は波涛文である。この文様は富山寺宝篋印塔基礎・中野白山社狛犬盤台に用いており、旧稿では常願寺川石工集団とのつながりの中で文様採用を想定していた〔古川 2012〕が、波涛文の使用は、常願寺川石工に先立って佐伯伝右衛門が採用し始めた意匠であることが判明したため〔古川 2013〕、兵右衛門は伝右衛門の影響を受けたと考えるほうが妥当と思われる。ただし、伝右衛門と兵右衛門の間には 17 年間の空白期間があり、この長さが 2 人の直接・間接による技術伝承を可能にするには、やや長い期間と言わざるを得ない。

兵右衛門以後、活躍した富山町石工には三上与三郎や林田喜助がいる〔古川 2012〕。三上与三郎は元治元 (1648) 年が初出であり、兵右衛門の繼承者であると推定される。明治に入ってからは、神社石造物製作を中心として多数の石工が出現している。兵右衛門は近代富山町石工繁栄の基盤を形成した石工と評価できよう。

3 富山県東部の近世雪見燈籠の編年と系譜

(1) 問題の所在

近世富山城下町周辺には四角・六角など多角形の石燈籠が散見される。これらの燈籠は一般に雪見燈籠と呼ばれており、庭園に置かれることが多い。これら近世から近代初期における雪見燈籠については、これまで考古学的研究は行われてこなかった。

本稿では、この雪見燈籠について検討し、型式変遷や製作石工を探るものである。

(2) 雪見燈籠の資料

富山城下町及び常願寺川流域等において 8 例を確認した。

① 黒部市三日市倉田邸庭園燈籠

倉田邸庭園は、かつて国會議員寺島権蔵氏が所有し、大正後期から昭和初期に造られたもので、昭和前期に倉田当主が購入した。雪見燈籠は、舟見宿駅の加賀藩本陣となった脇坂家が所有していたもので、作庭時に移転設置した。脇坂家以前は、富山城にあったと伝承する。倉田家庭園及び燈籠類等については八木均氏が調査され、ホームページに紹介文がある。

全高は、5 尺 6 寸 7 分 (171.8cm) の大型品である。

宝珠は扁平につぶれた半球形で、頂部は小さく突出し尖る。笠は、やや薄く、平面八角形である。軒反はなく、裏面は平坦である。火袋は八角柱形で、上下端には帯状の突帯が巡る。各面に長方形の火口が付く。現状は各火口にガラス格子板が嵌め込まれている。火口の上下には、横長長方形の彫り込みがある。内部は火口下面より 2.7 寸 (8.2cm) ほど高くなっている。石材は花崗岩系のようであるが、これまで未見の石材である。新補品の可能性がある。中台は、平面八角形で、台上を 3 段とし、台下は緩やかな皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。側面は額内を彫りくぼめ、中に蓮葉+唐草（蔓か）を浮彫するもの 5 面、唐草のみのもの 2 面、無文のもの 1 面で構成する。無文部分は母屋からみて裏面、唐草のみのものはその両側面としている。脚部は、上部がすぼまる四角柱形で、対する 2 面が平面、残る 2 面が中空である。平面部には四脚を模した額が彫り込まれる。刻銘はない。脚は稻荷神社境内燈籠と似た作りである。

石材は、宝珠・笠が立山天狗山石、火袋は不明石材、中台は赤色安山岩、脚部は黒色の脈が嵌入する灰色安山岩である。

② 富山市泉町 2 丁目金刀比羅神社境内燈籠

境内庭園に六角形燈籠 1 基が所在する。

宝珠は欠失している。金刀比羅神社入口向かって右側の六角型燈籠は、本例と近似した型式で、その宝珠は、球形の宝珠と六角柱形の請花からなる。本例もこのような形態の宝珠であったと推定される。笠は薄く、平面六角形である。頂部には、宝珠を置くため六角形に削り出している。頂部から端部に向かい、緩やかにカーブを描く。端部の厚みは一定で軒反はない。火袋は、丸形の円窓のある山燈籠用の火袋が転用されている。本来は六角柱形で、各面に火口が付く形態であったと推定される。中台は、平面六角形で、台上を 2 段とし、台下は緩やかな皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。脚は 4 脚である。脚断面は四角形となる。正面である北面の脚上部には、横書きで「奉納」、裏面となる南面の脚面には、右脚「富田大隅直傳」、左脚「富田謙岐直照」と楷書で彫る。

正面に向かって右側面には、「元治元甲子年十月十日」とある。元治元年は西暦 1864 年である。

石材は、脚が縞模様のある淡赤色の安山岩である。脚の刻銘にある富田讚岐直照と富田大隅直傳は、富山藩家老である。石燈籠が寄進された元治元年は、直照が 3,000 石を拝領し、25 歳で家老職にあつた時期である。このときおそらく父直傳は隠居し家督を直照に譲っていた時期とみられる。存命していたかどうかは、安政 6 年以後の資料がなく不明であるが、戒名法名が記載されているのではないことから、存命中であったと考えられる。

③富山市鹿島町鹿嶋神社境内燈籠（写真 1）

境内に同型同大の燈籠が 4 基所在する。2 基は境内入口に一対で置かれ、もう 2 基は拝殿右手前の入口に一対で置かれている。4 基ともに刻銘が同じで同時に製作・設置された。

全高は、3 尺 9 寸（118.2cm）である。宝珠は扁平につぶれた円形で、頂部は突出する。先端は尖らずに小さな平坦面となる。屋根と一体で作られている。笠はやや厚く平面六角形である。軒反はなく裏面は平坦である。火袋は六角柱形で各面に長方形の火口が付く。現状は各火口にガラス格子板が嵌め込まれている。中台は平面六角形で、台上を 2 段とし、台下は緩やかな皿形で下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。台下が薄い。脚部は上部がすぼまる四角柱形で、中空ではない。正面は四脚を模した額が彫り込まれ、額内部には「献燈」の刻銘がある。その他面の刻銘は、右側面に「慶応四年／辰三月吉日」、左側面に「武部雅矩」、裏面に「扱 高昌氏／奥井氏／大島／石工／与助」とある。右側面は奉納日、左側面は顕主で、当時の鹿嶋神社禪宜、裏面は世話役となった有力氏子と石工名である。慶応 4（1868）年に奉納された。石工は大島村与助である。大島村は、常願寺川中流左岸の富山市大島にあたる。石工名がわかるのは本例のみである。石材は、縞模様のある淡赤色安山岩である。

本殿北側に所在する燈籠の脚部各面には、寄進者が多数列記されている。

④富山市西番熊野社境内燈籠（写真 2）

境内に同型同大の燈籠が 2 基所在する。拝殿手前左右に一対で置かれている。同時に製作・設置された。全高は、3 尺 9 寸（118.2cm）である。

宝珠は扁平につぶれた円形で、頂部はやや尖る。屋根と一体で作られている。笠は厚く、平面六角形である。軒反はなく裏面は平坦である。火袋は六角柱形で、対面にそれぞれ長方形火口・円窓・三日月窓が付く。円窓下には鶴と祥雲文の浮彫、三日月窓下には兎の浮彫が付属する。中台は平面六角形で、台上は 1 段とし、台は厚みがある。台下は緩やかに湾曲した皿形で下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。脚部は上部がすぼまる四角柱形で、中空ではない。三面に四脚を模した額が彫り込まれ、額内に刻銘がある。正面には各燈籠に「奉」と「納」がある。「奉」燈籠には、左側面に「富山市泉町／八川安平施主」、裏面に「明治二十五年／辰六月建立」、右側面は額・刻銘とともに無い。この面は拝殿からみて外側となる。「納」燈籠には、「右側面に富山市泉町／八川安平施主」、裏面に「明治二十五年／辰六月建立」、左側面は額・刻銘ともない。造立日、顕主（施主）の情報を示す。石材は、金刀比羅社と同じ縞模様のある淡赤色安山岩である。

⑤富山市鵜島神明社境内燈籠（写真 3）

境内に同型同大の燈籠が 2 基所在する。拝殿手前左右に一対で置かれている。同時に製作・設置された。全高は、3 尺 6 分（92.7cm）と小型品である。宝珠は扁平につぶれた円形で、頂部周辺は外辺よりややくぼみ、尖った先端部のみ突出する。屋根と一体で作られている。笠はやや厚く向くり屋根

で、平面六角形である。軒反はなく裏面は平坦である。火袋は六角柱形で、各面に長方形火口が付く。火袋天井は大きく円形に穴が開いている。中台は、平面六角形で、台上は1段とし、台は厚みがある。台下は緩やかに湾曲した皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。脚部は、上部がすぼまる四角柱形で、各脚は独立した4脚である。脚内側には幅5分の段が付く。

向かって右の燈籠の中台には「奥野次郎七」とあり顧主である。向かって左の燈籠には「明治二十七年」とあり、1894年の造立であることがわかる。

石材は、黒い縞の嵌入がある灰色安山岩である。淡赤色安山岩は、向かって左の燈籠の火袋に用いられているが、これのみ加工がシャープなことから、近代に取替えたものと考えられる。

⑥富山市稻荷町稻荷神社境内燈籠

境内参道中ほどに、「お化け燈籠」と名付けられた灯籠が1基所在する。

全高は、5尺5寸(166.7cm)と大型品である。宝珠は扁平につぶれた半球形で、頂部は尖る。笠は平面八角形で、厚みがあり屋根勾配は大きい。軒反はなく、裏面は平坦である。火袋は、球形に近い四角柱形で、上下端面は円形である。側面には隅丸方形の窓4面が付く。中台は、平面六角形で、台上は平面、台は4.5寸の厚みがある。台下は緩やかに湾曲した皿形で、下方に向い円形にすぼまり、脚台上部におさまる。脚部は、上部がすぼまる四角柱形で、対する2面が平面、残る2面が中空である。平面部には四脚を模した額が彫り込まれる。刻銘はない。石材は、火袋が淡赤色安山岩、中台・脚が大きな礫を含む赤色安山岩、笠が不明安山岩である。

⑦立山町三ツ塚新神明社境内燈籠(写真4)

境内に1基のみ所在する。全高は、4尺7寸9分(145.1cm)と大型の部類に入る。宝珠は半球形状で、大きく尖る。屋根は平面円形で、半球状である。軒部下面に連続した矢穴12個が並ぶ。全体に比して笠径が大きい比率を示す。火袋は六角柱形で、縦長長方形の火口4面、円窓1面、縦長方形の額のみで貫通しないものの1面がある。中台は六角形で、下面是皿状になり丸くすぼまる。脚は四脚で、断面四角形である。

⑧富山市水橋西天神町金刀比羅社境内(写真5)

境内北端に1基所在する。火袋・中台・脚が残り、宝珠・笠は欠失する。中台が笠に転用されている。火袋は六角柱形で、各面に縦長長方形の火口が付く。中台は、平面六角形で、台上・台下とも緩やかな皿形で、端部に向い円形にすぼまる。他に例のない形態である。脚部は、上端面を丸い平面に整形する。脚は断面四角形の四脚となる。脚と脚の間は下方に尖る装飾が付く。脚の2本は折れ、コンクリートを充填補修している。刻銘は、脚に寄進者4名の名前が刻銘してある。年代は不明である。

石材は、火袋が立山天狗山石、中台・脚が淡赤色安山岩である。

(3) 考察

①燈籠の年代的変遷

ここで取り上げた8基の燈籠は、各部材において四角・六角・八角・円形の違いが認められるものの、いずれも四脚あるいは四脚を意識した基礎をもつ雪見燈籠であり、一定の共通性のもとに製作された燈籠群とみられる。本燈籠は、火袋・中台が円形であり、特殊である。

石材からみると、富山旧城下町内及びその近隣に所在する燈籠は、部材の一部あるいは全部に赤色の安山岩を使用するという石材の共通性が認められる。本燈籠は赤色安山岩の使用が顕著である。

規格からみると、3尺9寸～3尺9寸5分以下の小型品とそれ以上の大型品に分けられる。本燈籠は大型品に含まれ、3尺9寸～3尺9寸5分の小形品より1.34～1.36倍の大きさである。

8基のうち5基は刻銘により製作年代が明らかであることから、編年を構築することが可能である。共通様相から、年代を追って型式の変化を把握すると、次のようになる。

- ・宝珠は、つぶれた球形状で共通し、先端突起は時代が下るほど小さくなる。
- ・笠は、時代が下るほど厚みが増加し、軒厚は厚くなる。軒の傾斜も弱くなり直立気味になる。
- ・中台は、時代が下るほど台上の段数が少なくなる。
- ・脚は、上部がすぼまる四角形状で共通するが、四脚にするもの・二脚の半中空にするもの・中空にしないものに大別され、年代的変化は不明。四脚にしないものでも、四脚を意識した額を付けていることが共通している。

このような型式変遷の考え方に基づき、無銘品の年代推定を試みる。

稻荷神社燈籠は、笠が薄いつくりであることは倉田邸・泉町と同じ古式の様相を示している。また、脚部が二脚形式であり、倉田邸と共にしている。このことから稻荷神社燈籠は、泉町の元治元年以前の年代を推定することができる。ただし、火袋・中台が円形という、本燈籠群にあっては特殊な形態をもつことから、この特殊性が年代判定に影響する可能性が考慮される。

②製作石工の推定

製作石工は、燈籠で石工名が明らかなものは、慶応4年造立の1例のみで、大島村石工与助の製作である。大島村は常願寺川左岸中流の村で、常願寺川石工に分類される。与助の刻銘品はこの燈籠のみである。

一方、類例が所在する場所は、富山城下町から常願寺川左岸にかけて多く認められる。この領域は、常願寺川石工と富山町石工の2つの石工集団が製品を供給しているところであり、範囲のみからはいずれとも決定し難い。

また、この領域における常願寺川石工の製作した燈籠は、河川転石をそのまま、あるいは2分割して組み合わせた「山燈籠」と呼ぶ自然石燈籠が圧倒的に多い。富山町石工においては、神前形と呼ばれる四角型燈籠が多く製作されている。

このような状況にあって、本燈籠をはじめとする雪見燈籠は、石材利用において、立山天狗山石と産地不明の赤色安山岩を使用するといった一定の共通性のもとに製作されている。このような複数種の石材使用は、主に常願寺川石工において用いられることが多く、特に石仏部材・宝篋印塔基壇石組において赤い安山岩を配置することにより色彩的効果を意識したものとみられる。このような石材の色彩意識は、富山町石工においてはあまり見られない。

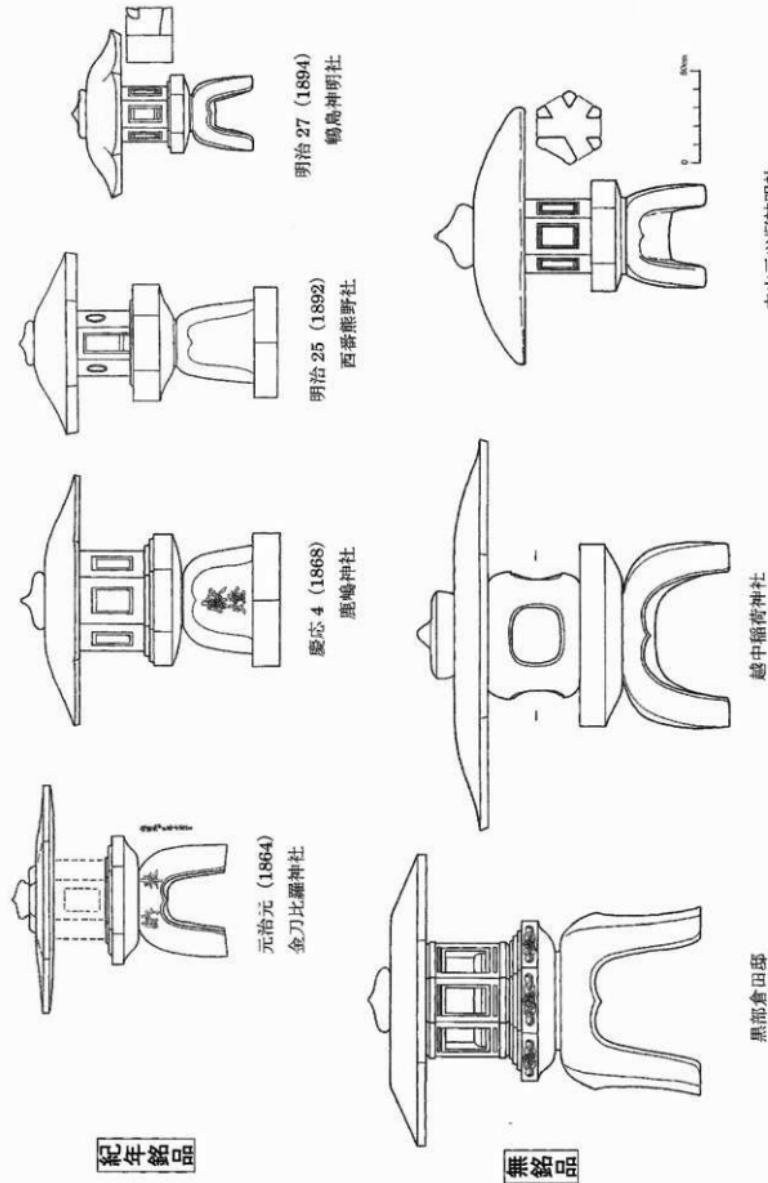
以上により、製作石工は、常願寺川石工の可能性が高いといえるが、所在数が多い富山城下町の領域という視点に立てば、富山町石工の可能性については完全に否定されたわけではない。

③雪見燈籠の系譜について

富山県内の雪見燈籠は、主に富山城下町及びその周間に存在する。この地域は、富山藩領を主とするが、加賀藩領にも一部含まれている。そこで加賀藩領金沢城下町における雪見燈籠の所在状況について調査を行った。

金沢城下町における雪見燈籠の存在は、加賀前田家菩提所である尾山神社庭園及び金沢城庭園兼六園において知られる。

図1 富山県東部の雪見燈籠の変遷



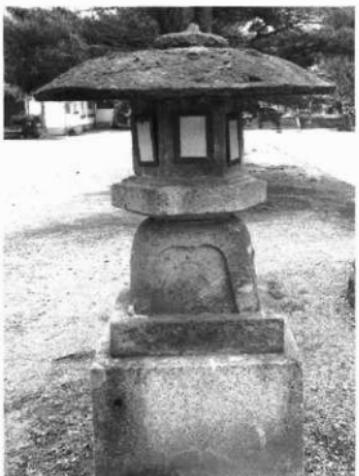


写真1 鹿嶋神社境内燈籠（慶應4年）



写真2 西畠熊野社境内燈籠（明治25年）



写真1-2 基部刻銘（世話人・石工名）



写真2-2 基部刻銘（造立年）



写真3 鶴島神明社燈籠

写真5 水橋西天神町
金刀比羅神社燈籠



写真4 立山町三ツ塚神明社燈籠

尾山神社庭園には数多くの石造物があり、雪見燈籠は庭園の南東隅の滝見庭園に1基が所在する(図2)。現高4尺1寸(124.2cm)の六角形燈籠で、笠上面には六角形宝珠台座が作出されるが宝珠は欠失する。笠の屋根はやや向くり形状を示す。火袋は六角形で、各面に方形の火口を設ける。方形窓の上下には線刻文様を施し、黒部倉田邸燈籠に似る。中台上面は2段の階段状で、下部は丸い。脚は四脚で、縁取りを行う。石材はすべて花崗岩製である。

兼六園内にも脚付燈籠は多数所在しており、このうち四脚の六角型雪見燈籠は3基が存在する。

明治記念之標横には、尾山神社より一回り小さい安山岩製の六角型燈籠がある(写真6)。笠径に比べ宝珠が大きく厚い。笠の屋根は厚みが薄く、軒反はない。裏面は平坦である。火袋は六角形で、各面に方形の火口を設ける。中台上面は2段の階段状で、下部は丸い。脚は四脚で、縁取りを行う。尾山神社庭園燈籠より脚部が太く、安定感がある。

時雨亭付属庭園には、やや小型の六角型燈籠がある(写真7)。宝珠と笠は一体で作ってあり、宝珠の高さは低い。笠は円形である。中台上面は2段の階段状で、下部は丸い。脚は四脚で、各脚は、尾山神社庭園燈籠より太く、明治記念之標横燈籠より細い。安山岩製である。

時雨亭付属庭園と形態・特徴が類似した雪見燈籠は、山崎山麓に1基所在する。近寄ることができないため、細部の特徴、石材は不明であるが、大きさはやや小型である。全体的に暗灰色を呈することから安山岩系石材と推定される。

これら金沢の雪見燈籠群の形態・特徴は、富山県東部の雪見燈籠との共通性を認めることができる。富山における変遷の視点をこれらにあてはめれば、宝珠が別作りである尾山神社庭園燈籠・明治記念之標横燈籠は幕末期、宝珠が笠と一体になる時雨亭付属庭園燈籠は明治以降の時期に置くことができる。また、尾山神社庭園燈籠・明治記念之標横燈籠の年代差についてみれば、笠に厚みがあり、きれいな向くり屋根となる尾山神社庭園燈籠が、後出すると思われる。

以上により金沢のうち最も古いと推定される明治記念之標横燈籠の年代について考察する。富山との比較においては、その形態から、最も古く安政以前とした倉田邸庭園燈籠から年代不明で慶応頃と推定した越中稻荷神社燈籠までの特徴に当てはまる。このうち倉田邸庭園燈籠と比較すると、笠の屋根形状

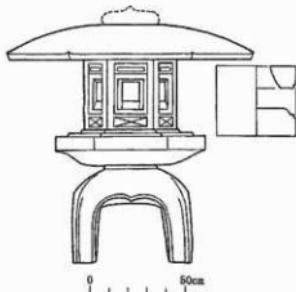


図2 金沢尾山神社境内庭園燈籠



写真6 兼六園内1



写真7 兼六園内2

において、倉田邸庭園燈籠が頂部に平坦面をもつて対し、明治記念之標横燈籠は全体になめらかなかーべーを描く。また脚部は倉田邸庭園燈籠が中台幅より大きく、四脚は細く長いのに対し、明治記念之標横燈籠では中台幅より狭く、太く短い四脚である。このような特徴は、富山においてはやや後出的であるといえる。これらのことから富山との比較においては、倉田邸庭園燈籠より後出するものと位置づけられる。

一方、兼六園の古絵図「兼六園蓮池庭之絵図額」(石川県立歴史博物館蔵)は、家老津田玄蕃正身が寛政4(1792)年に書かせたものを同11年追記した絵図と推定されている〔長山2006〕。この絵図と現在の燈籠の位置と比較してみると、明治記念之標横燈籠の位置は、古絵図における「内橋の御亭」付近に比定される。絵図には御亭建物西側の小山中に燈籠が1基描かれている。この燈籠は、笠の上に宝珠が乗り、球形状の火袋、四脚とみられる脚部を簡単に描いたものである。中台は描かれない。描写からみてこの灯籠は雪見燈籠と推定される¹⁾。絵図の燈籠が明治記念之標横燈籠と同一のものであれば、この燈籠の年代は寛政11年あるいは同4年の18世紀末まで遡る可能性が提示されるが、現在のところその同定は困難である。

おわりに

富山県東部の雪見燈籠は、主に富山藩領内において、幕末期から近代初期にかけて製作された。製作石工は主に常願寺川石工が担った。ただし富山町石工の関与も課題として残った。

これらは金沢の雪見燈籠群と共通した様式を有しており、最古型式の燈籠は安政以前、金沢においては、絵図資料から18世紀末まで遡ることが想定されうるが、確定的ではない。

今後においては、雪見燈籠に関する資料を収集整理し、年代や系譜について明らかにしていくことが課題である。

注

1 滝川重徳氏のご教示による。

参考文献

- 伊集守道 2007 「東葉寺信徒の分布状況とその内部構造—過去帳を素材に—」『大山の歴史と民俗』第 11 号 大山歴史民俗研究会
- 伊藤曜覽 1986 「第 8 章 下村の民俗」『下村史』下村役場
- 井上鉄夫校訂 1974 『日本海文化叢書第 1 卷 加越能寺社由来 上巻』石川県図書館協会
- 梅原隆章・北沢後嶽監修 1978 『富山文庫 9 富山の寺社』巧玄出版
- 大沢野町誌編纂委員会編 1958 『大沢野町誌 上巻』大沢野町役場
- 大沢野町史編さん委員会編 2005 『大沢野町史』大沢野町
- 尾田武雄 1995 「芹谷山千光寺周辺の石造物中間調査報告」『土蔵』第 8 号 研波郷土資料館土蔵友の会
- 京田良志 1970 『石燈籠新入門』誠文堂新光社
- 久保尚文 1991 『越中中世史の研究』桂書房
- 庚申懸念会編 1993 『石仏調査ハンドブック』雄山閣出版
- 坂詰秀一編 2003 『仏教考古学事典』雄山閣出版
- 真国寺編 1984 『前田伯爵家御歴代御墓歴灯藩士姓名録』(富山県立図書館蔵)
- 高瀬重雄監修 1994 『日本歴史地名大系 16巻 富山県の地名』平凡社
- 高野靖彦 2013 「安政飛越地震の災害像」『富山史壇』第 169・170 合併号 越中史壇会
- 飼盛英夫 1990 『長慶寺五百羅漢尊者施主名鑑』
- 砺波郷土資料館 2002 『眞言の古刹 芹谷山千光寺の方丈さんたち』
- 砺波市史編纂委員会編 1994 『砺波市史 資料編 4 民俗・社寺』
- 富山郷土研究会編 1982 『富山郷土資料叢書 越中旧事記 前田氏家乘』中田书店
- 富山県編 1983 『富山県史』通史編 IV 近世下
- 富山県立山博物館編 1993 『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』
- 富山市教育委員会編 1983 『富山市石仏・石塔等分布』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2013 『富山市内石造物等調査報告書 II』
- 長山直治 2006 『兼六園を読み解く—その歴史と利用—』桂書房
- 新田二郎編 1988 『富山藩士由緒書越中資料集成 1』桂書房
- 布目久三 1982 『四方郷土史話』
- 布目久三 1987 『西岩瀬郷土史話』
- 八町自治会編 2009 『八町村誌』
- 平井一雄 2003 「富山市鶴川最勝寺境内の石造物」『北陸石仏の会研究紀要』第 6 号
- 深井莊三編 1992 『近世越後賀(越中・能登・加賀)史料 第一』桂書房
- 古川知明・伊集守道 2008 「医王山東葉寺の文化四年銘宝篋印塔下の埋納縗石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第 27 号
- 古川知明・蓮沼優介 2009 「五輪山龍高寺宝篋印塔と縗石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第 28 号
- 古川知明・蓮沼優介 2011 「北畠山各願寺宝篋印塔調査報告」『富山市考古資料館紀要』第 30 号
- 古川知明 2011a 「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』第 30 号 富山考古学会
- 古川知明 2011b 「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』第 164 号 越中史壇会
- 古川知明 2011c 「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』10
- 古川知明 2012 「近世富山町石工について」『富山市の遺跡物語』第 13 号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2013 「富山町石工伯伝右衛門について」『富山市の遺跡物語』第 14 号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 柳町郷土史編集委員会編 1996 『富山柳町のれきし』

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とやましないせきぞうぶつとうちょうさほうこくしょさん							
書名	富山市内石造物等調査報告書Ⅲ							
副書名								
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	69							
編著者名	古川知明							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 Tel. 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2014年3月31日							
所収文化財名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
近世石造物	富山市内各所	市町村	遺跡番号			20130401 ～ 20140331		文化財調査
所収文化財名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
近世石造物	宝篋印塔	江戸			海蔵寺境内・千光寺境内・刀尾寺境内・帝龍寺境内・吉祥寺境内			
	雪見燈籠	江戸			金刀比羅神社境内・倉田邸庭園・越中稻荷神社境内			
	一字一石塔	江戸			海翁寺境内			
要約	富山町石工佐伯伝右衛門が製作した宝篋印塔3基、富山町石工見上兵右衛門が製作した宝篋印塔1基、神通川石工石屋浅吉が製作した宝篋印塔1基の調査を行なった。 佐伯伝右衛門は2代にわたる。 見上兵右衛門は、吉祥寺のほか3基の宝篋印塔を製作し、いずれも富山藩士金岡氏が願主となっているものである。 県内東部に所在する六角型雪見燈籠は、幕末から近代初期に常願寺川石工により製作された。年代的に変遷過程が把握可能である。金沢城庭園等にも類似型式の雪見燈籠が存在しており、関連性の解明が今後の課題である。							

富山市埋蔵文化財調査報告 69

富山市内石造物等調査報告書Ⅲ

発行日 平成 26（2014）年 3月 31 日

発行機関 富山市教育委員会

編集機関 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山県富山市愛宕町1丁目2番24号

☎ 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-02@city.toyama.lg.jp

印刷 前田印刷株式会社

